

平安通志

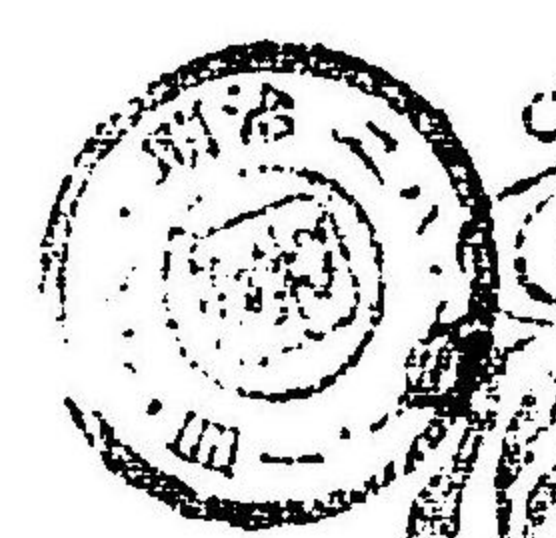
一

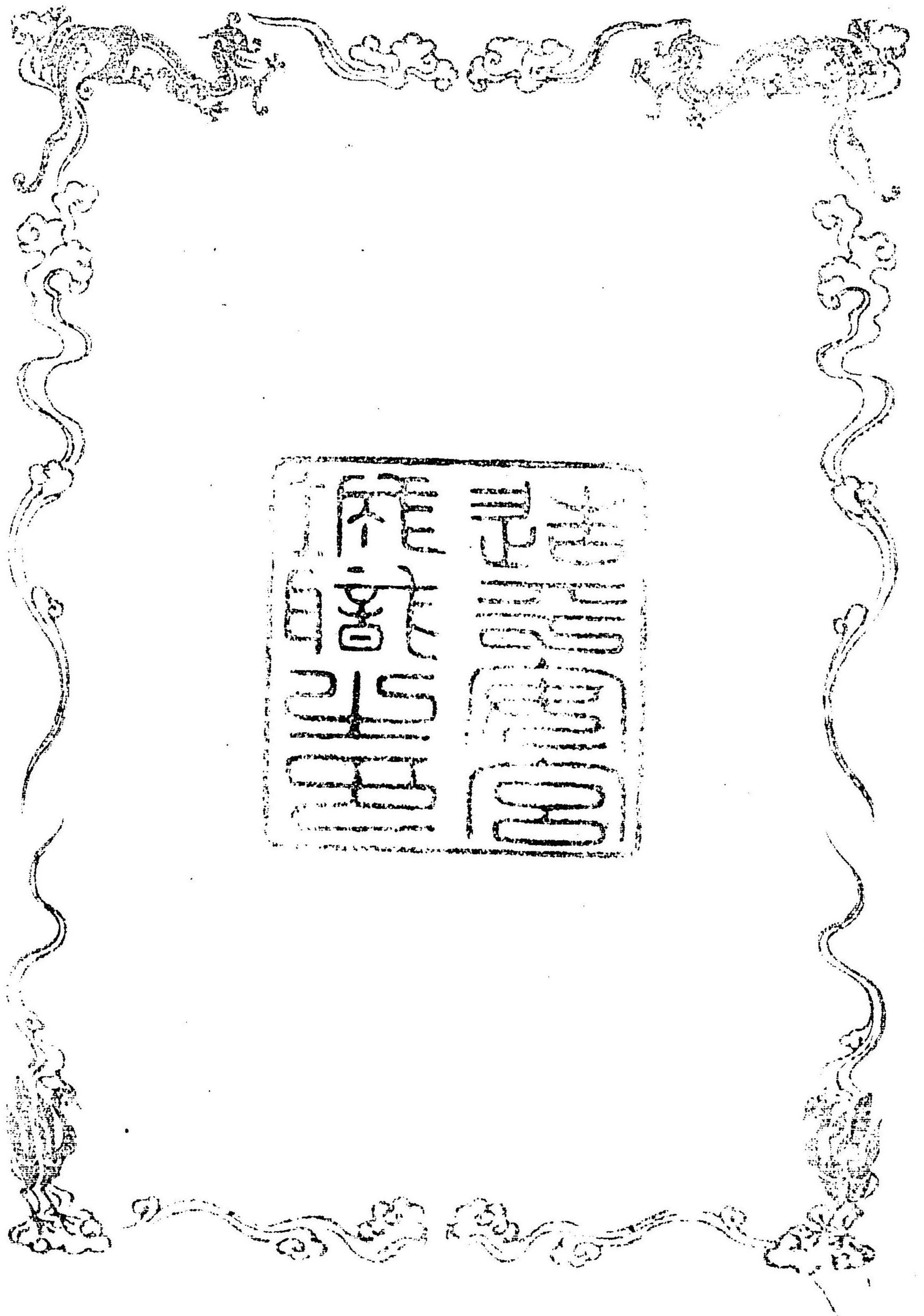
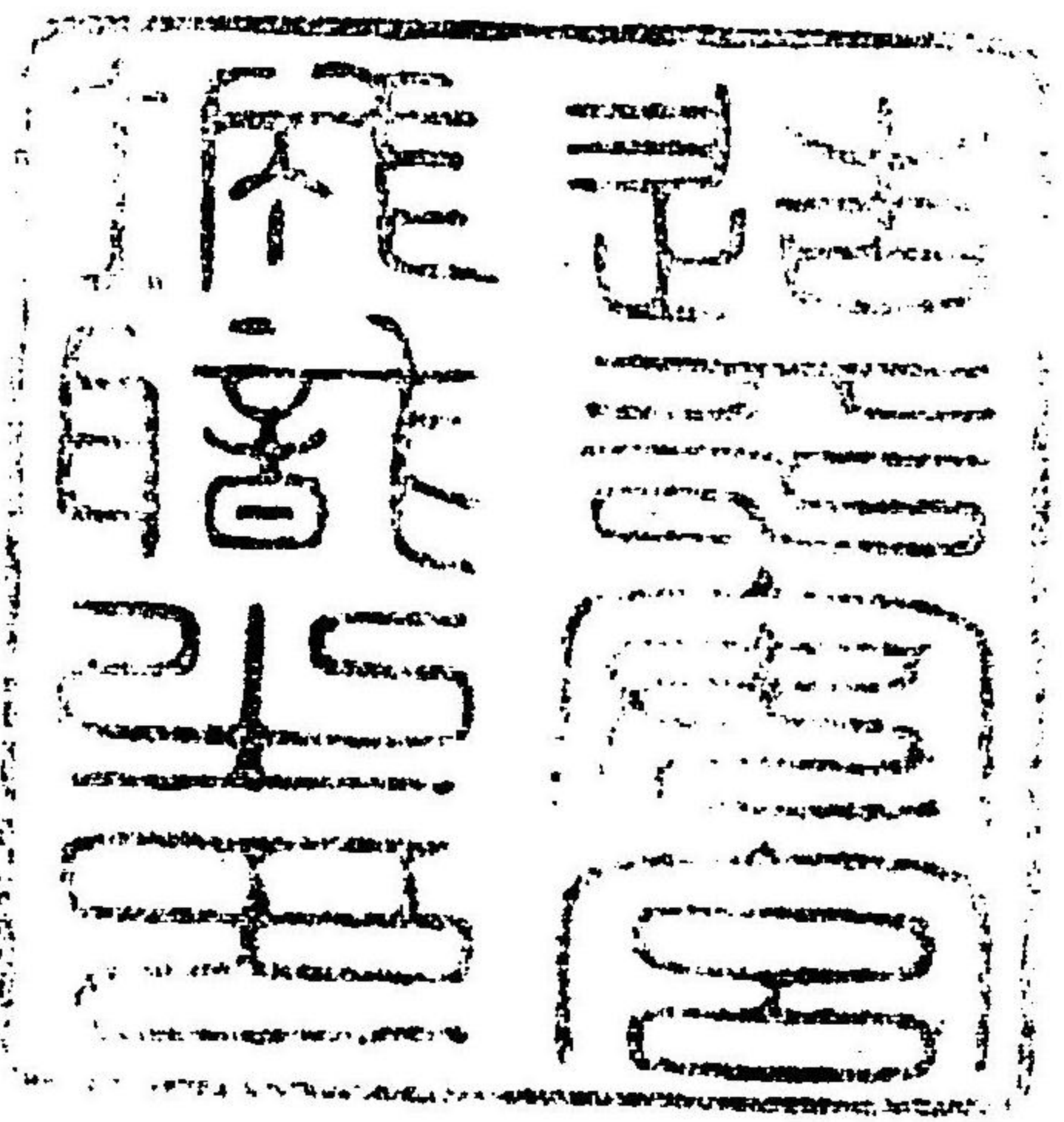
110
20
60

館書圖京東			
文	文	文	文
冊	號	架	函
類	類	類	類

篆書印文：上海圖書館藏

篆書印文：上海圖書館藏

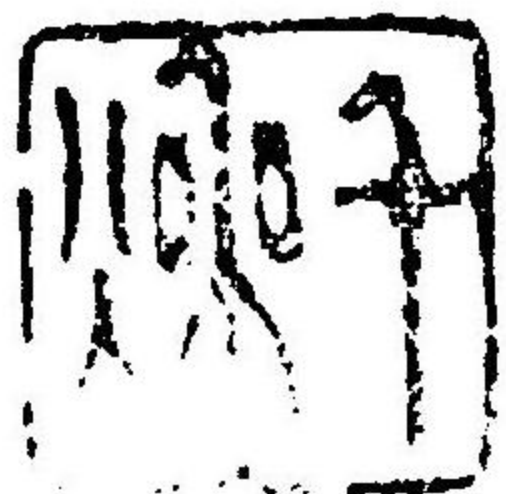




是延曆官印及造平安宮城職印之影本也平安通志
成乃模勒以弁卷首恭惟
桓武天皇睿聖剛明允文允武以恢弘
天業其經綸天下造營神京蓋用此印以行之今
對影本猶覺延曆雄圖赫々于紙上

明治二十八年九月十五日

京都府知事渡邊千秋謹識



山河襟帶永護



五五九

皇猷

彰仁題



正史の通志序



平安末の世に於ては、
高の海客ありて、
抑々日本書紀、
と云ふ、
如く其の古くは、
と云ふ、
あつたから

た二つは地味りあふまのDimekのいふと
まゝにまひしまよりまゝにまゝにまゝにま
とくまの對等な陸りなまゝのまゝにまゝに
●まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにま

まの承くこれにまのつとをてまの
京前よりさうんちるの財にまのつとを
まのつとを餘金のあひまのつとを
この通書よのきそ世の利害得失とあ
まのつとを古と現とを將及と官とまの
慶するまのつとをまのつとをこのつとを
本又まのつとをの建議よりまのつとを
書くつとをこれとを忠告より陽本とすれ

まのつとをとをりてまのつとを傷入事
目とつとを切程と替し日夜精勵して僅
くまのつとを編纂する其の類のつとを
つとを校訂のつとをまのつとを編纂する
とをまのつとを編纂するつとを編纂する
つとを編纂するつとを編纂するつとを
つとを編纂するつとを編纂するつとを
つとを編纂するつとを編纂するつとを
つとを編纂するつとを編纂するつとを

この編纂にまゐる 平安朝の繁栄と
加ふるのひまのちよとを 修して一巻と巻を
一巻一巻とまゐる 一首の歌をまゐる
心をまゐる ちよのちよとを
はらうとまゐる ちよのちよとを

明治二十八年四月三日信子蒙福西美齋



序

開闢以還 皇統一系與天壤無窮我
國體之尊不必費稱揚且問九鼎卜居百
世不移衣冠聚焉舟車會焉如我平安城
宇內萬國有之乎曰不有也舊祠巨剎星
羅棋列堂宇大而園林幽如我平安城宇
內萬國有之乎曰不有也畫幅書卷古代

遺墨儼存到于今如我平安城有之乎曰
不有也錦繡美雕刻巧磁器銅器漆器亦
皆精良如我平安城宇內萬國有之乎曰
不有也山圍水繞花笑鳥啞四時景物娛
人目如我平安城宇內萬國有之乎曰不
有也然則居此地者人生幸福莫以加焉
而不知其所由可乎今茲乙未距

桓武天皇奠都平安之時實一千一百年
衆迓仰 盛德欲建祠祀其 靈先
期有所奏請尋請獻贊模造當時大極殿
為之拜殿並允可興役庶民子來不日成
之結構宏麗金碧煌燿號曰 平安神
宮列官幣大社 天使蒞修祭典焉而
此地又開內國勸業博覽會百貨輻輳無

物不備於是士女來集不問海內外都下
繁昌稱未曾有先是京都府僚湯本君文
彥建議纂修平安通志癸巳冬開局今春
脫稿歲月雖不久亦能涉群書考古今自
山川風土制度文物以迄宮苑寺觀名勝
舊跡上下千餘年間事係平安者部舉類
聚細大靡遺非致意厚而用力專孰能及

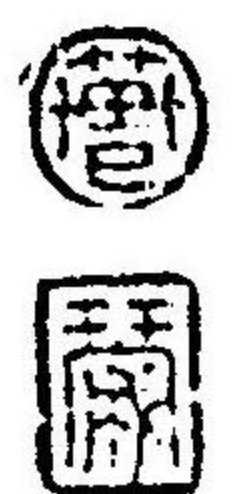
此余嘗讀洛陽伽藍記汴京遺蹟志長安
志諸書體例非不整文筆非不美援引考
據非不精且確顧荒宮廢苑追說前朝不
能無黍離麥秀之歎而此書則否且夫延
曆東伐大拓疆土貽謀所存 子承
孫繼是故

今上中興百事更張今又六師外征取城

畧地威武宣耀於
祖宗有光此書刊行則邦人皆知平安之
所以為平安而宇內萬國亦將知日本之
所以為日本矣於是乎序
明治乙未紀元前後三日

文學博士甕江川田劉撰

巖本範治書



平安通志序
我朝建都上古邈矣史不紀其詳
神武帝始遷都于橿原嗣後
列聖相承遷都於數所至
桓武帝觀山河之形勝因水陸之
利更奠皇都于山城稱平安京永
為不遷之都蓋
天日嗣業



神武帝創之樓原宮

崇神帝創之拂蘿宮

天智帝御于滋賀宮廊通為恆

弘高

桓武帝英邁天挺運會中興洗

刷宿弊經營新京建制度定文

物掃蕩異彩於域表擴其文

敷武德秩然具備於然煥發

可謂集大成矣而其宏業偉蹟

古彼千有餘年間悉奉安京制

度文物之沿革治亂興廢之事

歷未有輯載之一書者也今茲

明治不未實為

桓武帝奠都以來一千百年京

都市民足謀將大修黃都紀念

祭以頌揚

平天通志

帝之偉烈計畫已成施設咸備
而修史之事亦與焉乃命府詹湯
本支考尋考搜

帝之偉蹟與黃都以選平有餘
年間之可歷稱載于古博領雲
侯之姻煥于天下東遺于後昆文
考尋柱捫經管宗事歷于羣
書問考據于名匠起稿于

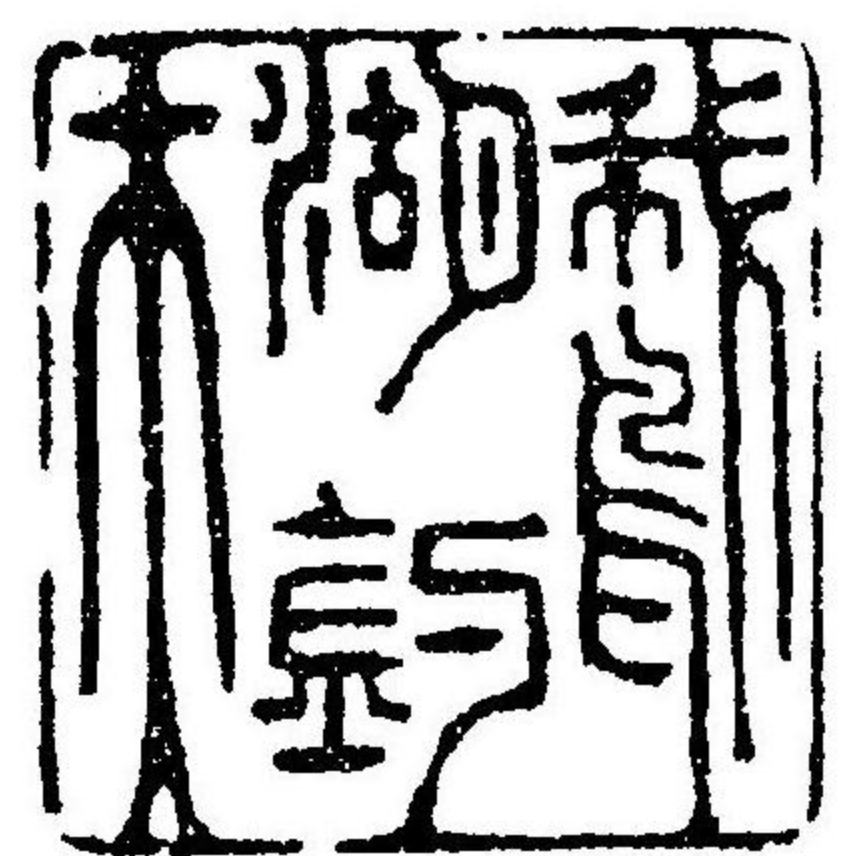
桓武帝之屬都撰筆于明治之考
日自典章制度之沿革治亂興
廢之事蹟以及工藝之原由美
術之源流古編四類為卷六十
名曰平安通志書成來時曰以
桓武帝洪業之偉大與千有餘年
間事歷之繁浩不自拂敢編會素
此書涉滿疎脫之譏固知不免然

賜閣下一言以傳于後代則何幸如之
余受而讀之上下千年縱橫數十
萬言時或不無掛漏然以短迫之
歲月寡單之人真能成此大書
述其用心之精綴留意之周到
洵可古者矣而
帝之洪業偉烈与彼千一有餘
年間之事蹟庶幾炳烺于天下

集遺于後昆而市民自託之意蓋
亦完足矣讀畢欣然為之序

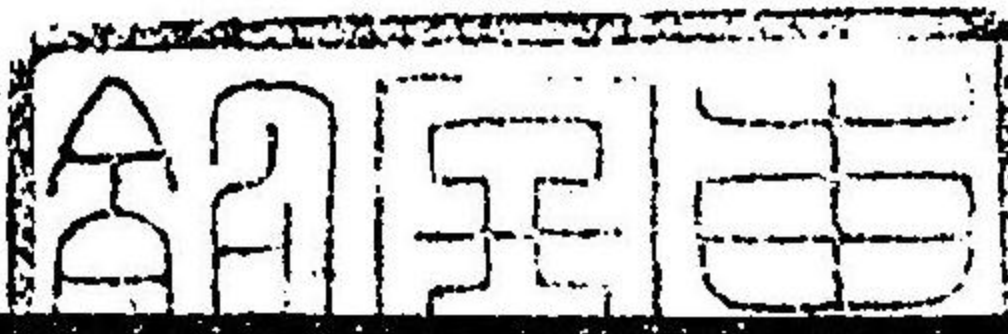
明治二十六年九月十日

京都府知事渡邊千秋撰并書



平安通志編纂議

夫レ平安遷都紀念祭ノ事タル實ニ京都ノ美事皇國ノ盛典ニシテ内ハ以テ
 聖皇ノ偉業ヲ發揚スヘク外ハ以テ帝國ノ光輝ヲ照耀スルニ足ル是レ洵ニ稀
 世ノ大儀ナレハ則平安京ニ係ル一大著述ヲナシ此一千百年間ノ事蹟ヲ知
 シムルノ舉ナカルヘカラス是レ此祭事ニ伴フ所ノ一大要務タリ故ニ客年十
 月紀念祭委員ノ内外ニ發布セシ旨趣書ニ於テ縷々其事ヲ記述セリ曰ク我京
 都市民ハ平安京遷都千百年紀念祭ヲ執行シ桓武天皇ノ尊靈ヲ奉祭シ其聖
 德ヲ追慕シ其鴻業ヲ瞻仰シ此千百年間ニ於テ發達セシ事業ヲ表彰シ我日本
 帝國ノ隆運ヲ賀セントス又曰ク京都市ハ此祝祭ノ爲ニ建都以來ノ制度文物
 美術工藝其他百般ノ沿革變遷ヲ考明シ之ヲ公示シ我國古來文化開進ノ事跡
 ナ普ク内外人ニ知ラシメントス又曰ク如此種々ノ事物ヲ湊合シ此紀念祭ヲ
 盛大ニシ此紀念祭ヨリシテ上ハ大日本帝國ノ爲メ又全國公衆ノ爲メ有益ナ
 ル功効ヲ奏センコトヲ企望シテ已マサルナリト嗚呼宜ナル哉此言ヤ苟モ此
 舉アルナクシハ假令其式典ヲ盛大ニシ其殫蕪ヲ豐備ニスルモ其祭ヲ行フ所
 ノ事内外ニ表白セス縦ヒ神明ハ冥々ノ中ニ饗クト雖モ人事ノ感深カラサル
 ナ如何ノ故ニ此紀念祭ニツキ平安京ノ一大著述ヲ爲スハ實ニ第一ノ要務ト



ス、古來京都ニ係ル書籍甚々少ナク、間々雍州府志山城志山城名勝志ノ類、或ハ名所圖會林泉圖會ノ如キアリト雖モ、概ネ舊跡ノ探訪名區ノ勝覽ニ供スルニ過キス、況ヤ年代已ニ久シク、其間變更少カラサルヲヤ、故ヲ以テ延曆奠鼎ノ英圖ヲ發顯シ、京都ノ重ヲ表スルニ足ル者ニ至リテ、猶ホ一編ノ成書アルコトナシ、嗚呼王室中微史官廢絶、誰カ復タ此大手筆ニ及フ者ソ、況ヤ中古亂離、承クルニ霸政ヲ以テシ、帝室ノ美事京都ノ名譽ニ關スルコトハ、務テ檢束ヲ加ヘ、以テ其光輝ノ埋没セシメシヤ、文彦管テ之ヲ慨ス、謂フ世界萬國、帝京ノ最モ久テ經ル者、支那洛陽ト、西洋羅馬ト、我平安京アル而已、然レトモ他ノ二京ハ主亡ヒ國破レ、屢廢墟トナレハ、則千載變セス、終古淪ヲサルモノ、獨リ我平安京アル而已、嗟乎萬世一系ノ帝國ニアラサレハ、豈此千載不遷ノ舊京アラシヤ、千載不遷ノ舊京アル、益以テ萬世一系ノ國體ヲ輝カスニ足レリ、而シテ莫都以來千百年間、我帝室ノ汗隆、邦家ノ盛衰、政法人事凡百ノ事物ニ至ルマテ、未ダ管テ此平安京ト相關涉セサルハ、アラス、宋人洛陽ノ事ヲ記シテ曰ク、天下之治亂、候洛陽之盛衰而可知矣ト、余平安京ニ於テモ亦云爾、且近年海關一タヒ開ケ、萬國交通、觀光ノ客年一年ヨリ多ク、争ヒ來テ此京洛ニ入ル、其舊觀ヲ賞シ、其風物ヲ愛シ、稱シテ以テ世界ノ名都人寰ノ仙境ト爲ス、實ニ帝國ノ名譽ト謂フヘシ、然ルニ其

舊事ヲ問フニ及ンテハ、則茫然答フヘキナシ、之ヲ内ニシテハ、聖皇ノ英畧ヲ發揚スルアタハス、之ヲ外ニシテハ帝國ノ名譽ヲ顯彰スルアタハス、徒ニ山明水媚ト、名勝舊跡ノ賞遊トニ止ラシムルハ、實ニ一大遺憾ト謂フヘシ、文彦管テ自ラ量ラヌ、先キニ其綱領ヲ作り、他年ノ資料ニ供セント欲シ、試ニ京都沿革考一冊ヲ起草シ、附スルニ平安圖式ヲ以テセリ、僅ニ其一斑ヲ窺フヘント雖モ、固ヨリ未ダ完成ニ至ラス、夫レ京都ニ係ル事實ノ多キハ、擣キ述フル所ノ如クナルモ、千年ノ久シキ、屢々亂離ニ遭ヒ、火災ニ罹リ、版蕩殘滅ノ餘、文獻消滅、舊記散逸、殆ト其大半ヲ亡シ、明治維新ノ際、又其大半ヲ失シ、今日ニ至リテハ、史料ニ供スヘキモノ甚々少ナク、蒐集ノ難キ、考證ノ易カラサル、淺學不文ノ能ク做ス所ニアラス、然レトモ此編タル京都ニ於テハ必須ノ書タルヲ以テ、早晚其時ニ會シ、大方ノ力ヲ籍テ、以テ平日ノ志ヲ償ハシ、コトヲ期セリ、今ヤ幸ニ遷都紀念祭ノ執行ニ會シ、平安京ニ關スル著書必須ノ時ナルヲ以テ、此事ノ緊要ト、平生ノ志望ヲ説キ、此機會ニ於テ延曆奠都以來ノ事實ヲ網羅蒐輯シ、桓武天皇叡聖文武ノ資ヲ以テ、大ニ經綸ノ術ヲ行ヒ、天業ヲ恢弘シ、皇威ヲ振張シ、給ヒシ英略宏謨、平安京建奠ノ事由、及ヒ其經畫規模、宮殿官府市坊ノ制ヨリ、此一千百年ノ間政權ノ變遷、文獻法制、人事藝文、凡百ノ事項ニ至ルマテ、苟モ我平安京ニ係ル

者ハ其類ヲ分テ其群ニ從ヒ體例ヲ定メ準則ヲ立テ之ヲ編纂著述シ之ヲ明ニ
スルニ圖式ヲ以テシ之ヲ通スルニ長曆ヲ以テシ平安通志ノ一書ヲ爲シ此大
儀ニ當リ之ヲ桓武天皇ノ尊靈ニ奉シ且ツ内外ニ發行アラントテ望ム此事
タル固ヨリ大業ナルノミナラス其期日已ニ迫ルヲ以テ成功容易ナラスト雖
モ苟モ經畫其宜ヲ得編纂其要ニ適シ委任責成以テ其事ニ從ヘハ亦甚々難シ
ト爲サ、ルヘシ苟モ此業ニシテ成ルヲ得ハ則京都市ノ廣告其實ヲ得テ所謂
此千百年間ニ於テ發達セシ事業ヲ表彰シ其聖德ヲ追贊シ我國古來文化開進
ノ事跡ヲ普ク内外人ニ知ラシメ此紀念祭ヨリシテ上ハ大日本帝國ノ爲メ又
全國公衆ノ爲メ有益ナル功效ヲ奏スルニ庶幾カラシカ其書ノ體制編目ハ之
ヲ別冊ニ具セリ夫レ紀念祭ハ來ル廿八年ニ在リ其間猶ホ一年ヲ隔ツト雖モ
鳥兔奔放一日已ニ一日ノ短キヲ加フ而シテ其業ノ大且ツ難キハ僅々月日ノ
能ク成スヘキニアラス敢テ請フ此平安京ノ爲メ大日本帝國ノ爲メ特ニ此機
會ニ當リ平安通志ヲ編纂スル事ヲ速ニ決行アラントテ果シテ然レハ則世
界無比萬國無双ナル遷都一千百年紀念祭ノ實遠ク宇内ニ顯ハレ永ク萬世ニ
存シ其京都ノ重ヲ加ヘ帝國ノ光輝ヲ増ス豈啻ニ山明水媚ト名勝舊蹟トノ比
ナラン哉若シ此時機ヲ失シ之ヲ編纂セザレハ則京都ノ全書終ニ成期ナクシ

テ延曆ノ洪謨偉業ヲ發揚スルコトアダハサルノミナラス内外人ノ彼廣告ヲ
信シ輻湊麤至爭ヒ來リテ大盛典ノ光ヲ觀ントスル者大ニ失望スル所アラ
トス其ノ斯ノ如クナル時ハ則之カ爲メ反テ平安京ノ名譽ヲ害シ日本帝國ノ
光輝ヲ損センコトヲ恐ル

明治二十六年四月八日 平安遷都千百年紀念祭京都府委員湯本文彦

京都市ノ平安遷都紀念祭ヲ執行セントスルヤ平安京ノ史ヲ須ツ此時府屬
湯本文彦平安通志編纂ノ事ヲ建議ス京都市之ヲ可トシ其綱領及ヒ經費ヲ
議定シ文彦任シテ編纂ノ事ニ當リ予知事ノ旨ヲ承ケ其事務ヲ監ス今其書
成ル因テ建議ヲ首卷ニ掲ケ以テ編纂ノ事由ヲ明カニスト云フ

平安通志編纂事務長

明治二十八年七月

京都府書記官一阪俊太郎

編纂關係氏名

事務長 一阪俊太郎

編纂

主事兼編纂員 湯本 文彦

編纂員 増田 于信

編纂員 和田 英松

編纂員 中野 太郎

編纂員 佐藤 球

編纂員 生田目經徳

編纂員 中岡貞三郎

補助員 巖本 範治

補助員 大澤 敬之

補助員 山田 得多

補助員 阿形 精一

補助員 井關 良顯

補助員 中村 鼎五

補助員 水莖 磐樟

補助員 大村 西崖

補助員 吉田 秀穀

庶務 增井茂三郎

補助員

編纂事務委員

紀念祭委員長 內實甚三郎

紀念祭委員 久世 通章

紀念祭委員 西村治兵衛

紀念祭委員 雨森菊太郎

紀念祭委員 碓井小三郎

紀念祭委員 貞廣 太郎

紀念祭委員 西村 義民

凡例

一平安通志ハ平安京奠建ノ初メヨリ、明治年間ニ至ル、凡一千一百年間、此平安京ニ係ル事實ヲ綜攬通記シ、以テ桓武天皇ノ洪業偉烈ヲ發揚シ、一千百年ノ久シキヲ經タル帝都ノ光輝ヲ顯章スル爲メニ編纂スルモノトス、

一平安通志ハ、其年代一千百年ノ久シキニ亘リ、記事最モ多端ナルヲ以テ、部分類別之ヲ四編トナスコト左ノ如シ、

第一編

平安奠都事由考證ヨリ、平安京及大内裏造營年表、造營記事、並ニ其規程制度及ヒ盛衰沿革舊址測定ノ記事、里内裏、現今皇居離宮等ノ記事ヨリ、桓武天皇御紀、延曆詔勅、皇室記事、及ヒ延曆功臣傳、並ニ京都建設以來今日ニ至ルマテノ職制ヲ記ス、

第二編

延曆奠都以來、此平安京ニテ天下ヲ經綸セラレシ典章制度、即チ官制、兵制、法律、食貨、文學、禮儀等ノ概略ヨリ、平安京及ヒ山城國ニ係ル神社、佛寺、陵墓、名勝、舊蹟、美術、工藝、寶物、物産、風俗、人物等ノ事ヲ記ス、

第三編

平安奠都以來、此京都及ヒ近傍ニ於テ生シタル事實ノ大ナル者ヲ擧ケ、一事毎ニ紀事本末體ニ倣ヒ以テ之ヲ記シ、務メテ其實地ニ徴シ考説ヲ加ヘ、以テ國史ト相發明スルヲ期ス、

第四編

平安奠都以來今日ニ至ル一千百年間ノ長曆ニシテ、此平安京ニ在リシ事ヲ主トシ、京外ノ事ト雖トモ、大事件ハ之ヲ附記シ、以テ通覽ニ便ニス、

一本書體例ハ、我國ニ於テ蓋シ創始ニ屬セリ、一部ヲ各編ニ分テ、各編記事皆異ナルニ因リ、其體裁亦隨テ異ナラサルヲ得サルヲ以テ、別ニ凡例ヲ附シ以テ覽閱ニ便スルモノアリ、

一此書ハ引用書ヲ挿記ス、其行文中書名ヲ記スルモノハ然ラス、其引用書ヲ末尾ニ集録スルモノハ、諸書記スル所ヲ參取スルニヨル、

一挿圖ハ古圖書ニ據リ謄寫シタルモノアリ、新ニ考證シテ製シタルモノアリ、共ニ石版ニ附シ、之ヲ每卷末ニ集載ス、觀ルモノ其記事ト相參照スルヲ要ス、

一此書ハ各編ニ大別シ、各編中更ニ章ヲ分テ目ヲ立ツルヲ以テ、一事ニシテ各所ニ出ツルモノアリ、此類ハ互ニ詳略スル所アリ、觀ルモノ全部ヲ通覽シテ、其要ヲ得ルヲ要ス

一此書ハ平安京奠建及ヒ沿革ト從來ノ事實トヲ主トスルヲ以テ、古ヲ詳ニシテ今ヲ略ニス、古ハ知り難ク今ハ知り易キヲ以テナリ、

一此書編纂ニ着手セシハ、明治廿六年十二月ニシテ、其成稿ハ本年六月ニアリ、其間僅ニ一年半ニ過キス、經費豐ナラスシテ職員備ヘカタク、成功期アリ志料蒐輯ノ暇ナシ、故ヲ以テ日夜拮据、編目ヲ分テ各員ニ分課シ、以テ其功程ヲ急ニセリ、其稿本ニツキ各刪修スル所アリト雖トモ、未タ各部參照以テ體例ヲ整一ニスルノ暇ヲ得ス、然レトモ本書ハ平安遷都紀念祭ノ爲ニ編纂セル

モノナレハ、其祭典ニ先タテ必ス印刷製本セサルヘカラス、因テ東京ノ博士大家ニ大體上ノ校査ヲ求メ、以テ之ヲ印刷セリ、僅々年餘ノ歲月ヲ以テ、上下

一千百年、卷册六十ノ編著ヲ成ス、其間必ス誤謬ヲ免カレサルヲ知ル、猶ホ他日修訂刪補シ、以テ完成ニ就カンコトヲ期セリ、

一此書印刷ニ急ナリシヲ以テ、誤字及ヒ句讀假字遣ヒノ誤頗多シ、今正誤ヲ附スト雖トモ、遺漏猶ホ少カラサルヘシ、讀者ノ注意アラソコトヲ望ム、

一此書編纂ニ付テハ、東京博士大家ノ賛成ヲ得、特ニ帝國大學、圖書寮、帝國博物館、東京圖書館、及ヒ國學院、並ニ京都社寺、及ヒ舊家ノ圖書ヲ觀覽スルノ便ヲ得、其助ケヲ得ルコト少カラス、茲ニ記シ以テ其謝意ヲ表ス、

明治廿八年六月

主事 湯本文彦

平安通志總目

卷之一

第一編

平安京 一

總說

平安京奠都事由

平安京造營年表

平安京總記

地盤

周圍

廣袤

羅城門
坊 坊名稱

坊制

坊職

街衢ノ制 街衢名稱

市坊道路規制

川路

山城國延曆以前事蹟略圖
山城國全圖
平安京全圖及川路圖
羅城門及朱雀九條大路圖
坊制圖并二町內通路圖
四行八門圖並三市人町圖
縱大路小路圖
橫大路小路圖

卷之二

第一編

平安京 二

大內裏外ノ官衙禁苑其他

神泉苑

大學寮

勸學院

獎學院

弘文院

學館院

淳和院

綜藝種智院

左右衛門府

左右京職

東西市

東西鴻臚館

修理職

檢非違使廳

木工寮

穀倉院

義倉

常平倉

囚獄司

官衙附屬町

大學寮圖 =

廟堂院孔子十哲座位圖

卷之三

第一編

大內裏 一

大內裏總說

外郭諸門

朱雀門

美福門

皇嘉門

陽明門

待賢門

郁芳門

殷富門

藻壁門

談天門

達智門

偉鑿門

安嘉門

上東門

上西門

垣

孺地

陸

橋

平安京全部實測記事
平安京全部實測圖

都堂院講座圖
京職圖

私學所在圖
東西市圖

神泉苑所傳宮城圖
南都所傳宮城圖殘缺
朱雀門及仗舍圖
陽明門圖

南都二條法眼家所傳宮城圖
京兆圖所載宮城圖
據諸圖所訂正宮城圖圖考殿所載
上東門圖

卷之四

第一編

大內裏 二

皇居 上

皇居總記

外郭諸門

建禮門

宜秋門

式乾門

內郭諸門

承明門

玄暉門

建春門

修明門

瓦垣

宣陽門

永安門

朔平門

春華門

陰明門

長樂門

延政門
徽安門
廊

嘉陽門
遊義門

安喜門
武德門

宿衛陣舍

左右大將直廬

左右兵衛督宿

左右兵衛陣

南舍北舍

左右兵衛佐同將監宿所

宮殿

紫宸殿

仁壽殿

承香殿

清涼殿

後涼殿

卷之五

第一編

大內裏 三

皇居 下

宮殿

綾綺殿

校書殿

溫明殿

春興殿

安福殿

宜陽殿

貞觀殿 常寧殿 弘徽殿
麗景殿 宣耀殿 登華殿

諸舍 昭陽舍 同北舍 飛香舍 同北舍 淑景舍
同北舍 凝華舍

襲芳舍 但シ宮中諸掖門其他ノ目錄ハ之ヲ略ス
皇太子宿 御輿宿 朱器殿

藏人所宿所 進物所 造物所
蘭林坊 桂芳坊 華芳坊

御樋殿 內膳司 寵神
采女町 絲所

中和院 東官坊 梨本院
職曹司 眞言院

大内裏皇居沿革記事
大内裏皇居全圖

卷之六

第一編

大内裏 四

朝堂院

朝堂院總記 大極殿 小安殿

蒼龍樓 白虎樓 大極殿南廷

龍尾道 龍尾道南廷 昌福堂

含章堂 承光堂 明禮堂

延休堂 合嘉堂 顯章堂

延祿堂 暉章堂 康樂堂

修式堂 永寧堂 東西朝集堂

應天門 栖鳳樓 翔鸞樓

會昌門 昭慶門 宣政門

章善門 步廊

掖門 東福門 宣光門 昭訓門

西華門

壽成門

光範門

嘉喜門

永福門

通陽門

感化門

合耀門

章德門

長樂門

慶儀門

顯親門

敬法門

興禮門

章義門

永嘉門

朝堂院沿革記事

豐樂院

武德殿

朝堂院全圖

大極殿全圖

據諸圖書所考定大極殿圖圖考證

據古圖及南都所傳圖等所考定小安殿及登廊圖上全

豐樂院圖

中和院圖

武德殿圖

卷之七

第一編

大內裏 五

官省

神祇官

西院

八神殿

齋戶殿

北廳

東舍

南廳

高藏

御幣殿

東院

東廳

北舍

大炊殿

井舍

南舍

沿革

太政官

正廳

東廳

西廳

步廊

後堂

朝所

南門

沿革

勘解由使

文殿

辨官曹司

造曹司

中務省

侍從局	內舍人局	主鑿局
主鈴局	監物局	陰陽寮
大舍人寮	侍從所厨	圖書寮
內藏寮	掃部寮	縫殿寮
內匠寮	中務厨	御井
式部省		
治部省	立蕃寮	雅樂寮
諸陵寮		
民部省	主稅寮	廩院
主計寮		
兵部省		
刑部省		
判事局		
大藏省		
正倉院	率分藏	長殿
宮内省		

園韓神	大膳職	大炊寮
供御院	主殿寮	典藥寮
正親司	采女司	造酒司
誓院	西院	主水司
彈正臺	左右近衛府	左右兵衛府
兵庫寮	左右馬寮	一本御書所
外記廳	侍從所	內豎所
酒殿	釜殿	大歌所
大宿直所	內教坊	茶園
漆室	太政官圖	神祇官圖
卷之八		
第一編		
里内裏記事	土御門内裏	閑院内裏
總說		
富小路内裏		
平安京沿革		

京都古圖

閑院內裏圖

拾芥抄所載東京圖

圖考證所引拾芥抄左京圖

清竊眼抄所載圖

異本拾芥抄所載東京圖

神泉苑所傳左右京圖

卷之九

第一編

京都皇居

總記

諸舍

京都皇居沿革記事

外郭

禁園

宮殿

皇后御殿

御苑

仙洞舊院

大宮御所

寬政以前皇居全圖

安政皇居全圖

安政遺傳
志所載

元和年間禁裡仙洞略圖

卷之十

第一編

離宮

二條離宮

修學院離宮

桂離宮

現今京都記事

現今京都市街圖

卷之十一

第一編

桓武天皇御紀 上

卷之十二

第一編

桓武天皇御紀 中

卷之十三

第一編

桓武天皇御紀 下

附傳

皇妃傳

皇子傳

皇女傳

卷之十四

第一編

延曆詔勅 上

寶龜四年正月二日立太子詔	天應元年四月三日讓位詔
同年四月十五日即位詔	同年六月朔詔
同年十二月二十日詔	同年十二月二十三日詔
延曆元年七月二十五日詔	同年七月二十九日詔
同年八月十九日詔	同年十二月四日詔
同二年三月二十二日勅	同年四月十五日勅
同年四月十九日勅	同年六月六日勅
同年六月十日勅	同年七月晦詔
同年十二月五日官符	同年十二月六日勅
同三年三月二十五日勅	同年十月晦勅
同年十一月朔勅	同年十一月二十日勅
同年十二月十三日詔	同四年五月十九日詔
同年五月二十四日勅	同年五月二十五日勅
同年六月十日勅	同年六月二十四日官符
同年七月二十四日勅	同年十二月九日勅

同五年四月十一日詔	同五年六月朔勅
同六年正月二十一日勅	同年三月二十日詔
同年十月八日詔	同年十一月五日祭文
同七年三月三日勅	同七年四月十一日勅
同年九月二十六日詔	同年十二月六日詔
同八年五月十二日勅	同年六月三日勅
同年六月九日勅	同年七月十四日勅
同年七月十七日勅	同年九月十九日詔
同九年閏三月十六日詔	同年四月十六日勅
同年八月八日官符	同年九月十三日詔
同年十一月三日勅	同年十二月朔詔
同十年二月十二日官符	同年二月十八日官符
同年九月十六日官符	同十一年六月七日詔
同年六月十四日官符	同年七月三日官符
同年七月二十五日勅	同年七月二十七日勅
同年十一月三日詔	同十二年正月六日勅

第一編

延曆詔勅 下

延曆十三年十月廿九日詔	同年十一月七日勅
同年十一月八日詔	同十四年四月二十三日勅
同年四月二十七日勅並官符	同年閏七月朔詔
同年閏七月五日勅	同年閏七月二十一日勅
同年十一月二十三日官符	同十五年五月十七日璽書
同年六月八日勅	同年八月二十一日勅
同年九月朔日勅	同年十月十五日詔
同年十一月八日詔	同年十一月二十一日官符
同年十二月九日勅	同十六年正月二十五日勅
同年二月二十八日勅	同年四月二十三日官符
同年五月二十八日勅	同年六月六日詔
同年六月九日詔	同年六月十七日勅
同年七月十一日勅	同年八月三日官符

同年八月三日官符	同十七年二月五日官符
同年二月八日勅	同年二月十五日勅
同年三月十六日詔	同年四月四日勅
同年四月十五日勅	同年四月十六日官符
同年五月十九日賜渤海國王璽書	
同年閏五月二十三日勅	同年六月二十一日勅
同年七月二十八日勅	同年九月十六日勅
同年九月二十三日勅	同年十月四日官符
同年十月十二日勅	同年十月十九日官符
同年十月二十日勅	同年十二月八日官符
同十八年二月十五日勅	同年三月九日官符
同年四月九日勅	同年四月十五日賜渤海國王璽書
同年六月五日勅	同年六月二十三日詔
同年八月二十六日勅	同年十一月二十四日勅
同年十二月二十九日勅	同十九年二月三日勅
同年二月四日勅	同年二月二十三日官符

同年四月九日勅	同年五月十六日勅
同年十一月二十六日勅	同年十二月十九日官符
同二十年四月十五日勅	同年四月二十七日勅
同年十二月十三日官符	同二十一年正月五日勅
同年六月二十六日官符	同年八月二十七日勅
同年十月二十二日官符	同年□□□官符
同二十二年六月四日勅	同年十一月十五日詔
同二十三年正月十一日勅	同年三月二十二日官符
同年四月二十七日制	同年十月十日詔
同年十月十二日詔	同年十二月二十一日勅
同二十四年正月三日勅	同年三月二十七日詔
同年七月二十五日勅	同年十二月二十二日勅
同二十五年正月九日勅	同年三月十七日勅

卷之十六

第一編

皇室紀事 上

自平城天皇至仲恭天皇

卷之十七

第一編

皇室紀事 中

自後堀川天皇至後桃園天皇

卷之十八

第一編

皇室紀事 下

自光格天皇至今上天皇

卷之十九

第一編

延曆功臣傳

皇族制度略記

御料略記

藤原百川 子精明、兄田麻呂、視本考

藤原種繼

藤原是公

藤原繼繩

藤原小黑麻呂 子葛野麻呂、從兄內麻呂

神王 淡海三船

佐伯今毛人

大伴弟麻呂 族大伴家持

坂上田村麻呂

橋入居

菅野真道

紀古佐美

和氣清麻呂 抄廣造

卷之二十

第一編

京都歷代職制略記

卷之二十一

第二編

總說

官制志

卷之二十二

第二編

法制志

卷之二十三

第二編

兵制志

卷之二十四

第二編

禮儀志

恒例

臨時

卷之二十五

第二編

祭祀志

卷之二十六

第二編

文學志

學校

漢文學

詩賦

國文學

和歌

洋學

卷之二十七

第二編

食貨志

總說

田制

賦租

卷之二十八

第二編

食貨志

度量衡

貨幣

商估

運輸

戶口

卷之二十九

第二編

氏族志

服飾志

卷之三十

第二編

國郡志

外交志

卷之三十一

第二編

神社志 上

官幣社

- 賀茂別當神社
- 賀茂御祖神社
- 八咫男神社
- 八幡宮
- 松尾宮
- 梅宮
- 平野

- 黃王神社
- 大原野神社
- 豐國神社
- 梨木神社

卷之三十二

第二編

神社志 下

府社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

鄉

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

社

卷之三十三

第二編

佛寺志

平安通志 首卷

天台宗

頂法寺 妙法門 聖法院 眞正院 眞樂王院 眞祥寺 眞定寺 眞持寺 眞味院 眞慶寺 眞相院 眞輪寺 眞迎院 眞來院 眞不院 眞動院 眞林沙

卷之三十四

第二編

佛寺志 中

眞言宗

龍實院 眞王院 眞國院 眞性寺 眞智院 眞水院 眞龍院 眞和院 眞慶寺 眞剛院 眞法安院 眞祥院 眞心院 眞高院 眞山泉 眞三

卷之三十五

第二編

佛寺志 下

臨濟宗

南華院 南五院 鹿王院 臨川院 地光院 長持院 天龍寺

曹洞宗

相國寺 興聖寺 大聖寺 仁安寺 眞心寺 眞持院 眞慶寺 眞剛院 眞法安院 眞祥院 眞心院 眞高院 眞山泉 眞三

卷之三十六

第二編

宗教志

總說 天台 眞言 淨土 臨濟 曹洞 黃檗 眞宗 日蓮宗 時宗 法相宗

卷之三十七

第二編

人物志

卷之三十八

第二編

陵墓志

山陵 式墓 諸墓

卷之三十九

第二編

物產志

西障織物
 器及金屬器
 指物紙工
 丹 色紙短册
 山 城 茶
 竹類染物
 祇細工織
 香煎錫細工
 紙工七
 石 康 葉 刺
 針 工 扇 糸
 馬 粉 圓 絲
 具 照 陶 器
 樂 器 金 箔 器
 冠 風 簾 漆 器
 法 滿 品 綢
 衣 香

卷之四十

第二編

美術工藝志 一

繪畫 書

卷之四十一

第二編

美術工藝志 二

織物 陶器 漆器 冶金 友染 刺繡

卷之四十二

第二編

美術工藝志 三

彫刻 園藝

卷之四十三

美術工藝志 四

建築

卷之四十四

第二編

寶物志 上

繪畫

卷之四十五

第二編

寶物志 中

文書 香 紙

卷之四十六

天慶之亂
院政

安和之變

外戚專權

卷之五十

第三編

歷史紀事 二

朝綱弛廢
平治之亂
福原遷都
賴朝上洛

僧徒猖獗
平氏
源義仲
藤原兼實

保元之亂
治承之變
源義經

卷之五十一

第三編

歷史紀事 三

承久之亂
將軍廢立
西園寺氏
京師戰亂

六波羅探題
元寇之難
元弘之亂
南北朝合併

五攝家
兩統交立
建武中興
室町幕府

北山行幸

卷之五十二

第三編

歷史紀事 四

義滿驕僭
德政
義政好事
管領爭權
織田氏勤王

明德之役
日野有光之變
京都衰頹
足利氏衰亡
本能寺之變

嘉吉之變
應仁之亂
皇室否運
尾州密勅
光秀伏誅

卷之五十三

第三編

歷史紀事 五

豐臣氏京政
德川氏執大政
板倉父子
尊號之議

聚樂行幸
東福門院入內
尊王起原
諡號復古

豐臣氏土木
二條城行幸
寬政造管
將軍上洛

和宮東下

癸亥之變

賀茂石清水行幸

甲子之變

卷之五十四

第三編

歷史紀事 六

大政返上

王政復古

六師親征

今上登極

丁丑駐輦

琵琶湖疏水工事

五事誓約

車駕東行

皇室典範

卷之五十五

第四編

平安京長曆 一

總說

自桓武天皇至宇多天皇

卷之五十六

第四編

平安京長曆 二

自醍醐天皇至後三條天皇

卷之五十七

第四編

平安京長曆 三

自白河天皇至後鳥羽天皇

卷之五十八

第四編

平安京長曆 四

自土御門天皇至後龜山天皇

卷之五十九

第四編

平安京長曆 五

自後小松天皇至後櫻町天皇

卷之六十

第四編

平安京長曆 六

自後桃園天皇至今上天皇

合六十卷

平安通志卷之一

第一編

湯本文彦等編



第一編ハ全編ノ綱領ニシテ、本書編纂ノ主要專ラ此ニアリ、其記スル所ハ平安京ノ事、桓武天皇ノ御紀、皇室ニ係ル事、京都市ニ係ル事等ナリ、曰ク平安奠都事由以テ桓武天皇此地ヲ相シ、千歳不遷ノ皇京ヲ建奠セラレシ事ヲ、當時ノ事情ト山城地形トニ照ラシ、之ヲ考明シ、附スルニ延曆以前山城國事跡圖ト、現今山城國全圖ト、ナ以テス、曰ク平安京造管年表、以テ其造管ノ年月ヲ示ス、曰ク平安京記事、以テ平安京全躰ノ規模經畫ヲ記シ、左右京ニアル所ノ官府別宮ニ及フ、由テ大内裏記事、以テ大内裏規模經畫ヨリ、皇居宮殿諸舍、朝堂院、大極殿、豐樂院、武德殿、神祇官、太政官、八省、六衛、寮、司、諸衙ヲ記シ、附スルニ其沿革ト、圖式ト、ヲ以テス、曰ク里内裏、以テ里内裏ノ事ヲ記ス、曰ク京都沿革、曰ク京都古圖、以テ京都沿革ト、京都古圖ヲ記ス、曰ク京都皇居、以テ京都皇居ノ創立沿革、及地城宮殿ヲ記シ、附スルニ仙洞舊院、大宮御所ヲ以テシ、且其圖ヲ附ス、曰ク離宮、以テ各所離宮ノ宮殿、林泉ヲ記ス、曰ク現今京都記事、以テ現今京都ノ事ヲ記シ、其圖ヲ附ス、以上ヲ平安京ノ記事トス、曰ク桓武天皇御紀、本紀ト、編年ト、ノ躰ニ効ヒ、以テ帝

ノ盛徳大業ヲ詳記シ、附スルニ皇妃皇子皇女ノ傳ヲ以テス、曰ク延曆詔勅、延曆ノ詔勅ヲ集メ、各其事實ヲ叙記シ、以テ帝ノ大業ヲ經綸シ、鴻謨ヲ宣揚セラレシ事實ヲ明ニス、曰ク皇室記事、平城天皇以下平安京ニ於テ御宇ノ天皇ノ事ヲ記シ、附スルニ御譜、規制、御料ノ略記ヲ以テス、曰ク延曆功臣傳、以テ桓武天皇ヲ補佐シ、大業ヲ恢弘セシ功臣傳ヲ記ス、曰ク歷世京都職制、以テ此京創置以來、之ヲ管理セシ官府職制ヲ記ス、合シテ十四章二十卷、之ヲ第一編トス、各章序論アリテ其事ヲ説明セリ、夫レ平安京ノ規模、經畫ノ完全、莊麗ナル、桓武天皇允文允武ノ英資ヲ以テ、大ニ經綸ノ術ヲ行ヒ、天祖天孫ノ鴻業ヲ大成シ、帝國ノ光輝ヲ億萬斯年ニ照耀セラレシ、盛徳大業ニ至テハ、淺學不文ノ能ク記述贊揚スル所ニアラスト、雖トモ、平安遷都紀念祭ノ事タル、天皇ノ鴻烈ヲ發揚シ、千歳名京ノ光輝ヲ宣耀スル所以ナレハ、此二事ニ於テ、最モ深ク思ヲ致セリ、讀者是ニ由テ以テ之ヲ見レハ、則チ其ノ梗槩ヲ得ルニ庶幾カ、

平安奠都事由

謹テ案スルニ、神武天皇既ニ中州ヲ戡定シ、初テ天皇ノ位ニ大和國橿原宮ニ即ク、是レ帝都奠建ノ始ナリ、是ヨリ列聖大業ヲ繼承シ、良地ヲ相シ、便宜ヲ逐ヒ、其攸ヲトシ、以テ皇居ヲ奠ム、凡ソ長キハ數十年、短キハ數年ニシテ、大抵大和ノ地ヲ出テス、間、山城、河内、攝津、近江等ニ在ルモノ有リト雖モ、僅ニ數世ノミ、蓋シ上世簡約、宮室素朴、其所謂底津磐根ニ宮柱太敷立テ、高天原ニ轉風高知リテ造リ成シ、大宮所ハ、固ヨリ宏壯堅實ナリトイヘトモ、其制素樸ニシテ、造營ノ容易ナリシト、生齒未タ多カラス、都民猶少クシテ、屢之ヲ遷スモ亦其勞少キヲ以テナリ、其ヨリ世運漸ク開ケ、邦威遠ク輝キ、外邦ノ使臣、歸化ノ人民、往來益繁キニ及テハ、制度禮文、復タ上世ノ簡易ナル如キヲ得ス、是ニ於テ、皇居ノ制、漸ク壯大ヲ加ヘタリ、此時佛法渡來、建築上ニ變動ヲ生シタルト、其他外國ノ事物ヲ輸入シ來リシトニ、因リ、皇居モ自ラ彼ニ效フコト多シ、蓋シ聖德太子攝政ノ頃ヨリノ事ナルヘシ、日本書紀ニ、皇極帝元年、以將營宮室、下詔諸國、限十二月取材、又發諸國丁、東至遠江、西至安藝トアリ、是レ飛鳥板蓋宮ヲ造營アル爲メナリ、既ニシテ造營成功リ、同二年四月、車駕新京ニ遷御アリ、同書ニ、同四年六月、蘇我入鹿誅戮ノ時ニハ、天皇御大極殿、中大兄、戒衛門府、一時俱鎖十二門、勿使往來、召聚衛門

府於一所將給祿云々トアレハ此時已ニ唐制ニ依テ大極殿ヲ造營アリシコト、察セラルル天智帝彼ノ制度文物ヲ資リテ舊物ヲ一新シ宮闕ノ制モ專ラ唐式ニ准セラレタリ文武帝ハ大寶元年正月朔初テ大極殿ニ御シ正賀ノ禮ヲ受ク、是ヨリ永ク國家ノ大典ト定マレリ續日本紀ニ此事ヲ記シテ曰ク正月乙亥朔天皇御大極殿受朝其儀云々蕃夷使者陳列左右文物之儀於此備トアリ元正帝ハ初テ大極殿ニ於テ即位アリ是亦國家ノ常典トナレリ和銅二年奈良ノ新都造營ノ詔ニハ京師者百官之府四海所歸制度之宜今後不加トアリ又神龜元年十一月ノ太政官ノ奏狀ニハ京師帝王爲居萬國所朝非是壯麗何以表德トアリ、歷朝遷都數回ニ及ヒ奈良ノ朝ニ至テ規制宏大百事整備シ七十餘年ノ久キヲ經生齒蕃息戸數衆多前古未曾有ノ名都タリシコト疑ヒナシ常情ヨリ之ヲ見レハ復タ遷移スヘカヲサル者ノ如シ然ルニ桓武帝位ニ即クニ及ヒ輒ク之ヲ棄テ、願ミス俄ニ山背國長岡ニ遷都アリシカ未タ造營ノ卒ルニ及ハス更ニ此地ニ遷都アリシハ如何ナル故ソト謂フニ是レニハ必ス大ニ其事由アリテ一朝卒爾ノ舉ニアラサルヘシ惜ムラクハ國史殘缺平安通志ノコトナ記スルノ卷ニシテ延暦十二年同十五年ニ至ル間ヲ主トス然ルニ皆缺本ヨリ又類聚國史ハ京都部散亡シテ存セス今日ニ在テハ唯日本紀等類聚國史殘缺類聚三代格ノ類アル其蹟甚明ナラサルヲ然レトモ今當時ノ事情ト帝ノ英略ト補佐相將ノ人

物トナ湊合シ來リテ之ヲ揣摩推測スル時ハ其實蓋シ知ルヘキニ似タリ夫レ奈良ノ朝富庶繁榮ヲ極メ文物制度大ニ備リ當時歌人カ青丹よし奈良の都はさく花の匂ふ如く今さかりなりと詠出セシ如クナリシモ七十餘年ノ久シキ其間元明元正二帝並ニ女主ヲ以テ能ク其位ニ臨ミ政ヲ爲シ其他ニ至テハ崇佛營寺ノ政淫肆放縱ノ事多クシテ紀綱縱弛元氣腐敗唯驕逸華侈ノミニ耽リ國家ノ大業ニ至リテハ之ヲ度外ニ措キ復タ神聖經綸ノ略アルコトナシ光仁帝大ニ匡正ノ志アリシカ惜哉其登極春秋已ニ高ク頽齡ニ迫レルヲ以テ未タ其面目ヲ一新スルニ及ハスシテ崩御シ其大業蓋シ帝ニ待ツアリ且ツ奈良ハ大和ニ在リテハ形勝ノ地ナレトモ之ヲ全國ニ通觀スル時ハ一僻土ニ過キス水陸ノ運搬道路ノ交通最モ不便ナリ此時西方已ニ王化ニ洽フト雖トモ東國ハ猶狹悍難化ノ風アリ所謂東夷北狄邊疆ヲ侵犯シ我姦匪ト相連結シ以テ邦國ノ患ヲ爲シ時ニ長驅シテ東海ヲ亂ルニ至ル又不逞ノ徒動モスレハ東國ニ據テ事ヲ爲サントスルノ勢アリ帝ノ英明ナル奈良ノ京ハ地氣發泄元氣腐敗萬乘ヲ容ルノ地ニアラサルコトヲ察シ更ニ形勢ヲトシ新京ヲ建テ奮勵振作以テ元氣ヲ一新シ且ツ東國ヲ控御シ大ニ經綸ノ業ヲ行ハント欲ス當時ノ謀臣藤原種繼ノ議蓋シ深ク宸襟ニ默契スル所アリ依テ俄ニ長岡遷都ノ事

アリシカ造營未タ半ナラス主任ノ大臣不幸ニシテ賊矢ニ斃レ事皇太子ニ連
ナリ國儲動搖ノ變アリ且ツ長岡ハ山崎ノ要塞ニ據リ淀川ノ津頭ニ接シ陰陽
ノ孔道ニ當リ頗ル形勢ノ地ナレトモ區域狹隘ニシテ帝王ノ都府ニ適セス況
ヤ費用浩穰績庸久シク集ラズ當時ノ費用國史ニ見ユルモノヲ悉クシテ延暦三
年今ノ調庸并造營工夫用度物仰下諸國令遣於長
岡又爲造新宮之宅以諸國正稅六十八萬束賜右大臣以下又百姓私宅入新宮宮內五
十七町以當國正稅四萬三千束賜其主又仰阿波豐後伊豫三國令遣山崎橋料材又免遣
役夫國今年田租同四年山背國者皇都初歲既爲禁下墾實所加合殊常倫今年田租特
宜全免同五年遣役夫之國今年出墓者不論正稅公解一切減其息利又造營ノ爲メ和
服スル所ノ役夫三十一萬四千八百人トフ是ニ於テ和氣清麻呂ノ密奏ヲ聽キ已ニ親
臣ヲ遣ハシ又親シク地形ヲ巡視シ更ニ今ノ京ニ遷都ノ事アリシナリ續日本
紀ニ延暦六年十月八日詔ニ曰ク朕以水陸之便遷都茲邑云々同七年九月廿六
日ノ詔ニ曰ク朕以眇身忝承鴻緒水陸有便建都長岡云々日本紀略ニ同十三年
十一月廿二日此京ニ遷御シ其廿九日ノ詔ニ曰ク葛野乃大宮地者山川毛麗久
四方國乃百姓乃參出來事便仁之底云々此國山河襟帶自然作城因斯形勝可制
新號宜改山背國爲山城國又子來之民謳歌之輩異口同辭號曰平安京今宜隨之
云々已ニ以水陸之便ト謂ヒ又水陸有便ト謂ヒ此詔文ハ長岡京ニ屬スレト帝ノ
ヲ知ルヘシ又山河毛麗久四方國乃百姓參出來事毛便仁之底ト謂ヒ又山河襟
帶自然作城因斯形勝可制新號ト謂フ此等ニ因テ考フル時ハ帝ノ奠都ノ地ヲ

選ヒシ級旨ハ乃ナ形勝ノ地ニ據リ水陸ノ便ヲ謀ルハ實ニ王者建都ノ第一義
ニシテ即チ經綸ヲ行フ所以ノ本ナレハナリ
抑平安京ノ地タル青山四ニ周リ巨川中ニ通シ所謂山河襟帶ノ形四神相應ノ
勢雄壯重固天下ノ要地ニシテ萬乘ノ都タルニ適セリ神皇正統記此京ノ事ヲ
記セシ條ニ曰ク昔聖德太子峰岡に登りて今ノ都を見めぐらして四神相應の
地なり百七十餘年ありて都を遷され變らまじき所なりと宣ひけると申傳
へたるト其事神異ニ近シト雖モ太子ノ睿聰ナル蓋シ深ク此地ニ見ル所アリ
シ者ナルヘシ今其大體上ヨリ之ヲ記サンニ其地勢タル陰ニ背キ陽ニ向ヒ廣
衍高爽土厚ク水清ク東ニ日枝如意ノ山アリ西ニ愛宕大枝ノ峰アリ北ニ鞍馬
大原ノ高嶺深谷アリ衆嶽群峰秀ヲ爭ヒ奇ヲ競ヒ走テ南山崎八幡ニ至リ相抱
キテ關門ヲ作ス鴨川其東ニ流レ桂川其西ニ通シ東ニハ近江ノ大湖ヲ控キ注
シテ宇治川トナリ巨椋湖ニ入り木津川ニ合シ諸川湊流淀川トナリ八幡山崎
ノ間ヲ過キ南流シテ直ニ浪華ノ御津ニ注ク甚タ廣漠ニシテ之ヲ守ルニ苦マ
ス又甚タ窘束ニシテ之ヲ容ルニ艱マス天下ノ中ニ處リ萬方ノ要ヲ轄ス其
攻守ノ略ヨリ之ヲ論スレハ東ニ相阪鈴鹿不破ノ塞アリ大湖其間ニ開ケ日枝
其上ニ峙ツ南ハ南都ノ舊京ニ通シテ畿甸ニ據ルヘク西ハ大枝阪ヲ踰エテ山

陰ニ通スヘシ前ニ山崎八幡ノ險アリ以テ正面ノ關門トナリ後ハ高山亂峯重疊蹙束以テ其背ヲ固メタリ其出征スルヤ東近江ニ走リ伊勢ト美濃ニ分カレ直ニ關左ヲ控キ以テ與羽ヲ制スヘシ西山崎ニ出テ淀川ヲ下リ攝津ニ走ル以テ直ニ中國ヲ控キ鎮西ヲ制スヘシ其事アル一タヒ相阪山崎ヲ閉ツル時ハ天下ノ喉ヲ扼シテ以テ其背ヲ拊ツヘシ是レ所謂天府之國ナリ況ヤ其山川明麗土地清淑神州秀氣ノ鍾マル所ナルヲヤ是レ蓋シ帝ノ南都繁榮ノ舊都ヲ捨テ草萊ヲ披キ藜莽ヲ芟リ萬人ヲ役シ國幣ヲ糜シ困艱辛苦ヲ排シテ屈セス此千載不遷ノ神京ヲ建奠セシ所以ナルヘシ

又此京建奠以前ニ溯リテ之ヲ考フルニ葛野ノ名ノ史ニ見エタルハ應神天皇六年ヲ始メトス日本書紀應神天皇ノ條ニ曰ク六年春二月天皇幸近江國至菟道野上而歌之曰知婆能伽豆怒塙彌例磨茂茂智儻蘆夜珥彼母彌喻區珥能朋母彌喻ト此時皇居ハ輕島明宮ニ在リ大和國高市郡輕島其ヨリ近江國ニ行幸アリシナレハ今ノ奈良地方ヨリ相樂ニ出テ木津川ヲ渡リ柏崎田ヲ過キ久世鷺阪ヲ踰エ菟道ニ出テ山科ヲ經相坂ヲ過キ大津ニ至リシ者ニシテ菟道野上ハ蓋シ菟道ノ野山ノ上ニテ今ノ菟道郷ノ東面ニ接スル岡阜ノ上ニシテ木幡邊ノ東面ナル陵上ナルヘシ伽豆怒ハ葛野ニテ今ノ乙訓紀伊二郡ヨリ北ニ當リテ京都及

ヒ葛野愛宕二郡ニ屬スル一面廣原ノ稱ナルヘシ此地方ハ上代ニ在リテ茫漠タルナルヘシ仁徳ノ朝秦氏百二十七縣ノ歸化人ヲ諸郡ニ分置シ安樂ヲ榮トス此地蓋シ其野ナリ後波多ノ姓ヲ賜ヒ又萬部萬佐ノ號ヲ賜ヒ川勝ハ地方ノ良二千石タリ長足ハ實財ヲ以テ造宮ニ功アリ秦氏カ此地方ヲ開キシハ大ニ功勞アリシヲ知ルヘシ

山城ハ必由ノ要地タルヲ以テ上古ヨリ四方ノ孔道ニ當レリ和銅中都亭驛ヲ定ムルヤ相樂郡ニ岡田驛ヲ置カル岡田ハ離宮アリテ帝ノ行幸モアリシ所ナリ賀茂郷ニテ今ノ北村ニ當レリ其ヨリニカニ分カレ一ハ伊賀驛トナレ一ハ伊賀驛トナレ綴喜郡ニ山本驛ヲ置カル今ノ多々羅村ノ近傍ナリト云フ其ヨリ西北行シテ河内國交野郡樟葉驛ニ通セシナリ此等ノ道ハ大和ヨリ奈良坂ヲ踰エ二岐ニ分カレ一ハ東國道ニテ前ニ述ヘシ所一ハ木津川ノ西ニ沿テ下リ淀川ニ出テ川ヲ渡リ乙訓ヲ經大枝山ヲ踰エ丹波ニ出テ山陰ニ通ス又山崎ヨリ南ニ下リ津ノ國ニ出テ淀ヨリ南ニ下リ樟葉ニ出ツル道ナリ此道路ハ早クヨリ開ケシモノト見エテ彼ノ四道將軍ヲ遣ハシタル武植安彦ノ軍ヲ追撃セシ應神帝ノ行幸アリシ武内宿禰ノ押熊王ノ亂ヲ平ケシ仁徳帝及ヒ磐之姫皇后ノ巡幸アリシ竹野姫ノ國ニ遷サレシ元明帝ノ都亭驛ヲ置カレシ皆此道ニ由レリ繼體帝ハ樟葉ニ即位シ乙訓ニ筒木ニ皇居アリ萬葉集ノ歌奈良ヨリ東行スル者必ス菟道ノ路ニ由リシコトヲ詠セリ延暦以前ノ舊事類多ク記セトモ他蓋シ近江山城伊賀ノ全國

丹波半國大和國宇陀山邊添上諸郡ノ水宇治木津鴨桂ノ諸川トナリ平安ノ南
 ニ注キ山崎八幡ノ險ニ扼セラレ匯シテ大澤トナリ巨椋ノ入江ハ浩渺タル巨
 浸ナリシヲ以テ當時ノ孔道ハ此巨浸ニ隔テラレ其兩邊ニ沿ヒ往來セシ者ト
 察セラレ山河ノ體勢ハ萬古動搖セサルモノナレハ試ニ菟道ノ陵ニ登テ西北
 ニ葛野ノ廣原ヲ眺望センニ其青山翠ヲ疊ミ曠野内ニ開ケ地勢秀發村落其間
 ニ點綴スル應神帝ノ御製ニ存シテ當時ノ光景宛然目ニ在ルヲ覺ユ其後秦氏
 歸化ノ民ヲ植スル聖德太子ノ寺ヲ營スル秦川勝ノ宅ヲトスル各其勝地ヲ撰
 ミシヲ知ルヘシ今試ニ延曆以前平安ノ地況ヲ想察スルニ東山一帶ノ山跟ハ
 延テ鴨川ニ漸シ其間岡阜起伏スルヲ以テ八阪ノ名ヲ存シ紀伊郡ハ本伎ト稱
 ス伎ハ木ナリ其説紀伊國ノ名ト同ク紀伊郷邊ヨリ八阪ニ及ヒ東山ニ接シ一
 帶ノ深林ニシテ其地木材ニ富メルヲ以テ名ケシモノナラン詳岡寺ノ風宮六
ケル亦以テ北部ハ舟岡山アリ其ヨリ南ニ延キ一帶ノ隆地ニシテ陂陀傾斜狀
 ナ爲シ鴨川高野川ノ二水汎漫其間ニ流レ西ハ雙岡一帶南ニ延キ多少ノ凹凸
 ナナシ森林アリ田野アリ村落其間ニ點綴セシナルヘシ桓武帝ノ奠都ニ及ヒ
 鴨川ノ川脈ノ直ナニ京城ヲ衝クヲ以テ長隄ヲ築キ迤メニ東セシメ以テ其汎
 漫ヲ防キ北ハ舟岡西ハ雙岡東ハ鴨川ヲ控ヘ以テ條衝ヲ畫シ市坊ヲ立テ大内

裏ヲ中ニシ方ヲ辨シ位ヲ正シ以テ此平安京ヲ建奠セラレシモノト察セラレ
 故ニ今日ニ在テモ鴨川ノ水脈ハ上賀茂ヨリ故ヲニ進メニ東セシ跡アリ延曆
 以後防鴨河使ヲ置キ之ヲ防クト雖モ時々漲溢シテ直ニ京城ニ衝クヲ免レス
 市中ニ於テモ平坦中ニ天然ノ凹凸アリテ西洞院通ノ如キハ低卑ニシテ居然
 溪澗ノ形ヲ存シ下京ニ至リテ西洞院川アリ烏丸通ハ之ヲ西ヨリ望ムトキハ
 猶ホ小阜坡ノ勢ヲ存セリ此遺形ニヨリテ以テ延曆以前ノ大勢ヲ想察スレハ
 蓋シ思ヒ半ニ過クル者アルヲ覺ユ

桓武帝ノ英邁神武ナル能ク此地ノ形勝ヲ相シ其水陸ノ便ヲ謀リ此平安京ヲ
 建營シ大有爲ノ政ヲ舉行シ以テ延曆ノ偉業ヲ建ツ大勳當時ニ炳キ鴻業百世
 ニ垂ル嗟呼盛ナル哉日本書紀類聚日本書紀日本後紀類聚國史類聚三代格古事記
高麗和歌集日本紀畧其他山城岡古圖山城圖全國同實測地
府地志等ヲ參取ス

平安京造營年表

本章ハ平安京造營ヨリ其成功ニ至ルマテノ事實ヲ表記シ、時々解説ヲ附シ、以テ通覽ニ便ス、

延曆十二年

正月十五日

大納言藤原小黒麻呂左大辨紀古佐美等ヲ遣ハシ、山背國葛野郡宇太村ノ地ヲ相セシム、都ヲ遷ス爲ナリ、類聚國史、日本紀略

初メ延曆三年五月ヨリ長岡京ヲ造營シ、其年十一月十一日寧樂都ヨリ遷幸アリ、然レトモ經營起工ヨリ僅ニ七ヶ月ニ過キス、宮殿官廳未タ成ラス、此ヨリ年々其工事ヲ督勵シ、竣成ヲ促サレシカ、不幸エシテ同四年九月廿四日、藤原種繼賊ニ射殺セララル、種繼ハ遷都ノ建議者ニシテ、尤モ力ヲ其事ニ用井、内外機務ヲ參畫シ、帝ノ親任ノ權臣ナリシカ、俄ニ此禍ニ遇フ、事皇太子ニ連リ、遽ニ廢セラレ、内外恟々タリ、又長岡地勢、九重ヲ容ル、ニ便ナラス、費用費ヲレヌシテ、成功甚タ遅々タリ、此ヨリ先キ、和氣清麻呂潛ニ奏シ、遊獵ニ托シ、密ニ葛野郡ノ地ヲ相シ、都ヲ遷サント請フ、報セスト雖モ、帝心蓋

シ之ヲ可トス同十一年正月及五月葛野郡ニ行幸アリ唯行幸トノミ記シタレト蓋シ實ハ相地ノ爲メナルヘシ此ニ及セ小黒麻呂等ヲ差ハシ勅シテ遷都ノ地ヲ相セシメラル帝實地ヲ觀察シ其奠鼎ノ地ト爲スヘキノ叔念巳ニ定リシナ以テ公然勅使ヲ發セラレシナルヘシ此時僧賢環モ隨行セリ環ハ當時ノ學僧ナレハ其學術ヲ以テ此命アリシナルヘシ

正月廿一日

東院ニ遷御ス宮ヲ壞タント欲スルヲ以テナリ類聚 國史

遣使相地ノ後僅ニ七日巳ニ宮ヲ壞タントス其事急ナリシヲ想フヘシ

二月二日

參議治部卿壹志濃王等ヲ遣ハシ遷都ヲ賀茂太神ニ告ク

三月朔

車駕新京ヲ巡覽ス

三月十日

新京宮城内ノ百姓ノ地卅四町三年ノ價直ヲ給ス

三月十二日

參議壹志濃王等ヲ遣ハシ幣ヲ奉シ遷都ノ事ヲ伊勢太神宮ニ告ク

三月十二日

勅シテ新京宮城ヲ築ク五位以上諸司主典以上ニ役夫ヲ進メ

三月廿五日

シム、
此ニ及ヒ初テ造營ノ勅命アリシナリ、
遷都ノ由ヲ山階前田原後田原ノ山陵ニ告ク日本 紀事

六月廿三日

山階ハ天智帝前田原ハ施基皇子ニシテ光仁ノ父帝ノ祖父
後田原ハ光仁帝ナリ

六月廿三日

勅シテ新宮諸門ヲ造ル朱雀門伴氏之ヲ營ス美福門ハ若狹越中二國壬生氏之ヲ監ス郁芳門ハ伊豫的氏待賢門ハ播磨建部氏陽明門ハ備前山氏談天門ハ阿波玉手氏藻壁門ハ但馬佐伯氏殷富門ハ尾張美濃伊福部氏安嘉門ハ若狹越中海犬甘氏傳鑿門ハ丹波猪飼氏達智門ハ備中備後丹治氏抄 芥

朱雀門ハ課國ナシ蓋シ造官使ニテ之ヲ造リシナルヘシ皇嘉門ノ事ハ詳カナラス其監造セシ諸氏ノ訓字ヲ雅字ニ充

七月十五日

テ其門號トナシ以テ其功ヲ不朽ニ傳ヘラレシナリ、
勅ス葛野郡ノ百姓ノ口分田多ク都中ニ入ル宜ク山背國雜色田ヲ停メテ百姓ニ班給シ其代リハ四畿内ニ於テ量ルヘシ又神田ハ郡田ヲ以テ之ニ充ツ但寺田ハ舊例ニ准シテ其代リニ

七月廿五日

充ルコトナカレト、

新宮ヲ巡覽シ、造宮使及將領ニ衣ヲ賜フ、類聚國史

造宮使ヲ置カレシコトハ傳ナケレト、造宮ノ勅アリシ時ニ、共ニ其使ヲ置カレシナルヘシ、

九月二日

菅野眞道、藤原葛野麻呂ヲ遣ハシ、新京ノ宅地ヲ班ナ給フ、日本紀略

十一月二日

此時新京區畫漸ク立ツヲ以テ、宅地ヲ班賜セラル、ナリ、
新京ヲ巡覽シ、右大臣從二位繼繩莊ニ御シ、五位以上ニ衣ヲ賜フ、

繼繩ノ莊ハ、早ク此地ニアリシ者ト見ユ、莊トアレハ邸宅ニハアラスシテ、莊園ノ類ナルヘシ、十三年四月ノ條ト併セ見ルヘシ、

延曆十三年

正月朔

宮殿ヲ毀ツヲ以テ朝ヲ廢ス、類聚國史

新年朝賀ハ、大極殿ニテ行ハルヘキヲ、巳ニ毀タレシヲ以テ廢朝ニナリシナリ、

四月廿八日

新京ヲ巡覽ス、又左大臣繼繩高橋津ノ莊ニ御ス、類聚國史、日本紀略

七月朔

東西市ヲ新京ニ遷シ、店舎ヲ造リ、且ツ市人ヲ移ス、日本紀略

七月九日

東西市ハ、南都ヨリ長岡ニ移リ此ニ及ヒ復新京ニ移レリ
稻一萬一千束ヲ從五位百濟王明信等九人ニ賜ヒ、新京ノ家ヲ造ラシム、

案スルニ稻一束ノ米二升五合トス、一萬一千束ハ、米二百七十五斛ナリ、此時蓋シ特旨ヲ以テ其造家費ヲ補助セラレシナルヘシ、百濟王明信ハ百濟王族、齋明帝ノ時歸化シ、百濟王ノ姓ヲ賜ヒシ族ニシテ、帝ノ母后ハ百濟氏ナレハ、特ニ之ヲ遇セラレシナルヘシ、

九月廿八日

幣ヲ諸國名神ニ奉シ、遷都ヲ告ク、日本紀略

十月三日

裝束司次第司ヲ任ス、將ニ新都ニ幸セントスルヲ以テナリ、類聚國史

十月廿二日

車駕新京ニ遷ル、類聚國史、日本紀略

客年ノ春ヨリ造營ノ起工アリ、此ニ及ヒ僅ニ二十ヶ月ニ過キス、未タ竣功ニ至ラサレトモ、皇宮先ツ成リシヲ以テ、遷都アリシナルヘシ、

十月廿六日

造宮使及山背國司物ヲ獻シ以テ遷都ヲ賀ス五位以上ニ衣被

十月廿九日

詔シテ曰ク葛野乃大宮地者山川モ麗久四方國乃百姓乃參出

來事モ便仁之云々

此詔文今傳ハラス僅ニ此數句ヲ日本紀略ニ存スルノミ蓋

シ日本後紀ニハ全文アリシナルヘシ後紀散逸復見ルヘカ

十一月七日

愛宕葛野二郡今年ノ田租ヲ免ス日本紀略

詔シテ曰ク古之王者教學爲先ト因テ越前水田一百二町ヲ大

學寮ニ増附ス名ケテ勸學田ト曰フ日本紀略

大學寮ハ此時三條坊門壬生ニ定メラル遷都忽忽ノ際百事

ニ先ケテ大學ニ勸學田ヲ付セラル以テ聖旨ノ在ル所ヲ見

ルヘシ是ヨリ先キ大學ハ僅ニ二十町ノ資田アリシノミナ

十一月八日

詔シテ曰山背實合前聞云々此國山河襟帶自然作城因斯形勝

可制新號宜改山背國爲山城國又子來之民謳歌之輩異口同辭號

延曆十四年

正月朔

日平安京今宜隨之云々日本紀略

此詔モ去月廿九日ノ勅ト同シク文全カラス

大極殿未タ成ラサルヲ以テ朝賀ヲ廢ス侍臣ヲ前殿ニ宴シ大

歌及ヒ雅樂ヲ奏ス日本紀略

前殿ハ皇居ノ前殿ニテ即テ紫宸殿ナリ此時正殿未成ヲ以

テ侍臣ノミニ賜宴アリシナリ

正月十六日

侍臣ヲ宴シ踏歌ヲ奏ス五位以上ニ物ヲ賜フ差アリ其歌ニ曰

ク山城顯樂舊來傳帝宅新成最可憐郊野道平千里望山河擅美

四周連新樂平安冲襟乃眷八方中不日爰開億載宮壯麗裁規

傳不朽平安作號驗無窮新樂平安新年正月北辰來滿宇韶光

幾處開麗質佳人伴春色分行連袂舞皇垓新樂平安卑高泳澤

洽歡情中外合和滿頌聲今日新京太平樂年々長奉我皇庭新樂平安

正五位下文室八多麻呂等十八人ヲシテ遷ニ長岡舊宮ヲ守ヲ

五月

シム日本紀略

七月十二日

市中ヲ巡幸ス、類聚國史、日本紀略

朝堂院ニ幸シ、匠作ヲ觀ル、日本紀略

七月十九日

朝堂院ハ即チ八省院ニテ、大極殿ノ在ル所ナリ、此時造管中ニ係レリ、

十二月朔

京師ヲ巡幸ス、類聚國史、日本紀略

此時朝堂院其他落成ニ付、巡幸アリシナルヘシ、

延曆十五年

正月朔

初テ大極殿高御座ニ御シ、朝賀ヲ受ク、侍臣ヲ前殿ニ宴シ、被テ賜フ、類聚國史

客年大極殿落成セシヲ以テ、初メテ元朔朝賀ノ正式ヲ此新殿ニテ行ハレシナリ、大極殿ハ朝廷第一等ノ正殿ニシテ、國儀大禮ノ行ハル、所ナレハ、特ニ之ヲ重セラレシヲ見ルヘシ、此ヨリ永ク朝廷ノ恒例トナレリ、

二月

坂上田村麻呂ヲ以テ木工頭トナシ、菅野眞道ヲ以テ造官亮トナス、公卿補任

此時和氣清麻呂造官太夫タリ、菅野眞道造官亮タリ、坂上田

村麻呂木工頭タリ、此三人ハ、皆當時ノ名臣ナリ、帝ノ造官ノ事ヲ重シシ、其人ヲ精選任用アリシト、此京ヲ造管セシハ、此等名臣ノ其職ヲ奉シ、鞠躬盡力シテ成功セシ事ヲ見ルヘキナリ、

三月廿四日

朝堂及諸院ヲ巡覽シ、東院ニ御シ、宴飲日ヲ終フ、

四月十日

京師ヲ巡行ス、類聚國史、日本紀略

爾後數、巡行アリ、蓋シ新京ノ體制、及民間ノ事情ヲ觀察セラレシナルヘシ、

七月九日

外從五位上物部多藝連建麻呂ヲ造官大工トナス、

此時猶造管中ナルヲ以テナルヘシ、大工小工ハ、工師ノ長ニテ、今日ノ技師ノ如キ者ナリ、

造官職ノ官位ヲ中官職ニ準セシム、寬平三年官符

延曆十六年

正月朔

大極殿正賀例ノ如シ、

以後之ヲ略ス、

正月十七日

射ヲ朝堂院ニ觀ル、

正月二十日
三月十七日

京中ヲ巡幸ス、類聚 國史
遠江、駿河等數國ヨリ雇夫二萬四千人ヲ進メシメ、以テ造營ノ役ニ供ス、

造營久シク成ラサルヲ以テ、遠ク雇夫ヲ徵集アリシモノト見ユ、

延曆十七年
八月九日
八月十日

大風、京中百姓廬舍ヲ壞ル、日本紀 日本
京中ヲ巡幸ス、類聚 國史 日本紀 日本

昨日大風災アリ、百姓廬舍多ク壞ル、因テ今日巡幸、親ク其實況ヲ觀察アリシナルヘシ、是亦以テ帝ノ心ヲ民瘼ニ注カル、ヲ見ルヘシ、

延曆十八年
正月朔
正月七日

大極殿ニ御シ、朝ヲ受ク、文武官九品以上蕃客等各位ニ陪ス、
豐樂院未タ成ラサルヲ以テ、大極殿前龍尾道上ニ假殿ヲ構作シ、葺クニ彩帛ヲ以テシ、天皇臨御ス、蕃客仰望、以テ壯麗ト爲ス、五位以上ヲ宴樂ス、渤海國使大昌泰預カル、祿ヲ賚フコト差アリ、

五月十六日
五月十八日
五月廿一日

豐樂院未タ成ラサルヲ以テ、假ニ大極殿前ニ宴セシナリ、龍尾道ハ、殿前ノ露階ニテ南廷ヲ上下ニ別テリ、
大極殿ニ御シ、群臣並ニ渤海ノ客ヲ宴シ、樂ヲ奏ス、蕃客以上ニ綦措衣ヲ賜フ、並ニ庭ニ列シテ踏歌ス、
射ヲ朝堂院ニ觀ル、五位已上射畢テ、次ニ蕃客射ル、
贈正三位行民部卿兼造官太夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂

薨ス、類聚 國史

和氣公宇佐復命回天護國ノ偉勳ハ、世人ノ能ク知ル所ナレト、平安奠鼎ノ首唱者、平安宮城造營ノ長官タリシコトハ、知ル者甚稀ナリ、其遷都密奏ノコトハ、前ニ記シタルヲ以テ之ヲ略シ、爰ニハ造官長官タリシコトヲ述フヘシ、公ノ事蹟ハ、延曆十年以下皆後記ニアルヘキヲ其逃亡セシヲ以テ、今僅ニ殘篇斷簡中ニ散見スルニ過キス、然レトモ前後ヲ通シテ之ヲ案スルニ、公已ニ配所ヨリ召還、官位ヲ復セラレ、甚ダ重用セラレサリシト雖モ、概テ清要ニ在リ、桓武帝已ニ其密奏

ヲ用井、遂ニ奠鼎地ヲ定メ、造宮職初メニハ使ヲ置キ、平安京造營ヲ掌ラシムルニ及ヒ、公ノ首唱タルヲ以テ、公ニ任シ、其長官トセラレシナルヘシ、公ノ事蹟詳ナラスト雖モ、已ニ其首唱ト爲リ、又其長官トナリ、其委任ヲ受ケシヲ見レハ、平安京ノ經畫規模ハ、公ノ經營ニ成リシモノ必ス多キニ居ルナルヘシ、其萬世ノ大勳此ニ於テ益見ルヘキナリ、且公ハ民部卿トナリテハ、民部省例二十卷ヲ撰シ、一省ノ例格ヲ定ム、則チ其民治ニ於ケル、治績アルヲ知ルヘシ、弘文館ヲ置キ、封戸ヲ割キ、學田トナス、其文學ヲ尙ヒ、教育ヲ重ニスルヲ知ルヘシ、公ノ如キハ實ニ國體ニ明ニ治理ニ通セシ、忠實誠悃ノ偉人ト謂フヘキナリ、其祀典ニ列シ、千載廟食スル、亦宜ナラスヤ、

五月廿三日

詔シテ曰ク、近巡京中、過堀川處、鉗鎖囚徒、暴體苦作、興言於茲、愀然于懷、雖生民之愚、自招罪惡、而爲民父母、寧不哀愍、其在役見徒及天下見禁囚等、罪無輕重、并宜赦除、令得自新、類聚 國史帝數京中ヲ巡幸シ、親シク囚徒服役ノ狀ヲ見テ、此大赦ヲ行

ハレシナリ、

延曆十九年

正月廿六日

外民課役ヲ規避シ、京戸ニ貫スルヲ禁ス、類聚 三 代格此時京師已ニ立ツト雖モ、市民未タ盈タス、帝屢恩詔ヲ降シ、招徠ヲ務ム、茲民之ヲ利シ、名ヲ京戸ニ貫シ、其實郷土ヲ離レス、徒ニ課役ヲ規避セシメ、京師ヲ富實ニスル益無キヲ以テ、此禁令アリシナルヘシ、

延曆十九年

夏

京師ヲ巡幸シ、遂ニ神泉苑ニ幸ス、類聚 國史 日本後紀此三年間京師巡幸ノ事ナシ、此ニ及ヒ巡幸アリ、蓋シ京師ノ成功セシヲ以テ、其實況ヲ巡覽セラレシナルヘシ、神泉苑行幸ハ、史書ヲ絶タス、皇居ハ宮殿ノミ充斥シテ、別ニ園池ノ設ケナシ、因テ御遊ハ必ス神泉苑ニテ行ハレシヲ以テナリ、

延曆廿五年

二月 朔

造宮職ヲ停メ、木工寮ニ併ス、木工寮ノ事務繁多ナルヲ以テ、史生六員ヲ加ヘ、前ヲ合シテ十二員トス、類聚 國史

造官職ヲ停ムルコト、日本紀略ニハ前年十二月十日ニ係レト、今ハ類聚國史ニ從フ、前年十二月ニ造營ト兵事ヲ停ムルノ議アルヲ以テ、之ヲ混セシナルヘシ、蓋シ公卿ノ議ニ從ヒテ、其停職ノ準備ヲ爲シ、此ニ及ヒ決行セラレ、其殘務ヲ木工寮ニ移セシヲ以テ、更ニ其史生ヲ増員セラレシナルヘシ、

平安京

平安京及ヒ大内裏ハ、其造營規制周密錯雜ニシテ、凡例ヲ附セサレハ、解シ難キモノアルヲ以テ、此ニ其要ヲ撮記シ、以テ通覽ニ便ス、

一 造營記事ハ、平安京大内裏最初ノ造營ニ就キ之ヲ記ス、

一 凡ソ尺ト稱スルハ、和銅改正ノ大尺ニシテ、現制曲尺一尺弱ニ當ル、

一 凡ソ間ト稱スルハ、兩楹間ヲ曰フ、相距ル大凡十尺トス、

但シ六尺若シクハ一丈二三尺ナル者アリ、此類ハ特ニ其寸尺ヲ記ス、

一 宮殿諸門ノ名號ハ、弘仁九年勅アリテ之ヲ定ム、然レトモ今其造營ノ初ニ溯リテ之ヲ用井タリ、

一 沿革ノ大ナル平安京、大内裏、朝堂院、皇居、太政官、神祇官ノ類ハ、各自ニ之ヲ記ス、其他ハ太略其記事ニ於テ之ヲ述フ、

一 圖ハ平安城全圖、大内裏全圖ヲ主トシ、朝堂院、豐樂院、皇居、太政官、神祇官、武德殿、大學、神泉苑ノ類ハ、特ニ之ヲ作り、其他重要ノモノニ限り之ヲ圖ス、又坊制、市制、街路、水理ノ類ハ、各自ニ之ヲ製ス、

一 古圖ハ古來著名ノモノ、大抵散逸シテ存セス、當時搜索中ニ屬スルヲ以テ、獲ルニ從ヒ之ヲ寫シ、以テ參考ニ資セントス、因テ今其種目ヲ掲ク、唯

清興眼抄、神泉苑所傳、拾芥抄載スル所ノ諸圖ヲ寫シテ之ヲ附ス、
一圖中殿堂諸門ノ名ヲ記スルニ、其新ニ製スル所ノ朝堂院、豐樂院、中和院、
武德殿、太政官、大學寮ノ類ハ、字首ノ向フ方ヲ正面トス、其舊圖ニ據ルモ
ノハ原本ニ從フ、

一志料ハ大凡大内裏圖考證ノ藤原廣前カ考説ヲ手書セシ本ニヨリ、傍ヲ
見聞スル所ト、舊址ノ實測トヲ以テス、本ト一々其引用書ヲ掲ケントセ
シモ、煩雜ニ涉ルヲ以テ之ヲ略シ成ルヘク、其書名ハ記文中ニ示ス事ト
シ、其他ハ記事中ノ重要ノ件ノミ書名ヲ記ス、

平安京造營ハ、延暦十三年三月ニ始マリ、同廿四年ニ終リシ者ノ如シ、國史殘缺、
其詳ナルコト得テ知ルヘカラスト、雖モ、今諸書ヲ參案シ之ヲ考査スルニ、其十
三年正月巳ニ其地ヲ相シ、奠鼎ノ攸ト定メ、其三月十二日勅シテ新京ヲ造營セ
シメラル、造宮職ヲ置クコトハ史ニ見エサレト、蓋シ之ト同時ニ設置セラレシ
者ナルヘシ、其職掌モ記セシモノナケレト、蓋シ此新京造營ノ事務ヲ管掌セシ
ヲ知ルヘシ、此時誰ヲ以テ其長官ニ任セラレシヤモ亦知ルヘカラスレト、同十
八年二月、和氣清麻呂薨逝ノ事ヲ記スル所ニ、其官職ヲ記シテ、民部卿兼造宮大
夫トアレハ、蓋シ造宮使ヲ置キシ時ニ、其長官ニ任セラレシモノト察セラレ、凡

使ニハ、長官ト稱シ、職ニハ大夫ト稱スル例ナリ、初メ造宮使トアレハ、長官ト記ス、同
ヘキヲ、今大夫トアレハ、其後使ヲ改メテ職トナシシナルヘシ、今考フル所ナレ、
十五年二月、阪上田村麻呂ヲ以テ、木工頭ニ任シ、又菅野眞道ヲ以テ造宮亮ニ任
セラル、清麻呂ハ、此新京ノ地ヲ撰ミ、之ニ遷都アラシムコトヲ密奏セシ人ニテ、實
ニ平安京造營ノ首唱者タリ、田村麻呂ハ、文勳武功、一世ニ冠絶シ、眞道ハ、國家ノ
故典ニ通シ、治道ニ明ニ、俱ニ當時ノ名臣ナリ、遷都ノ首唱タリシ清麻呂造宮職
大夫トナリ、佐クルニ國史ニ通シ、治道ニ明カナル眞道ヲ以テシ、文勳武功、一世
ニ冠絶スル、田村麻呂、木工頭トナリ、國家營繕ノ長官タリ、加フルニ僧賢環、時ノ
宿學ヲ以テ之カ顧問タリ、然シテ帝躬ヲ其實地ヲ巡行シ、之ヲ指揮監督シ、彼ノ
羅城門ヲ視テ、其事ヲ工人ニ命セラル、カ如キ、以テ其實ヲ見ルヘシ、是ノ如ク
ナラサレハ、安ソ能ク數年ノ間ヲ以テ、此萬古未曾有ノ大造營ヲ完成シ、以テ千
載不遷ノ帝京ヲ奠ムルコトヲ得ンヤ、故ニ特ニ之ヲ記シ、此京奠建ニツキ、桓武
帝ノ最モ勲念ヲ盡シ、當時ノ名臣ヲ網羅シ、之ヲ任用アリシ事ト、清麻呂、田村麻
呂、眞道等ノ名臣、大ニ此事ニ功勞アリシコトヲ知ラシムト云フ、

平安京ハ、山城國葛野郡綿代郷、和名抄ニ、葛野郡綿代郷アリ、今其所ヲ詳ニセズ、但
所アリ、山城志ニ、馬代ハ綿代ナリトアリ、馬代ハ葛野郡綿代郷ノ舊地ト記スル、
馬代ハ右京第十ニ當レル、南北ニ通シタル小路ノ名ニテ、綿代舊地トアル所ト相
考ナレ、猶ホ、後、宇多村ト、愛宕郡折田郷ニ連亘シ、和名抄折田郷ナレ、六角堂、
德太子六角堂、建立ヘ折田郷土車里

宇多村ト、愛宕郡折田郷ニ連亘シ、和名抄折田郷ナレ、六角堂、德太子六角堂、建立ヘ折田郷土車里

トアリ、折田郷ハ京都市坊ニ係リ、其名源誠セシニヤ、土車里ハ八坂郷ニモアレト、是ハ自カヲ別ナルヘシ、此他市坊ニ入リシ村里雖多カレモ、今考フル所ナシ、然レトモ今愛宕郡ノ南部、僅ニ二里餘ノ地ニ、饗食、綿織、白川、上下粟田、八坂、島部ノ數郷ノ相重ナルヲ見レ、越前ノ時、或ハ鴨川以西ノ郷ヲ以南ニ移セシニハアラサルカ、陰ニ背キ、陽ニ面シ、鴨川東山ヲ左ニ控キ、桂川西山ヲ右ニ帶ヒ、以テ其位ヲ正シ方ヲ定ム、南面ニ羅城門アリ、以テ城ノ正門トス、南北ヲ縦トシ、中央朱雀ノ大街ヲ開キ、皇城ヨリ直ニ羅城門ニ接ス、朱雀ノ左ヲ左京トシ、右ヲ右京トス、南北ニ三十二ノ縦衢ヲ開キ、東西ニ三十八ノ横衢ヲ通ス、衢ニ大小アリ、之レカ綱紀ヲ爲ス、方四十丈ヲ町トシ、四町ヲ保トシ、四保ヲ坊トシ、四坊ヲ條トシ、坊令ヲ置キ之ヲ管ス、大内裏ハ、一條二條ノ間ニアリ、東ハ東大宮ヨリ、西ハ西大宮ニ至ル、十二ノ宮門ヲ開キ、皇居、朝堂院、豐樂院、太政官、神祇官、八省、六衛、諸寮、百司、皆其中ニ在リ、平安京ノ造營ハ、巨細大小、一切條紀アリ、屏垣溝渠ノ微ニ至ル迄、寸尺ニ定法アリテ苟モセス、東西南北、井然トシテ、棋枰ノ如シ、其大内裏ノ内外、皇居、朝堂院、豐樂院、武德殿、太政官ノ建營ニ至リテハ、其地盤殿基ヨリ、屋制軒椽、檼椽欄楣ニ至ルマテ、皆其式アリ、千載ノ下、其迹ヲ按スレハ、猶ホ之ヲ掌ニ指スカ如シ、是レ平安京ノ大形ナリ、

廣袤

南北一千七百五十三丈

自一條大路北偏、至九條大路南偏、現今間數二千九百二十一間、三尺六寸ニテ、一里十五町、五十三間、一寸六分
東西一千五百八丈

自東京極東偏、至西京極西偏、現今間數二千五百十三間、一尺八寸ニテ、一里十二町、四十一間、三尺八寸

以上詳細ハ、街路ノ章ニ詳カナリ、

地盤

平安京全圖地盤ヲ現今步數ニテ算スレハ、七百三十四萬二千八百五十七步餘ニシテ、實ニ二千四百四十七町六段一畝二十七步トナル、

周圍

一條九條、東西京極ノ外面ニハ、周垣アリ、基廣サ六尺、瓦屋、垣ノ内外ニハ、犬行アリ、各七尺、犬行ノ外、各溝アリ、廣サ各一丈、之ヲ周圍トス、外部ノ溝外、又大路アリ、平安城ヲ繞ル、其外短堤アリ、之ヲ限ル、

羅城門

平安城ノ正門ナリ、朱雀大路ノ中心ニ當リテ、朱雀門ト遙ニ相望ミ、其外ヲ洛外トス、鳥羽造道ニ接ス、門製、基廣南北二丈六尺、東西十丈六尺、

南北石階各七丈五級、階外ノ溝石橋ヲ架ス、廣サ石階ト同シ、門南北二間三楹二丈、東西九間十楹九丈、戸七間三十楹ヲ以テ成ル、二重閣製瓦屋、屋上鴉尾ヲ置ク、閣ノ中央ニ額ヲ掲ケ、羅城門ト曰フ、丹雘粉壁、京城第一ノ大門ナリ、

坊

坊ハ市坊ヲ區畫スル者ニシテ、全市ヲ畫シ之ヲ分轄ス、二條以北ハ左右京トモ其名相同シ、二條以南ハ左右京各其名ヲ異ニス、凡坊ハ四坊ヲ管スルヲ例トス、但シ二條以北ハ其第一坊皆大内裏ノ内ニ係ルヲ以テ、其管スル所少シ、最北ノ半坊ハ九坊ノ外トス、凡ソ坊ヲ計ル、左京ハ西ヨリシ、右京ハ東ヨリス、其坊名及ヒ管町ハ左ノ如シ、

北邊坊 一條ヨリ土御門ニ至ル、六保二十四町ヲ管ス、九坊ノ中ニ入ラス、

桃花坊 土御門ヨリ中御門ニ至ル、第一坊ハ大内裏中ニ屬シ、第二坊ヨリ第三坊ニ至ル、十二保四十八町ヲ管ス、

銅駝坊 中御門ヨリ二條ニ至ル、其管スル所桃花坊ニ同シ

左京

教業坊

皆同シ、

二條ヨリ三條ニ至ル、四坊十六保七十四町ヲ管ス、以下各坊

永昌坊

三條ヨリ四條ニ至ル

宣風坊

四條ヨリ五條ニ至ル

淳風坊

五條ヨリ六條ニ至ル

安衆坊

六條ヨリ七條ニ至ル

崇仁坊

七條ヨリ八條ニ至ル

陶化坊

八條ヨリ九條ニ至ル

右京

豐財坊

二條ヨリ三條ニ至ル、其管地左京ノ教業坊ニ同シ、以下各坊

皆同シ、

永寧坊

三條ヨリ四條ニ至ル

宣義坊

四條ヨリ五條ニ至ル

光德坊

五條ヨリ六條ニ至ル

毓財坊

六條ヨリ七條ニ至ル

延嘉坊

七條ヨリ八條ニ至ル

開建坊 八條ヨリ九條ニ至ル
坊制

坊ハ町ヨリ成ル凡ソ坊ヲ立ツル方四十丈ヲ町トシ四町ヲ保トシ四保十六町
ヲ坊トシ四坊十六保七十四町ヲ條トシ每條ニ四坊ヲ置ク坊ノ間ニ必ス大路
アリ縱横之ヲ畫ス二條以北ハ各三坊ヲ管シ三條以南ハ制ノ如シ其中央ノ通
街ヲ坊門ト稱ス町ニ八行アリ一町ニ四行トス行ニ八門アリ之ヲ一戸トス凡
ソ町内小徑ヲ開ク大路ノ邊町ニハ二廣サ各一丈五尺市人ノ町ニハ三廣サ各
一丈自餘ノ町ニハ一廣サ一丈五尺トス其式別圖ノ如シ

坊職

坊ノ職員ハ坊令及ヒ坊長トス坊令正八位以下明廉強幹時務ニ堪ヘタル者ヲ
取り坊長ニハ并ニ白丁ノ清正強幹ノ者ヲ取り之ニ任スルモノトス坊令ハ一
坊ノ長タリ坊長ハ一坊ニ四人ヲ置ク坊令ノ配置ハ左ノ如シ
一條ヨリ土御門ニ至ル 坊令一人
土御門ヨリ近衛ニ至ル 同 一人
近衛ヨリ中御門ニ至ル 同 一人
中御門ヨリ大炊御門ニ至ル 同 一人

大炊御門ヨリ二條ニ至ル

同 一人

以上北邊坊ハ一人桃花坊銅駝坊ハ各之ヲ二ニ分テ一坊ニ各一人ヲ置
ク蓋シ大内裏ノ近傍ニ在ルヲ以テナリ左右京相同シ

左京

教業坊	自二條至三條	坊令一人	坊長四人
永昌坊	自三條至四條	同 一人	同 四人
宣風坊	自四條至五條	同 一人	同 四人
淳風坊	自五條至六條	同 一人	同 四人
安衆坊	自六條至七條	同 一人	同 四人
崇仁坊	自七條至八條	同 一人	同 四人
陶化坊	自八條至九條	同 一人	同 四人
右京	各坊ノ區域ハ左京ニ同シ		
豐財坊		坊令一人	坊長四人
永寧坊		同 一人	同 四人
宣義坊		同 一人	同 四人
光德坊		同 一人	同 四人

毓財坊	同	一人	同	四人
延嘉坊	同	一人	同	四人
開建坊	同	一人	同	四人

坊令坊長ノ職制ハ、歷世京都制度ノ章ニ記セリ、

街衢ノ制

凡ソ街衢ニハ大小アリ、大ヲ大路ト稱シ、小ヲ小路ト稱ス、大路ハ市坊ノ綱トナリ、小路ハ市坊ノ紀トナル、其廣サヲ計ルハ、一偏ノ垣ノ中心ヨリ起リ一偏ノ垣ノ中心ニ至ル、

縦街

朱雀大路

廣二十八丈ニ條ヨリ九條ニ至ル、此大路ノ地盤ヲ現今歩數ニ算スレハ十萬六千四百七十二歩ニ至トナル、

東西垣各三尺五寸、東西犬行各一丈五尺、

東西遶各五尺、大路廣二十三丈四尺、

大宮大路

廣十二丈

宮垣半三尺五寸、堀地廣一丈六尺五寸、

東西垣半各三尺、同犬行各五尺

同遶各四尺、街路廣八丈四尺

東西京極大路

廣十丈

東西垣半各三尺、同犬行各五尺

同遶各四尺、街路廣七丈六尺

壬生西洞院東洞院以上左京皇嘉門通道祖木辻以上右京

各廣八丈

東西垣半各三尺、同犬行各五尺

遶各四尺、街路廣五丈六尺

其他小路

各四丈但シ堀川ハ川路四丈ヲ加フ

東西垣半各二尺五寸、同犬行各三尺

遶各三尺、街路各二丈三尺

横街

一條土御門近衛中御門大炊御門大路

各廣十丈

南北垣半各三尺 同犬行各五尺

同邊廣各四尺 街路廣七丈六尺

二條大路

廣十七丈

宮垣半三尺五寸 墻地一丈六尺五寸

邊廣八尺

南垣半三尺 同犬行五尺

同邊四尺

街路廣十二丈

三條四條五條六條七條八條大路

廣各八丈

南北垣半各三尺 同犬行各五尺

同邊各四尺

街路廣五丈六尺

九條大路

廣十二丈

南北垣半各三尺 同犬行各七尺

同邊各一丈 街路廣八丈

其他小路

廣各四尺

南北垣半各二尺五寸同犬行各三尺

邊各三尺 街路廣各二丈三尺

街衢名稱

縱衢

朱雀大路

朱雀門ヨリ羅城門ニ通ス平安京ノ第一ノ通衢ナリ

左京

坊城 小路

櫛笥 小路

猪隈 小路

油小路 小路又又

町尻 小路

壬生 大路

大宮 大路

堀川 小路但シ堀川

西洞院 大路

室町 小路

烏丸 小路

高倉 小路

富小路 小路

右京

西坊城 小路

西櫛笥 小路 ○ 又解

西鞆負 小路

野寺 小路

宇多小路 小路

惠止利 小路

菖蒲小路 小路

無差小路 小路

横衢

一條 大路

土御門 小路

近衛 大路

東洞院 大路

萬里小路 小路

京極 大路

皇嘉門通 大路

西大宮 大路

西堀川 小路 ○ 川路東

道祖大路 大路

馬代 小路

木辻 大路

山小路 小路

西京極 大路

正親町 小路

鷹司 小路

勘解由小路 小路

中御門 小路

大炊御門 小路

二條 大路

三條坊門 小路

三條 大路

四條坊門 小路

四條 大路

五條坊門 小路

五條 大路

六條坊門 小路

六條 大路

七條坊門 小路

七條 大路

八條坊門 小路

八條 大路

九條坊門 小路

春日 小路

冷泉 小路

押小路 小路

姊小路 小路

六角 小路

錦小路 小路

綾小路 小路

高辻 小路

樋口 小路

楊梅 小路

佐女牛 小路

北小路 小路

鹽小路 小路

梅小路 小路

針小路 小路

信濃小路 小路

九條大路

市坊道路規制

平安城市坊道路ハ其規畫製作前文ニ記スル如ク、整齊完備ナルカ故ニ之ニ對
スル規制モ隨テ周到精密ナリ、是レ獨リ此京ノミナラス、已ニ令條ニ於テ之カ
規定ヲ立テ、其後ナ式ヲ定ムルニ及ヒ、益完全ニナリシナリ、其大要ハ、其掃除ヲ
嚴ニシ、清潔ヲ怠ラシメス、修繕ノ規定ヲ立テ、巡察監督ノ官ヲ置キ、日常其職務
ヲ行ヒ、若シ規則ニ從ハサル者ハ、官私ヲ問ハス、一々其罰則ニ據テ之ヲ處決セ
ラル、是レ能ク其修理ヲ行ヒ、規制ヲ永ク存セシ所以ナリ、其費用ノ如キモ、國費
アリ、又其定料ト資本アリ、又ハ市費アリ、其種類各同シカラス、其精細ハ各本書
ニ在リ、今大要ヲ左ニ抄録ス、

延曆廿二年十一月己卯勅、騎乘之輩、不由道路、好就垣下、基地易崩、徒步有
妨云々、可禁不禁、怠在所由、左右兩職、嚴加捉搦、兼榜街巷、勿令更就、類聚
國史
凡騎馬之輩、不得輒就垣下往還、延喜
式

弘仁六年二月九日官符、京中諸家、或穿垣引水、或壅水浸途、宜仰所司、咸使
修營、不責引流水於家內、唯禁露汗穢於牆外、仍須每竇置樋通水云々、

弘仁十年十一月五日官符、今有壅塞之禁、無清掃之制、仍須自今以後如此
之類、貶考奪祿云々、類聚
國史

凡宮城四面牆內、不得積物、不得停馬、

凡大路建門屋者、三位已上、及參議聽之、中其城坊垣、不聽開之、

凡京中不聽營水田、但大小路邊及卑濕之地、聽植水葱、芹、蓮之類、不得因此

廣溝、迫路、

凡京路、分街立鋪、衛府持時行、夜、夜鼓聲絕、禁行、曉鼓聲動、聽行云々、犯夜者、

衛府當日決放、

凡京路、皆使當家每月掃除、

凡臺、巡行京裏、嚴加決罰、令掃除、在宮外諸司、并諸家、掃除當路、又置樋通水、

勿露汗穢云々、

凡宮城邊朱雀路溝、皆使雇夫掃除、

掃除丁三十六人、條別四人、但一二條
各三人、北邊坊二人、

凡京中衛士仕丁等坊、不得商賈、但酒食不在此例、

凡徒役人者、令作路橋及役雜事、又司每六日將囚人等使掃除宮城四面臺、

雨後且亦掃除宮內穢汚并廁溝等、

凡神泉苑回地十町内、令京職栽柳、町別七株
凡道路邊樹、當司當家栽之、

凡京中閑地、不論貧富、量力播種、時管作、并加勸課、令益地利、

凡堀川杭者、不論課不課戶、皆令戸頭輸之、其戸十九人已下一株、二十人已

上二株、三十人已上三株、長八尺以下七尺以上、本徑五寸、末徑三寸、

凡築垣、功程勝、示條坊、莫令違越、延喜式

貞觀四年三月八日、官符每坊門置兵士十二人、令守朱雀道、并夜行兵衛、巡

檢兵士直否事、類聚三

貞觀十七年十二月、庶人伴善男沒官墾田、陸田、山林、庄家稻、鹽漬鹽釜等在

諸國、皆充造京城道橋料、貞觀九年、大納言伴善男、歷天門、燒キシ、謂ナリテ、
ニ充テ、シナリ、其財產ノ官沒セシ者ヲ以テ、別ニ此料

元慶八年八月、以山城國正稅一千三百八十七束九把、充造左京北邊溝等

料、三代實錄

川路

平安京ノ地勢タル、陰ニ背キ陽ニ向ヒ、天然ノ高低アリテ、其水皆南ニ向ヒテ傾

瀉ス、水源ハ愛宕葛野二郡ノ山溪ヨリ出ツル小流ヲ取り、左京ニ在テハ、鴨川ノ
水脈ヲ其間ニ引ケリ、皇宮中外ノ御溝、神泉苑ヲ始メトシテ、冷泉、朱雀、高陽、堀川、
閑院等ノ離宮別館、其他名族大家ノ邸内ニハ、林泉ヲ造リ、園池ヲ築キ、瀧ヲ落シ、
水ヲ用ヰルコト自由ニシテ、且ツ汚穢ヲ排除スルヲ以テ、其土地爽塏ニシテ清
潔ナリ、彼ノ源融カ、河原院ノ如キハ、鴨川ヲ引キテ大池ヲ作り、以テ鹽釜ノ浦ニ
擬スルニ至ル、鴨川ノ東ニ於テモ、法住寺殿ノ如キ、平賴盛ノ邸池ノ如キ、頗ル巨
大ナルモノアリ、皆東山ヨリ出ツル溪流ヲ引ケリ、當時山林繁茂、其水ノ乏シカ
ラサルヲ知ルヘシ、其左右京ノ川路ハ左ノ如シ、

左京

京極川 中川

京極大路ノ川ニシテ、一條ヨリ南流九條ニ至ル、二條以北ヲ中川ト
曰フ、賀茂川、桂川ニ對シテノ稱ナリト云フ、此川路ハ京極東ニ在テ、
鴨川ニ通シ、東山ヲ望ムヲ以テ、古來著名ノ所ナリ、榮華物語ニ、中川
邊ニ御堂たてらるトアルハ、法成寺東北院ナリ、其他甲第名家ノ在
リシ所ナリ、

東洞院川

一條ヨリ大炊御門ニ至リ、西流烏丸ニ至リ、南流冷泉ニ至リ、西流室町ニ至リ、南流四條ニ至リ、西流西洞院川ニ入ル、

西洞院川

一條町尻ヨリ南流シ中御門ニ至リ、西流西洞院ニ至リ、南流九條ニ至ル、

堀川

一條ヨリ九條ニ至ル、堀川廣サ式ニ四丈ト記セリ、今モ一條ヨリ九太町ノ間ハ舊形ヲ存セリ、

大宮川

一條ヨリ九條ニ至ル、二條ヨリ下ハ芥川ノ稱アリ、皇城内御溝ノ水ハ此川ヨリ引ケリ、陽明門ノ北ヨリ大垣ノ下ニ通シテ、大内裏ノ内ニ入り、皇宮内ノ御溝トナリ、郁芳門ノ南ヨリ又大宮川ニ出ツ、知顯抄ニ、二條より上をば、清淨にさはやけく、塵をたにうかへず、さて此御溝水の末を、二條の北郁芳門の南より又大宮にやり出たり、此より下は清めさはやく事なく、あまつさへ大内の朝きよめの塵あくたなと流れいてよそありぬへき云々トアリ、

耳敏川

大内裏ノ南二條大路ノ御溝ニシテ、大宮川ト西大宮川トニ通ス、今千本聚樂廻ノ西ノ小溝ヲみよつ川ト云フ、正ニ耳敏川ノ舊址ニ當レリ、其轉訛ナルヘシ、祓除ヲ行ヒシ所ナリ、

神泉苑ノ池

大宮川ノ水ヲ引キ、之ニ注ク、神泉苑池ハ數町歩ニ亘ル大池ニシテ、大旱ノ時ハ、京民ニ之ヲ汲ムコトヲ許シ、又京外ノ水田ニ引用スルコトヲ許セシコトアリ、今存スル所ハ蓋シ其一偏ナルヘシ、

右京

西大宮川

一條ヨリ九條ニ至ル、今北野右近馬場ノ小溝ハ、其舊址ナリト云フ、

西堀川

一條ヨリ南流九條ニ至ル、西堀川ハ即チ紙屋川ニテ、其傍ニ紙屋院アリ、用紙ヲ抄出セシ所ナリ、又替川荒見川ノ稱アリ、水源ハ北山ヨリ出ツ、古今祕抄ニ、いまも仁和寺の東の堺に侍る、それを世俗には紙屋川といふなりトアリ、仁和寺傳モ亦然リ、

西洞院川

一條ヨリ九條ニ至ル、西洞院ハ佐比大路ナリ、故ニ又佐比川ト曰フ、
類聚國史ニ、弘仁十四年十月佐比川ニ幸シ、修禊ノ事アリ、
西室町川

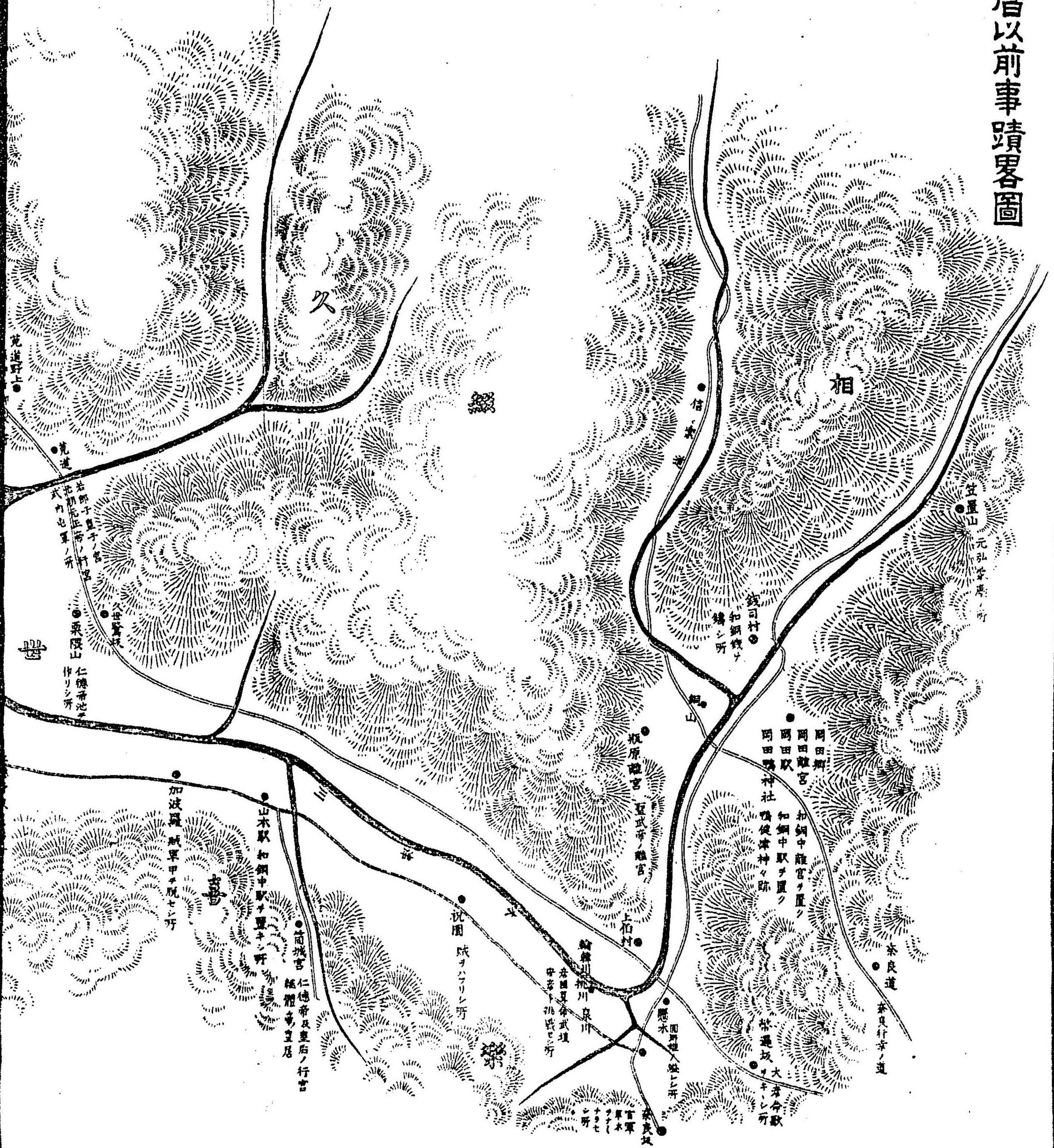
一條ヨリ南流松井小路ニ至リ、東折シテ西洞院川ニ入ル、
西京極川

一條ヨリ九條ニ至ル、

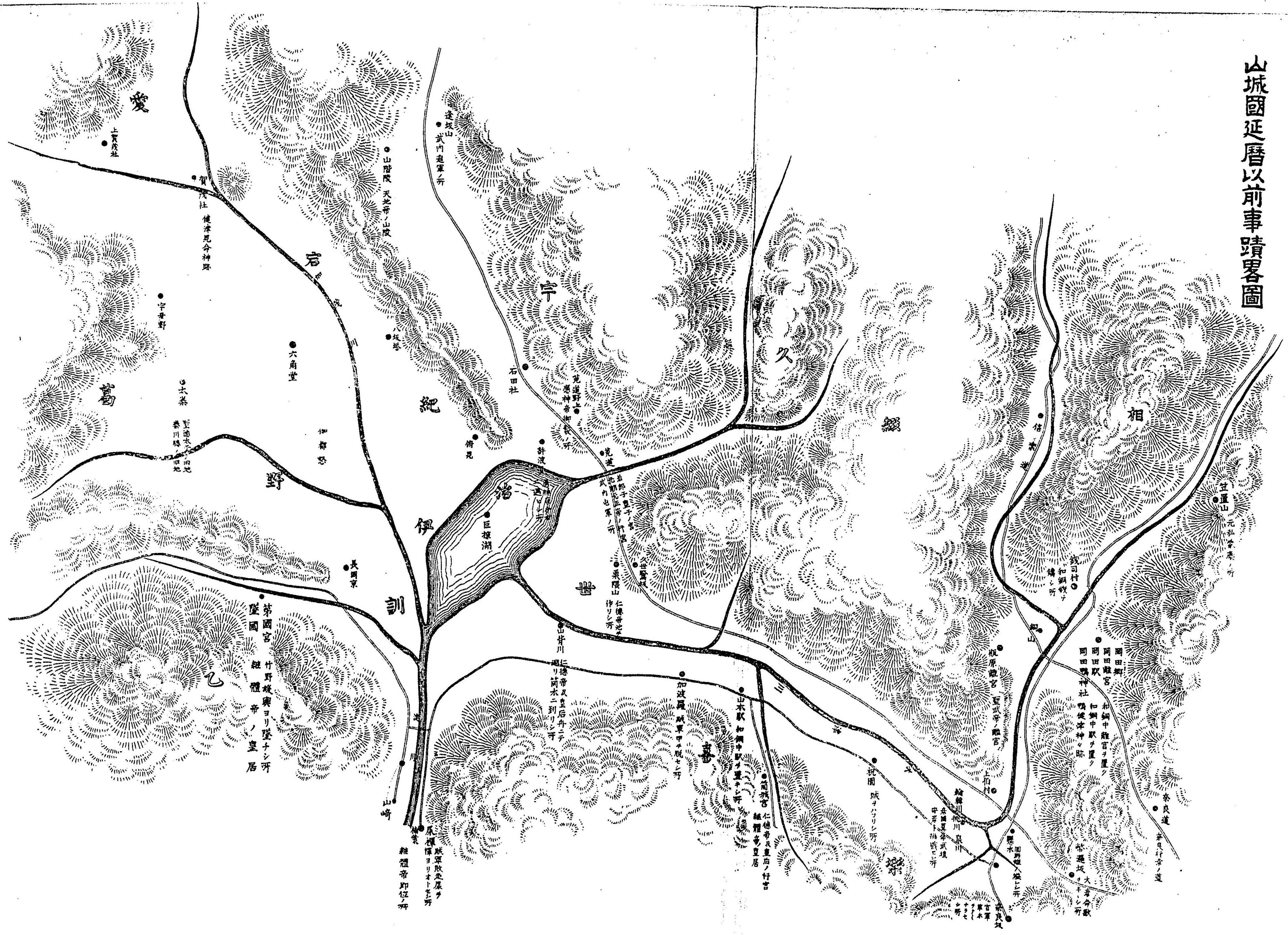
按ニ以上諸川ハ京中ノ川脈ニシテ、市坊ノ小溝ハ皆此諸川ニ注
入シ、九條ニ出テ、京外ニ流出セシナルヘシ、

平安通志卷之一

山城國延暦以前事蹟畧圖



山城國延曆以前事蹟畧圖



愛

野

宇

宇

久

相

野

伊

訓

世

喜

梁

桑

賀津社 健甕見命神跡

宇野野

日太茶 聖徳太子御地 桑川橋 四地

六角堂

山階院 天北帝ノ山城

武内進軍ノ所

石田社

許波

光道

在野子野ノ所 北朝正徳ノ所 武内進軍ノ所 桑原山 押リシ所

巨椋湖

山背川 仁徳帝及皇后舟ヲ 河内水ニ到リシ所

加波羅 城軍中ノ所

山本 和銅中ノ所 仁徳帝及皇后ノ行宮 和銅中ノ所 和銅中ノ所 和銅中ノ所

祝園 城オノ所

上柏村

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

第國宮 竹野城 興ヨリ 隆ナシ 所 隆國 和銅中ノ所 隆國 和銅中ノ所 隆國 和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

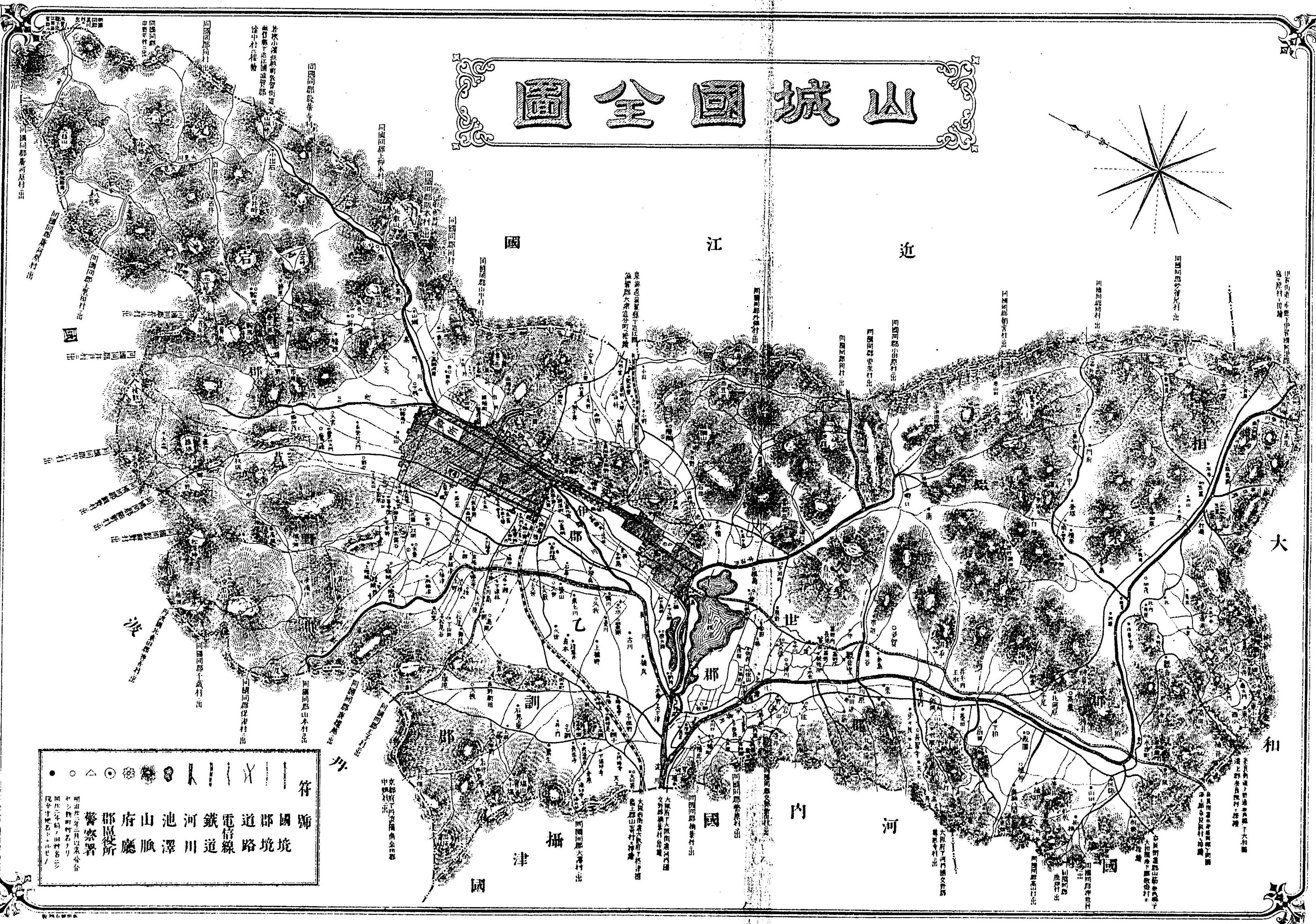
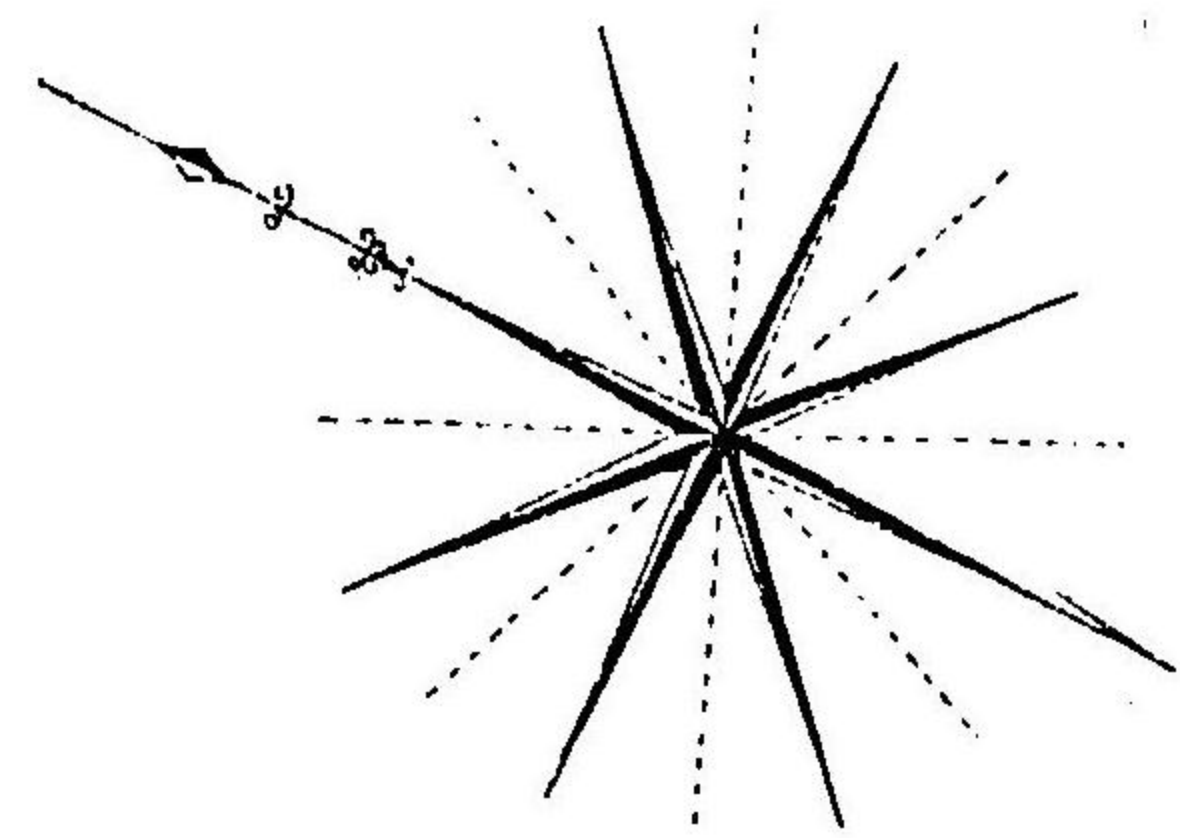
和銅中ノ所

和銅中ノ所

和銅中ノ所

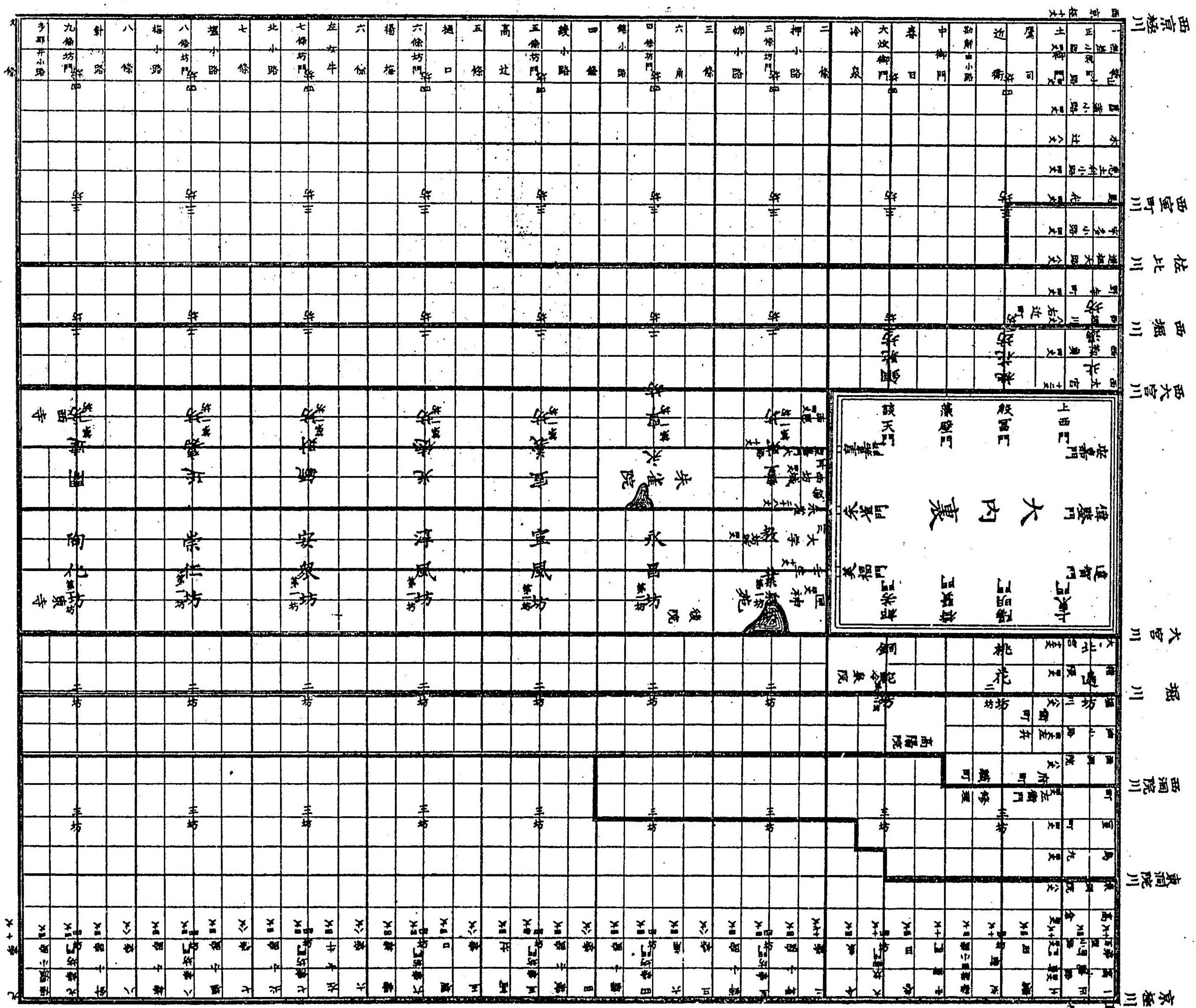
和銅中ノ所

山城全國圖



符
 國郡
 池河鐵道
 山澤川道
 府廳
 郡署
 警察署

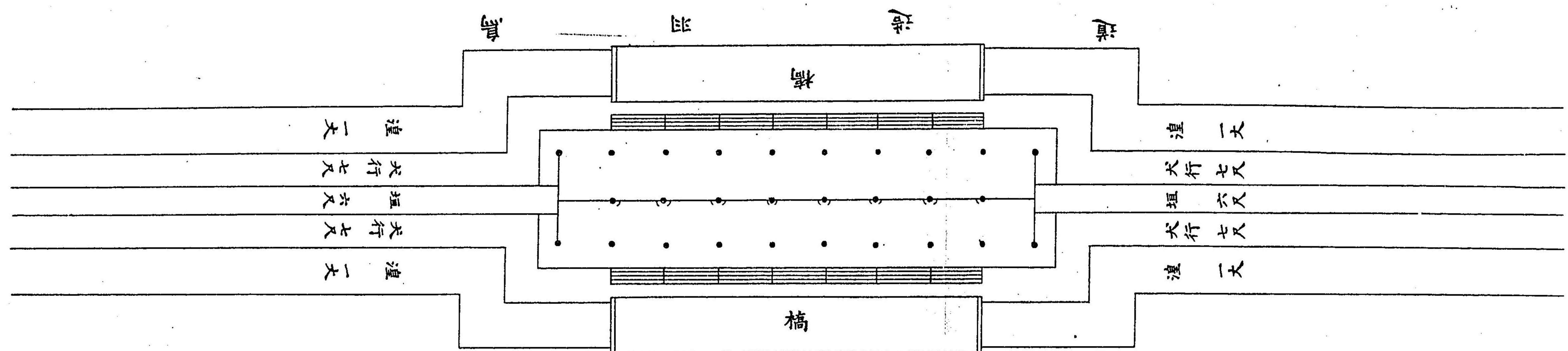
平安京全圖及川路圖



西京堀川 西宮川 西園院川 高麗院川

羅城門及朱雀九條大路圖

但三分五厘一丈



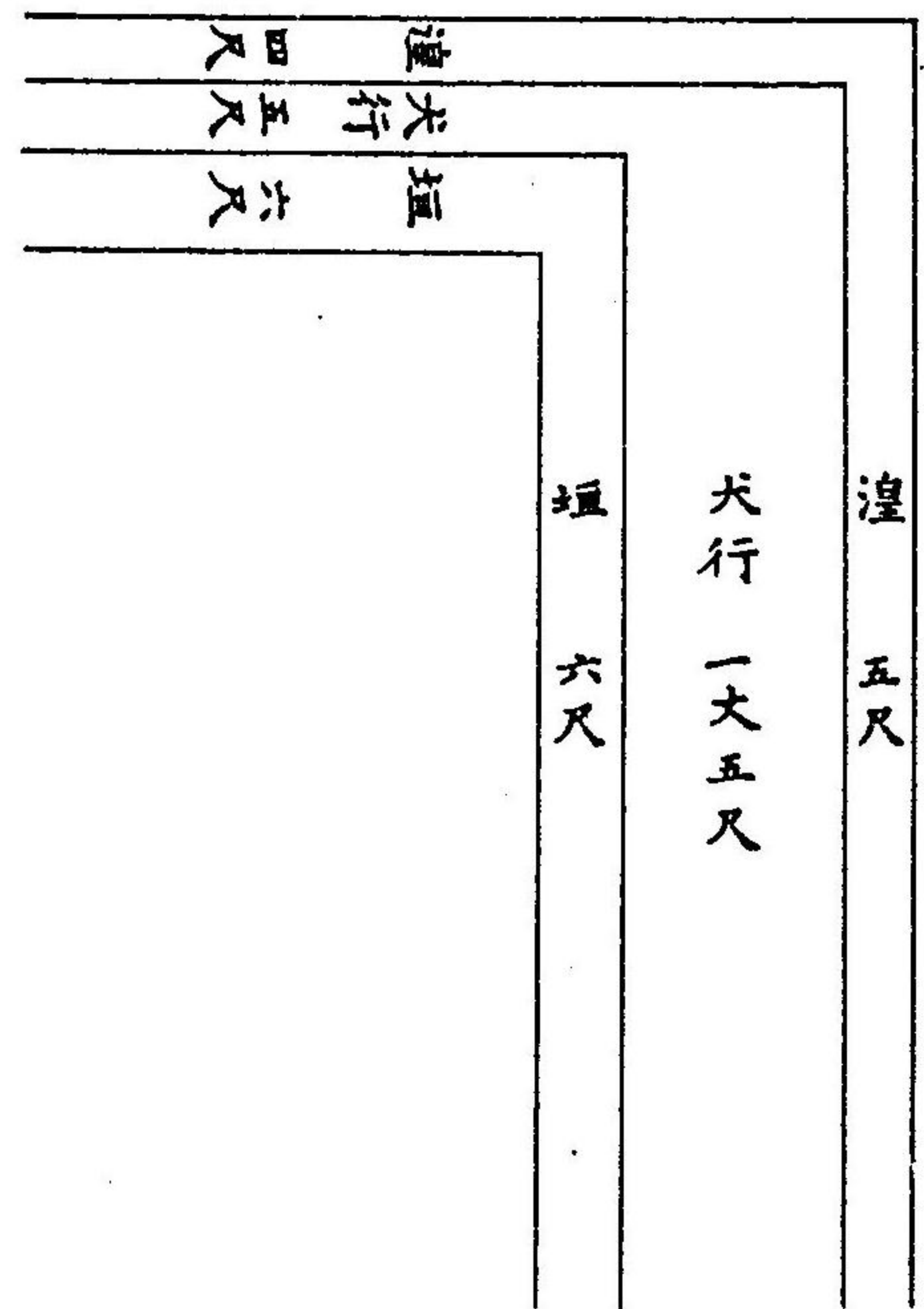
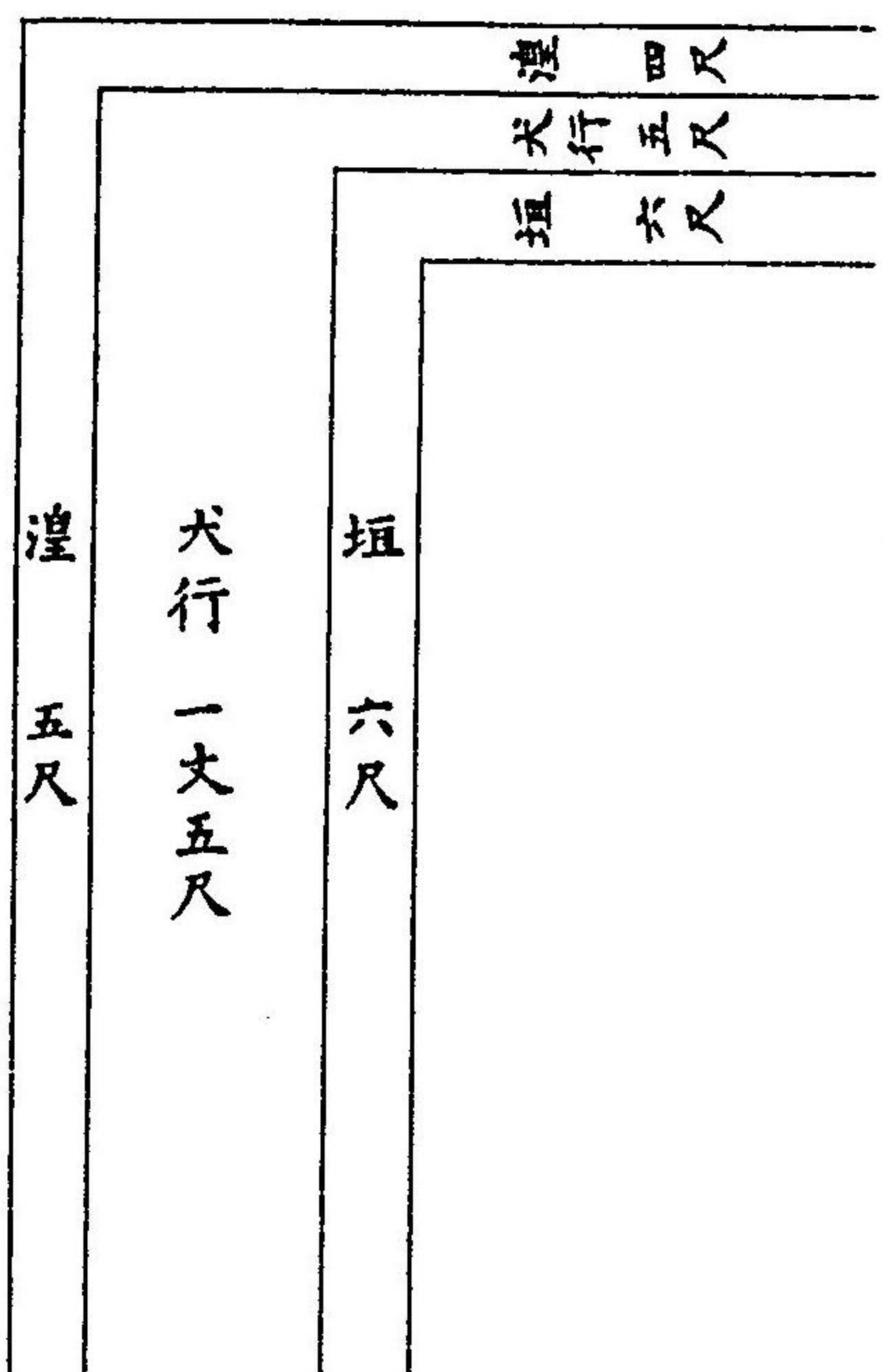
九條大路十二丈

自道至道六丈八尺

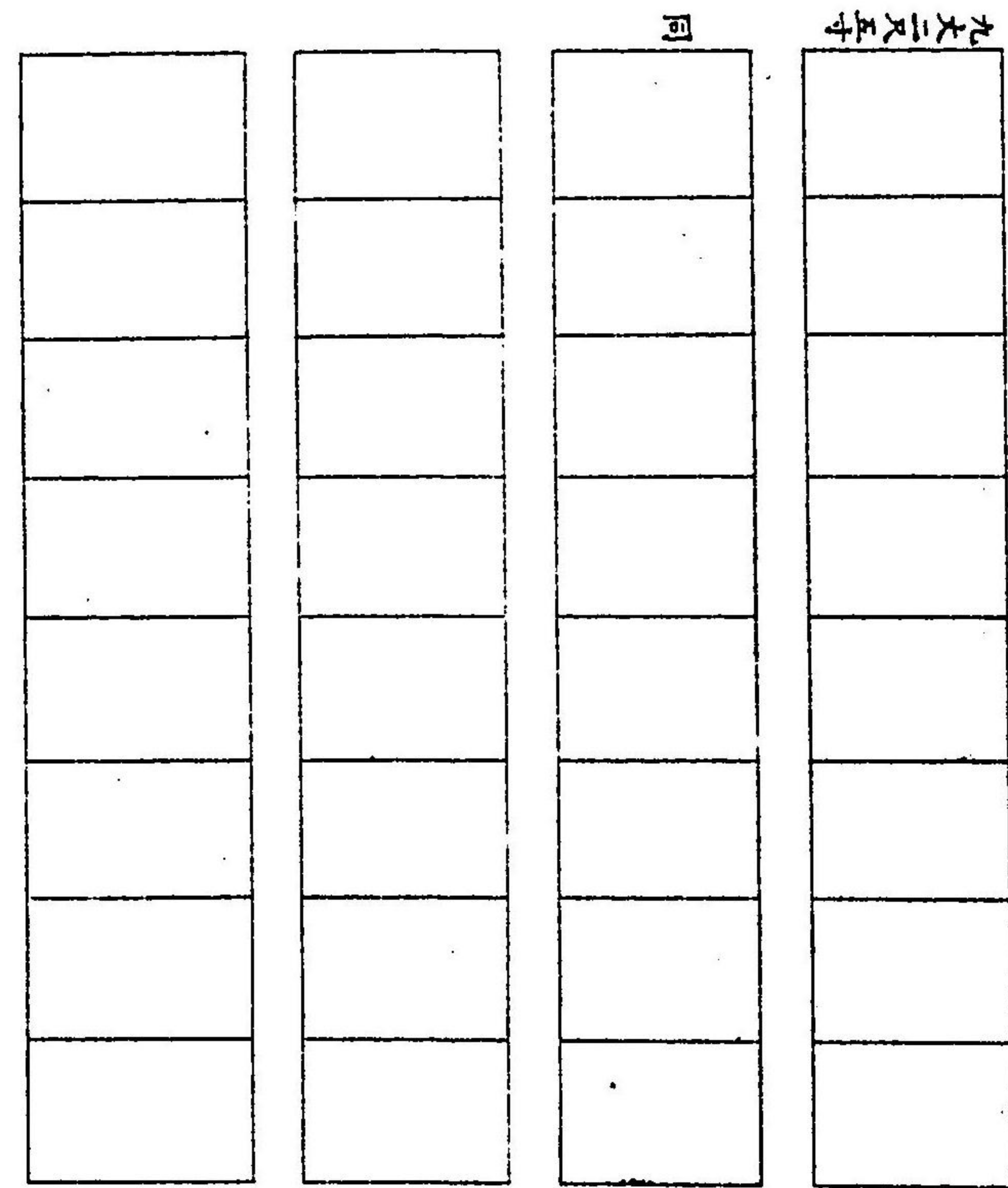
九條大路十二丈

自道至道八丈八尺

朱雀大路二十八丈



市人町制



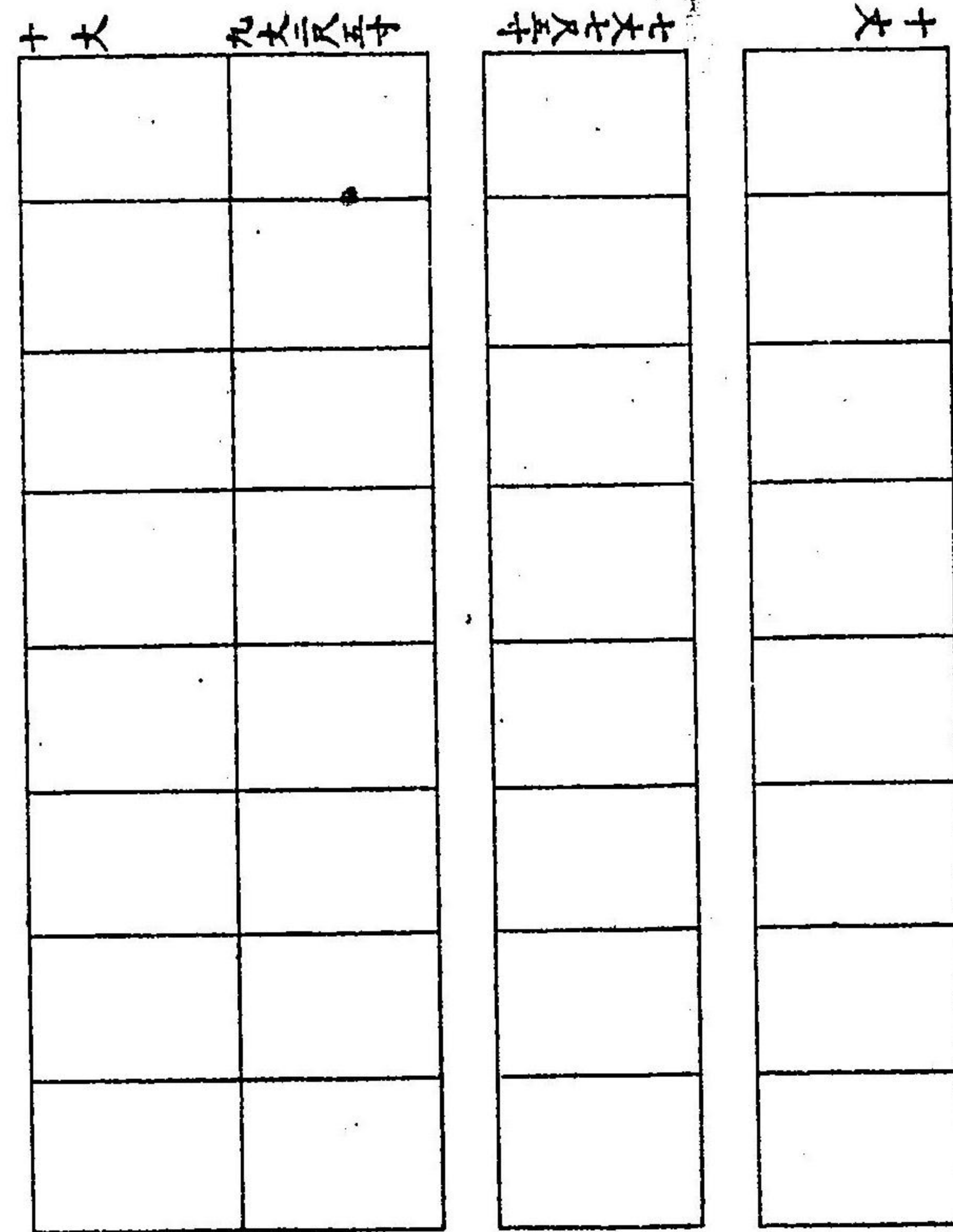
徑廣一丈

徑廣一丈

徑廣一丈

京職式曰凡町内開小徑者大路邊町二丈廣一丈市人町三丈廣一丈自餘町一丈廣一丈

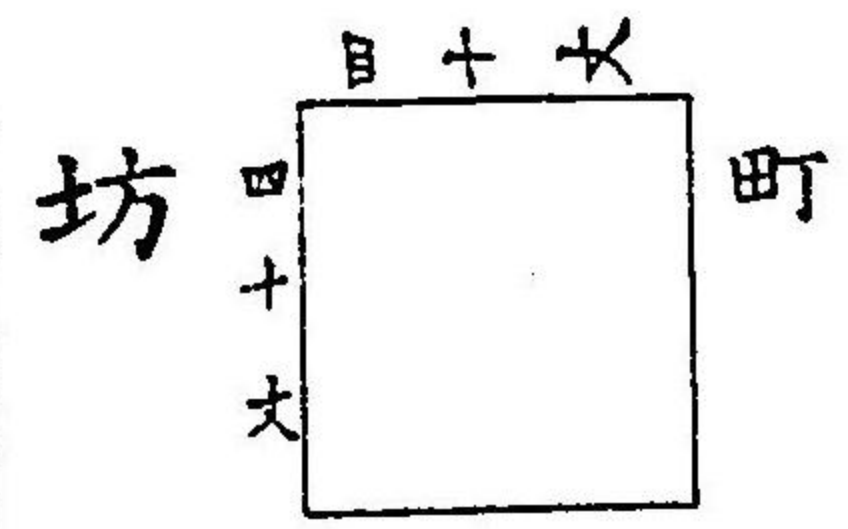
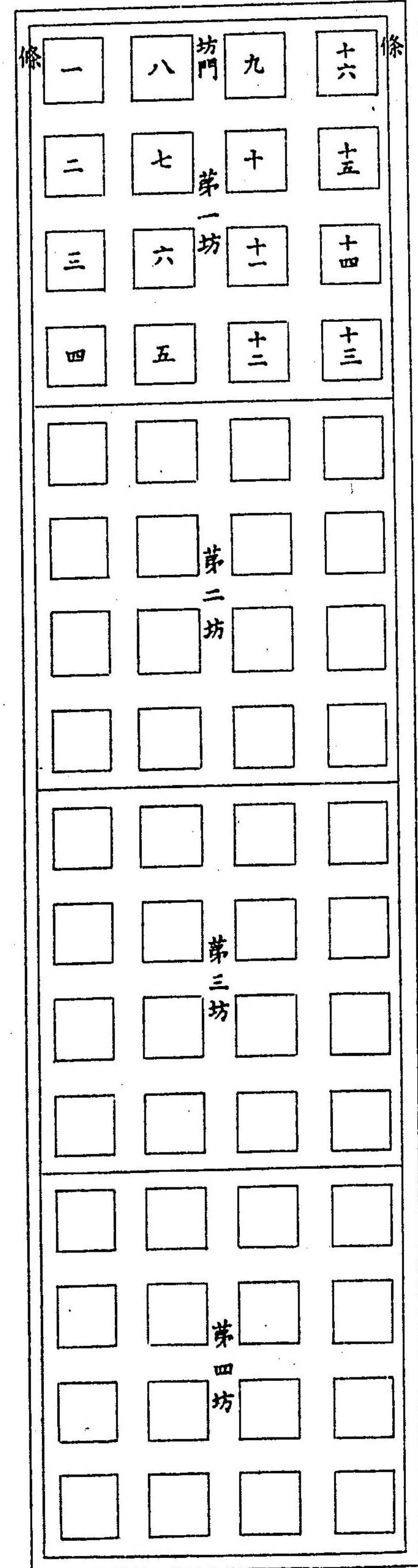
大路邊町制



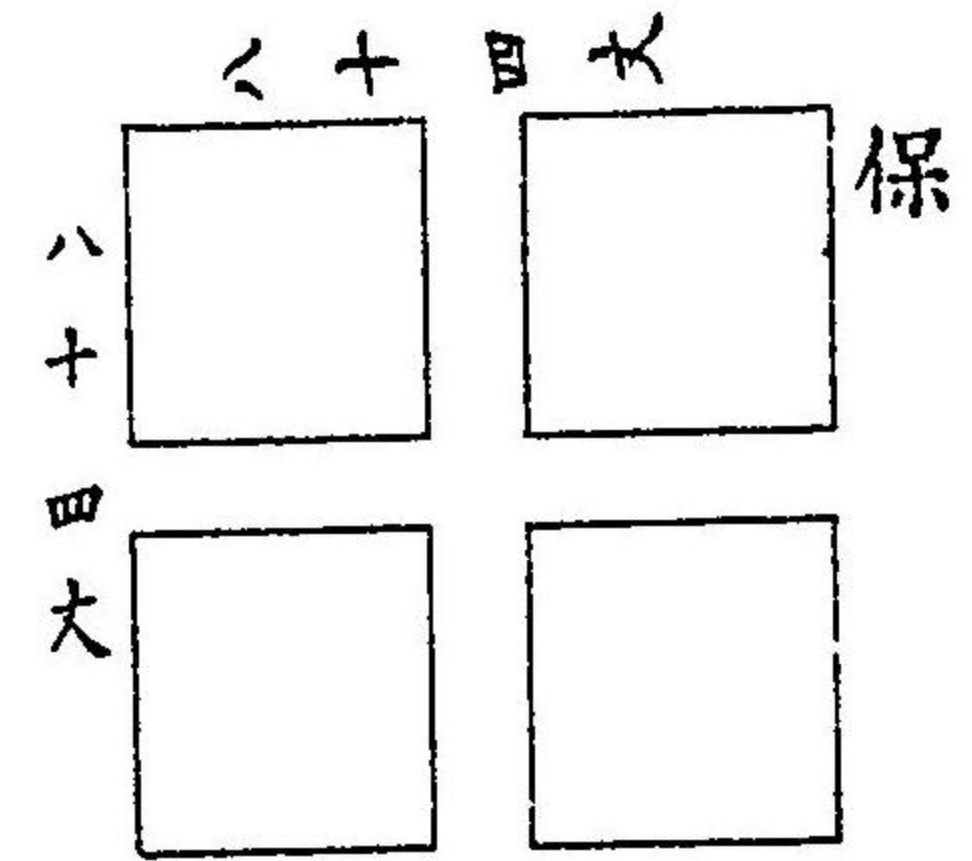
徑廣一丈五尺

徑廣一丈五尺

町内通路圖
延喜式定ル所



坊制圖



田行八門圖

北

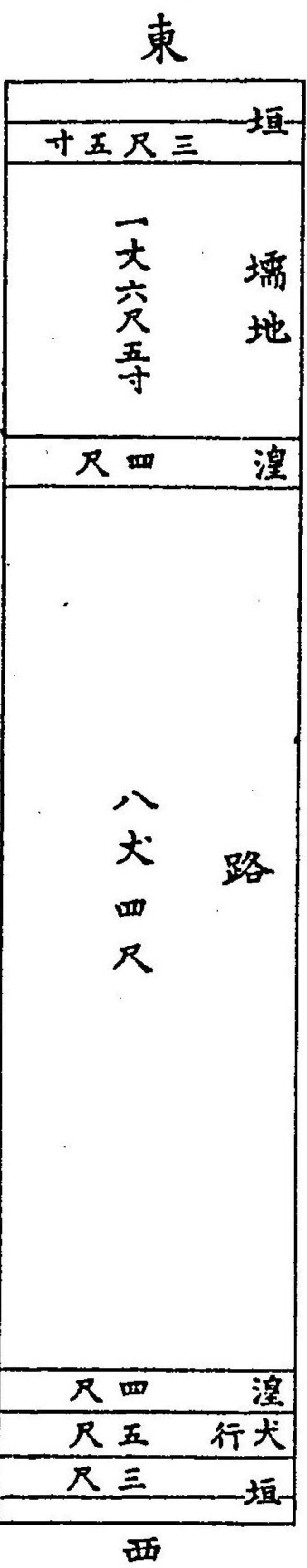
西一行	北門	北門	北門
西一行	北門	北門	北門
西一行	北門	北門	北門
西一行	北門	北門	北門
西一行	北門	北門	北門
西一行	北門	北門	北門
西一行	北門	北門	北門
西一行	北門	北門	北門

西三行	北門	北門	北門
西三行	北門	北門	北門
西三行	北門	北門	北門
西三行	北門	北門	北門
西三行	北門	北門	北門
西三行	北門	北門	北門
西三行	北門	北門	北門
西三行	北門	北門	北門

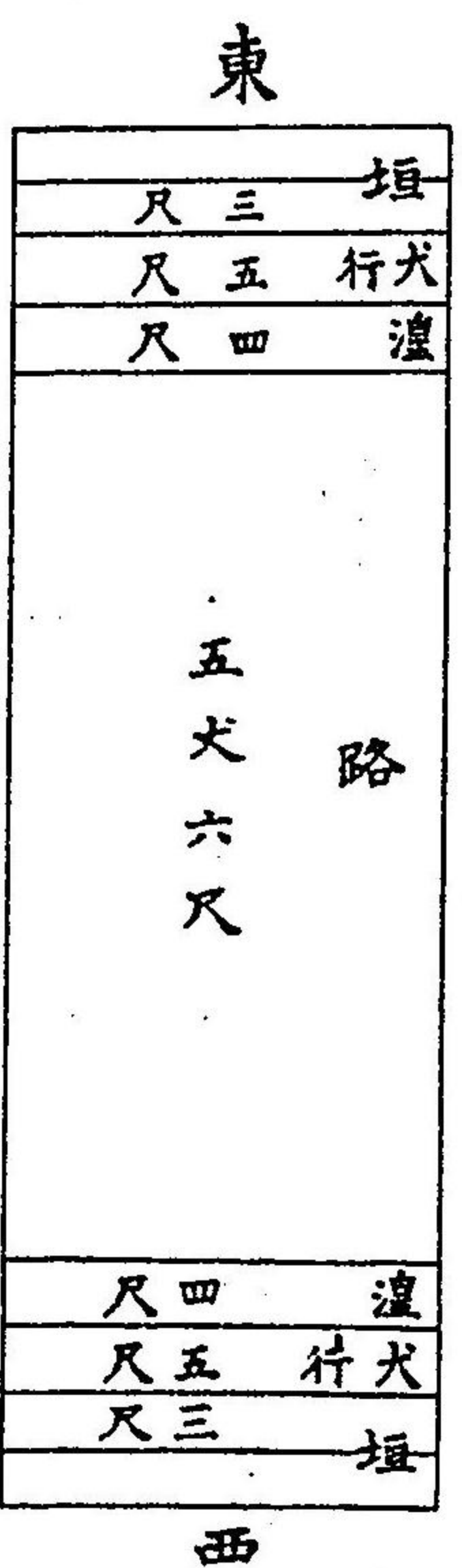
南

緘大小路量

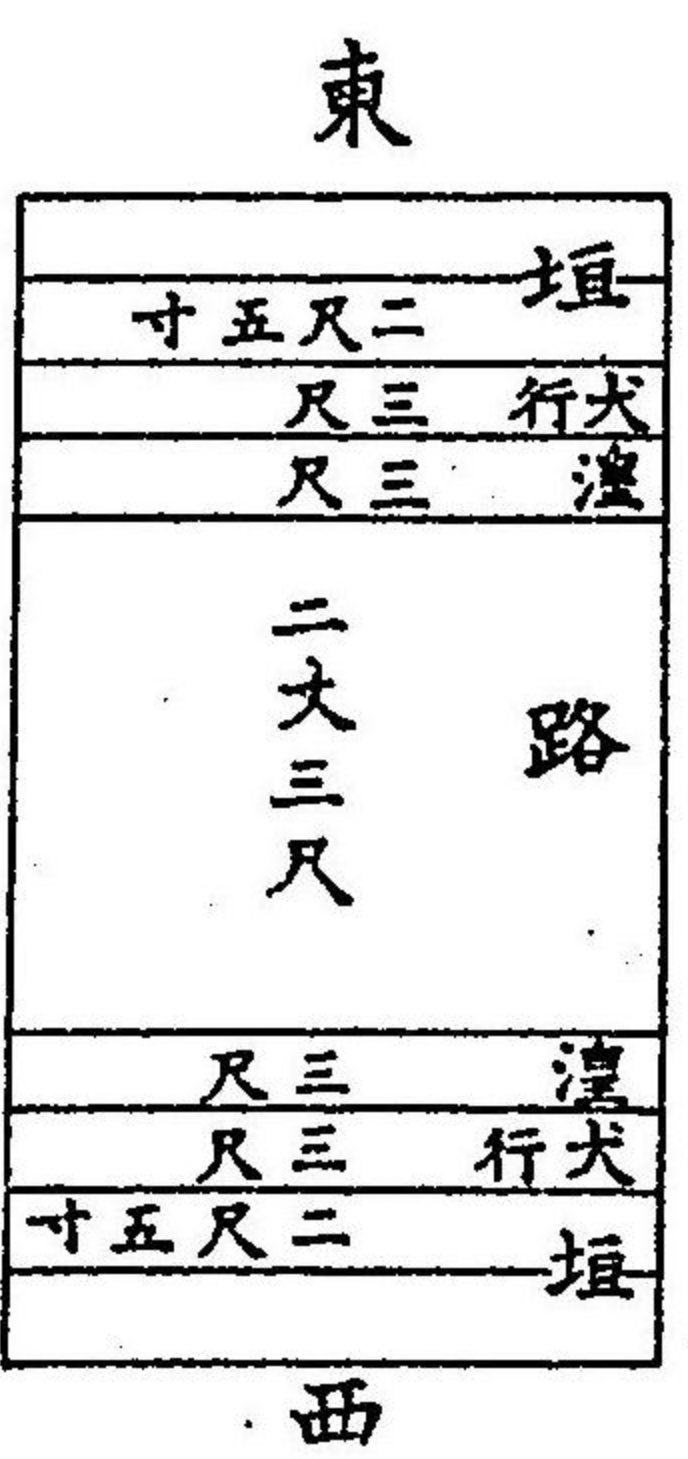
西大宮大路十二丈ノ量 東大宮大路同之



壬生西洞院東洞院大路廣各八丈ノ量



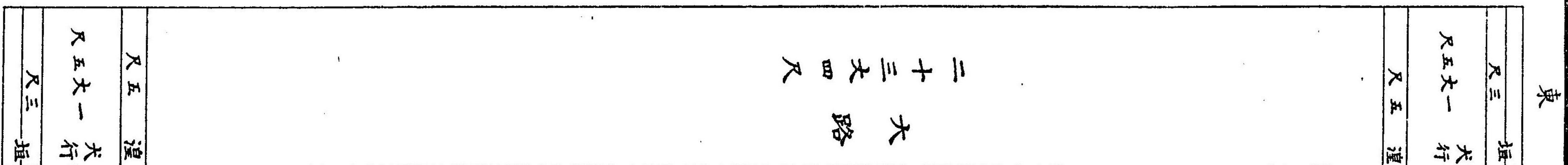
小路各廣四丈ノ量



堀川路 廣八丈ノ量

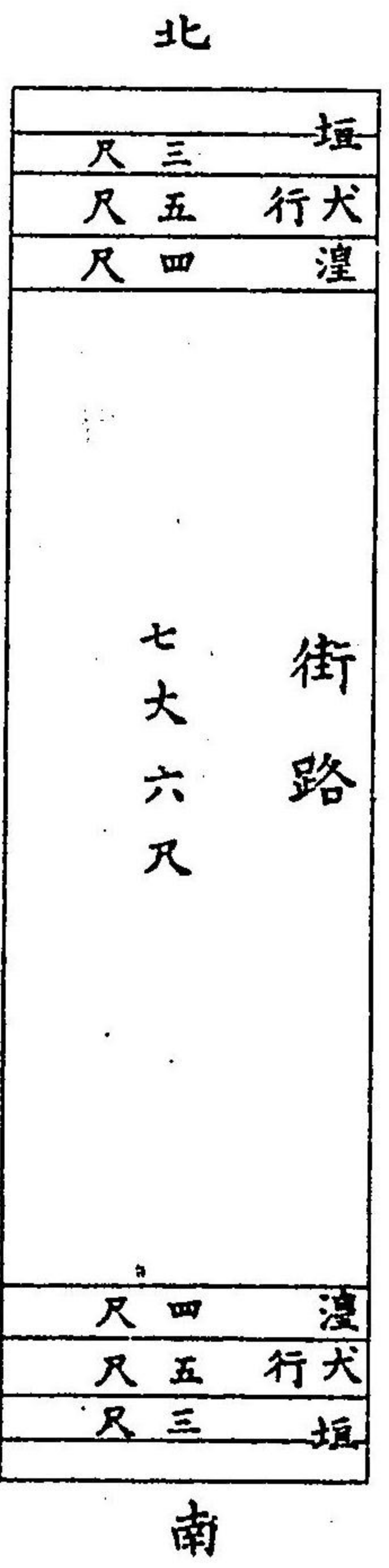


朱雀大路廣二十丈ノ量

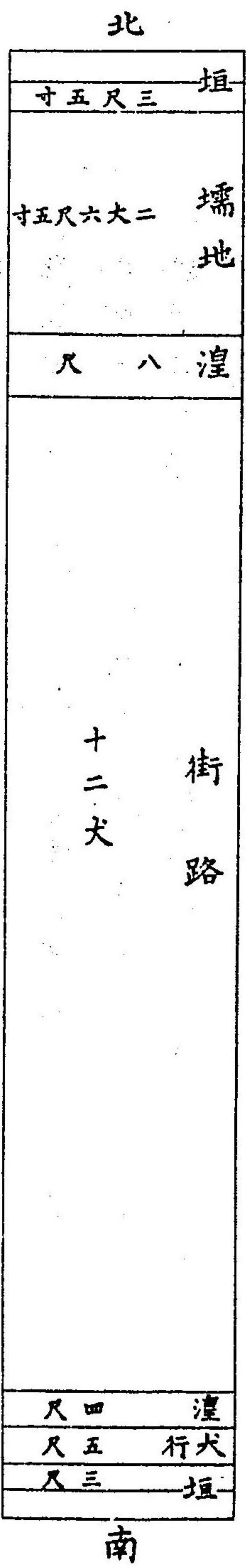


横大小路量

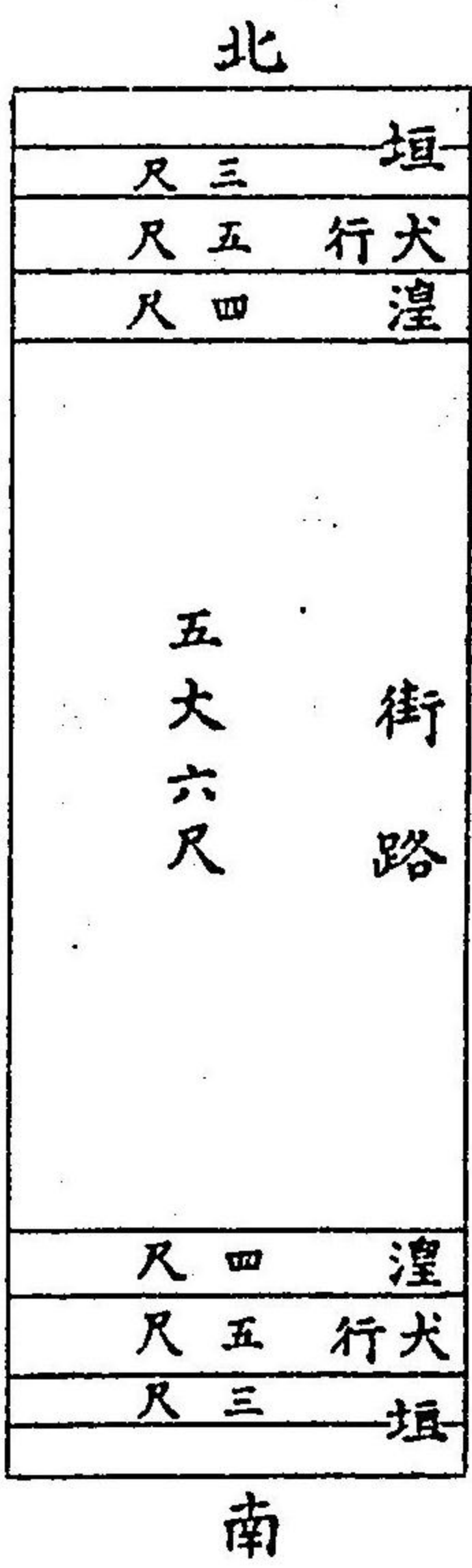
一條土御門近衛中御門大炊御門大路番



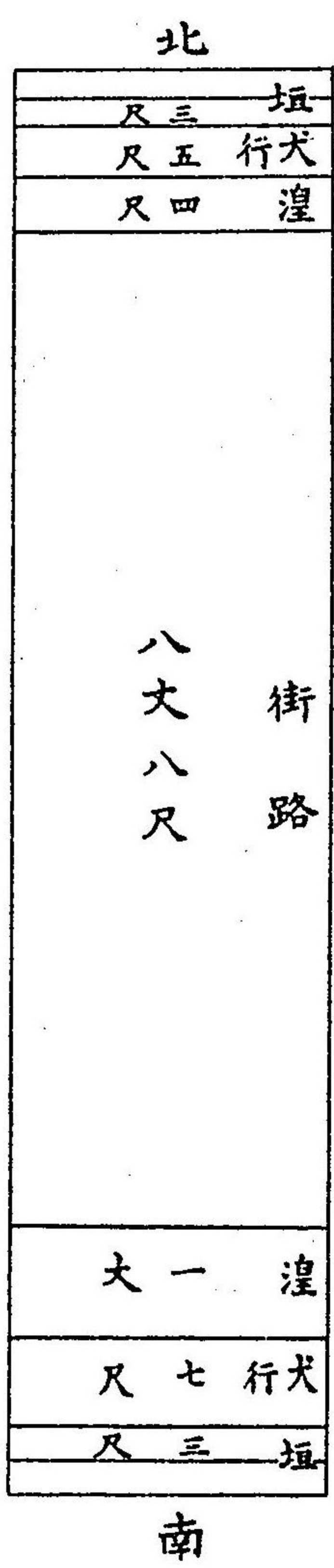
二條大路廣十七丈番 但大内裏北面三條ノ南面ニ同シ



三條四條五條六條七條八條大路廣八大番



九條大路十二丈番



各四丈ノ小路ハ縦ノ小路ニ同シ

二條大路、北、南、東、西、各、百、八、十、步、廣、一、百、八、十、步、深、一、百、八、十、步、

北	三	八	五	十
東	二	六	八	五
南	八	八	八	八
西	四	八	三	八

二條大路、北、南、東、西、各、百、八、十、步、廣、一、百、八、十、步、深、一、百、八、十、步、

北	三	八	五	十
東	二	六	八	五
南	八	八	八	八
西	四	八	三	八

一、新、土、御、門、止、御、中、御、門、大、御、門、大、御、門、大、御、門、

蘇、大、十、器、置

平安通志卷之二

湯本文彦等編

第一編

平安京

神泉苑

神泉苑ハ、二條ヨリ南、大宮ヨリ西、壬生ヨリ東、三條ヨリ北ニアリ、南北四町、東西二町ヲ占メ、其廣袤南北百七十二丈、東西八十四丈タリ、（現今ノ歩數ニ改算スレハ、四萬〇百四坪餘ナリ）平安京建奠ノ時、造營スル所ニシテ、第一ノ禁苑ナリ、桓武帝ヨリ以來、歷代天子ノ臨幸遊宴アリシ所ナリ、夫レ大内裏ハ、建築ノ美ナル、造營ノ大ナル以テ、加フルナシト雖モ、其遊觀ノ林泉ニ至テハ、一モアルコトナシ、彼ノ紫宸殿ノ左近櫻、右近橘、清涼殿ノ吳竹、漢竹、ノ如キ、又梨壺、藤壺、梅壺、桐壺、ノ如キ、皆殿舎ノ砌下ニ、數株ノ花木アルニ過キス、故ヲ以テ宸遊ノ事アレハ、必ス此苑ニ臨幸アルヲ例トス、故ニ延曆以來、臨幸ノ事ヲ記スル、史書ヲ絶タス、或ハ遊宴アリ、或ハ雅樂アリ、或ハ文人ヲ召シ詩ヲ賦シ、或ハ力士ヲ召シ相撲ヲ爲シ、又ハ釣魚ノ遊アリ、或ハ放隼ノ興アリ、且當時ノ詩文集、凌雲集、文華秀麗、經國集、本朝文粹、其他學士名家ノ集中ニ、此苑ノ御製及詩作ヲ記スル、實ニ少カラス、蓋シ林園森鬱、花樹菁麗

平安通志 卷之二

池水汪洋、岩石奇古、其間宮殿樓閣、亭榭橋梁相連、春花秋月、四時ノ景皆宜シ、實ニ平安城第一ノ名苑ナリシナリ、弘仁内裏式ノ九月菊花宴ニ曰ク、皇帝御乾臨閣、諸衛服上儀、内侍臨東檻、喚大臣皇太子着座、及大臣令喚群臣等、儀并如常、中興先是女樂預候於東瀧殿、益一兩行、乘舟渡就閣前幄、奏樂訖云々、本朝文粹ニ源順カ神泉苑者、禁苑之第一也、紅林地廣、吞楚夢於胸中、綠池水高、縮吳會於眼下、云々、又放隼獲水禽百八十等、以テ當日ノ勝概、園池ノ廣大ヲ想見スルニ足ルヘシ、故ニ其盛時ニ在テハ、別當ヲ置キ、近衛次將ヲ以テ之ニ充テ、之ヲ保管セシム、天長中、早魃アルヤ、弘法大師ニ勅シ、請雨ノ祈禱ヲ爲シ、善女龍王ヲ池上ニ祭ル、又御靈會ニハ、其會式ヲ此ニ行ヒ、市民ニ縱覽ヲ許シ、或ハ早魃アル時ハ、請雨ノ祈禱ヲ此ニ行ヒ、市民ニ池泉ヲ汲ムコトヲ許シ、又田地ニ灌溉スルコトヲモ許サレシナリ、王室已ニ衰フルニ及ヒ、此苑モ大内裏ト共ニ荒廢セシカ、承久亂後、北條泰時六波羅ニ在リ、名苑ノ廢滅ヲ歎シ、稍之ヲ修理セシト云フ、然ルニ南北朝戰爭、明德應仁ノ兵燹ヲ經テ、又荒廢セシナ、元和年中、筑紫ノ僧覺雅官ニ請ヒ、之ヲ再興シ、彼ノ請雨祈禱ノ事ヨリ、眞言宗ニ緣アルヲ以テ、東寺ノ附屬ト爲シ、以テ一寺トシ、神泉苑ト稱シ、以テ今ニ及ヘリ、現今存スル所ハ、其中央ノ東偏ニテ、僅ニ十分一ニ過キササルヘシ、然レトモ延曆造營ノ舊物ハ、今唯此苑アルノミ、實

ニ千歳ノ古跡ト謂フヘシ、神泉苑ノ構造築成ハ、今詳ナラサレト、古書中散見スルモノニ就キ、其個所ヲ掲ケ、其事ヲ撮録シ、以テ梗概ヲ示ス、左ノ如シ、其御製及他文詞ノ此苑ニ係ルモノハ、之ヲ文詞篇ニ記ス、

乾臨閣

苑ノ正殿ナリ、所在大小方向皆詳ナラス、然レトモ、天子臨御ノ正殿ニシテ、御座及皇太子親王大臣以下參議以上ノ座ヲ設ルヲ以テ、其宏大ヲ見ルヘシ、又屋上ニ鴉尾アリ、軒外ニ欄檻アリ、前ニ石階アリ、左右別ニ閣アリシヲ以テ、其結構巨麗ヲ想フヘキナリ、三代實錄ニ、

左右閣

製作大小詳ナラス、蓋シ乾臨閣ノ左右ニ在リシナルヘシ、

東西釣殿

所在製作詳ナラス、蓋シ池ノ東西ニ在リシナルヘシ、

東西瀧殿

同上

橋

同上

門

東ノ南門ヲ正門トス、外ニ南門、西門、東北門アリ、

大學寮

我朝文教ヲ尙ヒ、大學ヲ置キ、以テ國士ヲ養フ、其來ルコト久シ、大寶令ヲ定ルニ及ヒ、其制始テ詳ナリ、爾來歷朝之ニ仍リ、其職員ヲ備ヘ、其課程ヲ立テ、其資給ヲ厚クシ、以テ育英儲材ノ所トス、平安京奠都ニ及ヒ、大學寮ヲ宏大ニシ、遷都ノ初メ、首トシテ學資ヲ優給シ、以テ益、教育ヲ重セララル、故ヲ以テ人才輩出、文教益隆ナリ、其職員學科教育儀式ノ事ハ、文學志ニ詳カナリ、其地域ハ皇城ノ南、神泉苑ノ西、朱雀ノ東、三條坊門ノ北ニ在リ、方二町ヲ占ム、南北八十四丈、東西之ニ同シ、四周土垣アリ、東ノ方ニ正門アリ、其中ニ聖廟、本寮、都堂、南堂、算堂、明法堂、及厨町等アリ、其大形ハ、正門ヲ入り、北ニ廟堂院アリ、南ニ向フ、先聖先師、九哲ノ廟堂ナリ、其南ニ廟倉院アリ、廟倉院ノ南ニ本寮アリ、其門ハ南面ス、廟堂院ノ西ニ都堂院アリ、南面ス、此ヨリ南ニ文章院、筆道院、明法道院、相次ケリ、都堂院ノ西ニ一區

域アリ、之ヲ餘戸ト稱ス、其南ニ四堂厨町アリ、本寮厨町ハ其南ニ在リ、東南隅ナリ、

本寮

本寮ハ、大學寮ノ本部ニシテ、諸寮ヲ總轄スル所ナリ、即テ頭以下職事ノ曹局ナリ、學生ノ簡試、亦此ニ行ハル、廟倉院ノ南ニ在リ、南北二十七丈、東西二十八丈、南面ヲ正門トス、四脚門ナリ、北ニ北門アリ、廟倉院ニ通ス、

正廳

中央ニ在リ、南面ス、南北七間、東西四間、瓦屋、東西榮、瓦、中央ヲ正廳トシ、南北廂アリ、又廳堂、南廳、南廳屋、本寮廳屋、試廳等ノ稱アリ、東西曲廊アリ、以テ東西廳ニ通ス、

東廳

正廳ノ巽位ニアリ、南北五間、東西四間、二面、中央ヲ正堂トシ、東西ニ廂アリ、瓦屋、南北榮、西面ス、

西廳

正廳ノ坤位ニアリ、五間二面、瓦屋、南北榮、東面ス、

步廊

廣二間本廳ヨリ各東西ニ出ツル五間更ニ南ニ折ル五間以テ東西廳ニ通ス、

北門内幄

釋奠祭日五丈幄ヲ北門ノ内ノ東ニ立テ職事ノ所トナス、

廟堂院

東西二十八丈南北十八丈四周土垣アリ正門南面ス、

正門

東西三間八脚門額ヲ掲ク曰ク文宣王廟神護景雲二年七月勅東西掖門アリ

廟堂

孔子ノ廟ナリ又孔堂ト稱ス瓦屋東西榮東西七間二面南北四間三方櫃子粉壁南面楯形櫃子椽黒漆戸三間前ニ石階三所各三級堂ノ北位ヲ神主ノ座トシ正ニ南面ノ中戸ニ當ル前ニ廂アリ東西ニ序アリ釋奠ノ祭儀此ニ行ハル事ハ延喜式ニ詳ナリ、其神主ノ座ハ堂ノ中ニシテ正室ニ先聖孔子東ニ先師顔子及ヒ四哲西ニ五哲各南面ス、

廟延

廟ノ南延ニシテ南門ノ内ナリ釋奠式ノ時其鋪設ヲ此ニ爲シ儀ヲ行フ所ナリ事ハ延喜式ニ詳ナリ、

東舍

廟堂ノ巽位ニ在リ南北五間東西四間西面ス中右記ニ大治四年八月二日釋奠廳屋破損ヲ以テ東舍ヲ以テ廳屋ニ准シ其式ヲ行ヒシコトアリ、

西舍

東舍ト同シ之ト相向フ、

廟倉院

廟堂院ノ南ニ在リ其門相對ス東西二十八丈南北九丈四周垣アリ又南ニ門アリ本寮ニ通ス、

廟

其西ニ在リ東面ス南北五間東西三間瓦屋南北榮聖像ノ畫影ヲ藏スル所ナルヘシ、

倉屋

其東ニ在リ、五間ニ二間、二屋相向フ、
 案ニ、廟倉院ハ、先聖先師九哲ノ影像ヲ納ムル所ニシテ、倉屋ハ、其祭
 器ヲ藏スル所ナリ、廟堂ノ神主ハ、木像ヲ用レハ、此ニハ別ニ畫影ヲ
 藏セシナリ、江家次第ニ曰ク、或説云、吉備大臣入唐時、持弘文館之畫
 像歸朝、安置太宰府學業院、大臣又命百濟畫師奉圖、彼本置大學寮云
 々、又延久四年、源隆俊仗座ニテ、大學寮先聖先師九哲等廟像修補セ
 ラルヘキヲ奏セシ事ヲ記シテ曰ク、件像元慶四年巨勢金岡以唐本
 所奉圖繪也、而年序久積、破損尤多、仍所被修補也云々、四月三日、今日
 大學廟像奉修補、右少辨大江朝臣匡房、右大史紀成季、參向彼寮行事
 云々トアルモノ是ナリ、倉屋ハ祭器ノ類ヲ藏スル所ニシテ、事ハ大
 學頭菅原是綱ノ奏記ニ見エタリ、朝野群載

都堂院

廟堂院ノ西ニ在リ、占地廟堂院ノ如シ、其建物モ大凡相同シ、釋奠ノ
 日、講論ノ行ハル、所ナリ、事ハ延喜式ニ詳ナリ、

都堂

東西七間、南北四間、瓦屋、東西榮、南面ス、甃瓦、中央ヲ正堂トシ、南北ニ

廂アリ、南面石階三所ヲ設ク、

釋奠ノ日、都堂院ヲ裝飾シ、博士經ヲ講シ、皇太子以下之ニ臨ム、問者
 難問ヲ發シ、執經之ニ對フ、其儀嚴肅ナリ、講論終リ、酒ヲ賜ヒ、祿ヲ給
 スル例アリ、事ハ延喜式ニ詳ナリ、

東舍

西舍

位置廟堂院ノ東西舍ニ同シ、講論ノ日、六位以下ノ着座スル所ナリ、

三道堂

明經、竿、明法ノ三道ノ學堂ナリ、都堂院ノ南本寮ノ西ニ在リ、通巷ヲ
 以テ相隔ツ、

南堂院

三道院ノ第一ニシテ、都堂院ノ南ニ在リ、南北十六丈、東西二十八丈、
 南面ヲ正門トス、四脚門ナリ、明經科ノ學堂ナリ、

正廳

其北位ニ在リ、南面ス、七間二面、瓦屋、東西榮、正堂南北廂ヲ分ツコト
 都堂院ト同シ、

東舎

正堂ノ巽位ニ在リ、五間二面、瓦屋、南北榮、西面ス、

西舎

正堂ノ坤位ニ在リ、五間二面、瓦屋、南北榮、東面ス、

步廊

正廳ヨリ各東西ニ出ツル四間、更ニ南ニ折ル四間以テ東西舎ニ通ス、

竿道院

明經道院ノ南ニ在リ、通巷ヲ隔ツ、其占地構造、門皆明經道院ニ同シ、

明法道院

竿道院ノ南ニ在リ、通巷ヲ隔ツ、其占地構造、門皆竿道院ニ同シ、

餘戸

大學ノ西北角ノ一區ニアリ、神泉苑所傳圖、拾芥抄圖ニ餘戸ト記セリ、裏松固禪大内裏圖考證ニ、今案ヲ加ヘテ、若シ或ハ文章院ノ舊地カト云ヘリ、蓋シ文章院歷朝ノ重ンセラル、所ナレト、其所在ノ明カナラサルカ爲メナルヘシ、猶ホ後考ヲ待ツ、

案ニ、文章院ノ事ハ、本朝文粹載スル所ノ都在中ノ文ニ、夫文章院、國學之流焉、函

經味道之生、此焉詠業、吐鳳懷蛟之士、亦復容身ト、又大江匡衡ノ文ニ、伏檢故實、菅原大江兩氏、建立文章院、分別東西曹司、爲其門徒、習儒學者、氏姓之者、濟々、于今不絶トアリ、王朝最モ文章學ヲ重シ、是學ヲ建ツル、必ス他ノ科道ト同シカルヘシ、然ルニ今圖中別ニ其堂ヲ見ス、餘戸ヲ以テ之ニ充ツ、蓋シ先ツ荒廢セシヲ以テナルカ、猶考フヘシ、

厨町

本寮ノ南ニ在リ、蓋シ本寮附屬ノ厨ナリ、

四堂厨町

三道院ノ西ニ在リ、南北六十丈、東西二十丈、四堂ハ即テ文章、明經、竿、明法ノ四道ニシテ、厨町ハ其厨事ヲ掌ル者ノ在ル所ナリ、記傳道曹司モ亦此中ニ在リトアレト、其構造所在詳ナラス、王代ノ盛時、大學ノ學生、蓋シ數百人ニシテ、學資亦優厚ナレハ、其事ヲ掌ル職司モ少カラス、又學生ノ其内ニ寄宿スル者モアルヘク、皆此厨町ニアリシナルヘシ、今考フル所ナシ、

大學寮ノ設ハ、南都以上ニ在リト雖トモ、其隆盛ハ、延曆天長ノ際トス、桓武帝初メ大學頭タリ、蓋シ夙ニ文教ヲ振張シ、有用ノ才ヲ養成スルノ志アリ、故ニ平安

京ヲ營シ、車駕遷御ヨリ、僅ニ二旬ニ滿タス、他ノ事業ヲ施設スルニ及ハス、第一ニ大學寮ニ水田百町ヲ加ヘ、大ニ其資給ヲ厚クシ、其後式部少輔ヲ以テ大學ノ別當ニ補シ、以テ其職員ヲ重クシ、益、育英ノ政ヲ治メラル、故ヲ以テ學政大ニ振ヒ、人材彬々トシテ輩出セリ、此ヨリ大學ノ事ハ、朝政ノ重スル所トナリシカ、延喜ノ際ニ至テハ、稍、其弊ヲ生シ、殆ト有名無實トナリ、三善清行カ封事ニ、大學是坎壞之府、凍餒之卿トイヘル、ヲ見テモ、其衰頽ヲ知ルヘシ、延喜式ヲ見ルニ、大學ニ附スル出舉稻、水陸田等亦少カラス、蓋シ醍醐帝文教ヲ好ミ、清行ノ封事ヲ用井、再ヒ學資ヲ附セラレシナルヘシ、然レトモ本朝文粹ニ載スル所ノ保延三年式部大輔藤原敦光ノ封事ニ、校舍鞠爲茂草、蘋蘩蘊藻之莫、有累於供、搢紳青衿之徒、無處於學トアリ、左經記ニ、長元七年八月、大學廟堂紀傳明法曹司舍顛倒、百鍊抄ニ、保安三年八月、依廟堂頽危、於南廳舍座儲、其禮、人車記ニ、仁平四年四月、寮試正廳顛倒、以明經道屋爲正廳代トアルヲ見レハ、其廢頽ノ狀想見ルヘシ、學政ハ已ニ萎靡不振ニ陥ルト雖トモ、廟堂釋奠ハ恒例ノ禮式トナリテ、王室式微ノ時ニ及ヒテモ、猶行ハレタリ、治承元年四月廿八日、大火ノ時、大學寮モ其災ヲ免カレ、朝堂院ヲ始メ、再造ノ力ナキ時ナレハ、大學モ是ヨリ荒頽ニ及ヒタレト、其幾分ハ再造アリシモノ、如シ、山槐記ニ、治承四年八月、釋奠大學寮、火事以後、於

官廳所被行トアレト、百鍊抄ニ元仁元年三月廿六日、竊盜等打破大學寮廟倉、放下御影裏絹、又嘉祿二年十二月十二日、又此事アリ、曰ク、一年盜人之後、新調裏絹等也、及度々、尤可仰恐云々トアルヲ見レハ、猶廟倉院ハ存セシヲ知ルヘシ、園大曆後村上帝興國五年、北朝康永三年八月、大學寮官廳等破壞之後、先聖先師以下影被安仙洞トアリ、則テ僅ニ遺リシ廟倉院モ、遂ニ破頽セシナルヘシ、然レトモ釋奠ハ恒例ナルヲ以テ時々行ハレ、足利氏ノ中代マテハ、其式猶存セリ、又中古以來簡試ノ式モ間行ハレシコトモアリテ、舊記中ニ散見スレト、其ニ所謂告朔ノ餼羊タルニ過キス、眞ニ其遺形ノミ、其後海内亂離、京都衰頽、大學寮ノ遺址全ク荒廢セリ、其ヨリ百數十年ヲ經テ、元和偃武ノ後、後光明帝英明文ヲ好ミ、京都ノ學校ヲ起スノ叡旨アリ、計畫將ニ成ラントシテ、不幸崩御アリテ、果サス、荷田東滿幕府ニ建議シ、國學ヲ京都ニ起サントセシカ、是亦其實行ヲ見ルニ至ラ、仁孝帝ニ至リ、光格上皇ノ英旨ヲ承ケ、幕府ニ勅シ、學校ヲ建春門前ニ開キ、名ヲ賜ヒテ學習院ト曰フ、此ニ及ヒ、京都ノ學校再ヒ興レリ、事ハ文學志ニ詳ナリ、

私學

朝廷文教ヲ崇尚シ、大ニ學政ヲ修メラル、ニ及ヒ、諸家亦之ニ效ヒ、官ニ請ヒ各

私學ヲ興シ、以テ其一門ノ子弟ヲ教養スルコトヲ務メタリ。藤原氏ノ勸學院、和氣氏ノ弘文院、王氏ノ淳和院、橘氏ノ學館院、在原氏ノ獎學院ノ如キ是ナリ。就中勸學院ハ、藤原氏ノ權力ヲ以テ甚隆盛ニシテ、殆ト大學ト韻頡スル勢アリ。其後大學已ニ衰フルニ及テモ、藤原ハ猶勸學院ヲ維持スルヲ怠ラサリシカ、末世ニ及ヒテハ、唯其形式ノミトナレリ。其宗教ニ屬スルモノ、僧空海ノ建ル所ノ綜藝種智院アリ。

勸學院

左京教業第一坊三條ノ北、壬生ノ西ニ在リ、即チ獎學院ノ南ナリ。方四十丈、其門南ニ向フ、内ニ廟堂アリ、孔子ヲ祭ル、應堂アリテ、講習ヲナス。其大小製作、今詳ナラス。本院ハ、弘仁十年、左大臣藤原冬嗣、其家門子弟ヲ教養スル爲メニ、奏請シテ設置スル所ナリ。冬嗣封戸ヲ割キ、其資料ニ充ツ。其後以テ大學寮南曹トナス。本朝文粹載スル所、在原行平ノ請狀ニ、昔閑院贈太政大臣志深憂道、慮切求賢、開學舍於別館、貽善誘於一門、故藤氏之生、猶多才子、雞蹠已飽、麟角不稀、學之爲用、不其然乎、トアル。即チ是レナリ。藤氏已ニ第一ノ盛門ナルノミナラス、閑院大臣ノ殊ニ其子弟教養ノ爲メニ創設セシ學院ナルヲ以テ、

其勢大學寮ト韻頡セリ。其人物ヲ養成シタル亦少カラス。時々火災ニ罹ル、ト雖モ屢再興アリ。治承元年大火ノ時、燒亡セシカ。此時藤原兼實大ニ之ヲ憂ヒ、玉海ニ記シテ曰ク、氏院燒亡之後、事何様可行哉、無先例之間、失計略了、能思慮可示道、如此之事、氏公卿可僉議也。又造營事、可被立廟堂之内、子細早可被尋問。件廟堂建立已後未聞云々彼院生徒殆可及逃脫歟、可有安堵之渡歟。件院閑院贈大相國冬嗣、弘仁十二年建立。其後未有火災、及三百四十餘年歟。總天下之滅亡、別我氏之衰微、悲淚數行、哀哉トアリ。此記事ニヨレハ、此時猶藤氏ノ子弟ハ、其院ニ學習シタルヲ知ルヘシ。兼實深ク力ヲ再造ニ用井、此歲造營アリテ、六月廿二日上棟アリ。目録抄其後時々修造行ハレシカ、亂離ニ及ヒ終ニ荒廢セリ。

獎學院

獎學院ハ、教業第一坊三條坊門ノ北、壬生ノ西ニ在リ。方四十丈、是ハ元慶五年中納言在原行平カ請奏シテ私宅ヲ學舍トシ、獎學院ト號シ、田園ヲ寄附シ、以テ其資料ニ充ツ。事ハ本朝文粹載スル所ノ奏狀ニ詳ナルヲ以テ、之ヲ此ニ掲ク。

爲在納言建立獎學院狀

高五常

右行平幸逢泰運猥列崇班愚心所企欲罷不能昔閑院附太政大臣志深憂道慮切求賢開學舍於別館貽善誘於一門故藤氏之生猶多才子雞蹠已飽麟角不稀學之爲用不其然乎但見賢思齊已有先式欽慕人跡爲日久矣繇是置一茅宅開以學亭宗室苗緒志道齡德者當得休舍號曰獎學院坊接大學寮取求道之便也門對勸學院表擇隣之意也又聊設田園之業以資簞瓢之費其郡縣頃畝具於別紙又位封戶田同以分入豈謂久遠之輪願有涓埃之益凡厥一院行事唯欲准勸學院之例而已夫懸米雖微造舟猶潤不有衆川之添何成一流之大若當時後代有裨補此院扶持此業者區々之志千載不朽矣

此狀ニヨレハ行平カ藤氏勸學院ニ效ヒ學舍ヲ建營シ奏請シテ以テ王室子弟及ヒ一門ノ學習所ト爲シタル者ニテ文中見賢思齊已有先式欽慕人跡爲日久矣繇是置一茅宅開以學亭坊接大學寮取求道之便也門對勸學院表擇隣之意也又聊設田園之業以資簞瓢之費又位封戶田同以分入トアルヲ見テモ其深ク心ヲ用ヰンヲ見ルヘシ在原氏ノ子弟學習ノ所トナリシカ其後在原氏ノ衰フルニ及ヒ昌泰三年大學

寮ノ南曹トナシ應和三年十二月勸學院ニ準シ年官ヲ給セラレ日本紀事其後荒廢シテ空名ノミ存セリ事ハ職官志ニ在リ

弘文院

式部少輔大學別當和氣廣世ハ清麻呂ノ子ナリ父ノ志ヲ繼キ最モ心ヲ教學ニ盡ス其大學別當タルヤ請テ私田二十町ヲ納レ以テ書生ノ勸學科ニ充テ又明經ノ四科ヲ定メ諸儒ヲ會シ大學ニテ講論セシムル等文學ノ事ニ於テ功績多シ其宅ハ大學ノ南ニ在リ因テ其宅ニ於テ學院ヲ開キ弘文院ト稱シ墾田四十町ヲ附シ永ク學資ニ充テ内外書籍數千卷ヲ藏シ以テ子弟ノ學習スル所トセリ是レ私學ノ嚆矢ナリ和氣氏清麻呂精忠大節ヲ以テ國難ヲ靖セシヨリ其子弟モ賢者多ク皆文行ニ篤シ其家庭ノ訓自ラ見ルヘシ然レトモ此院ハ久シカラスシテ衰微セント見エテ和名抄ニハ弘文院和氣書生別曹今爲荒廢之地在勸學院北トアリ蓋シ藤原氏ノ昌大ナルヨリ諸家衰微シテ各建ツル所ノ私學ハ或ハ荒廢シ或ハ藤氏ノ有スル所トナリ諸氏ハ其家學ヲ修ムル私校サヘ荒廢シテ學修ノ地ナク益暗愚ニ赴キン情狀ヲ見ルヘキナリ

學館院

學館院ハ、嘉祥三年太皇太后嵯峨帝皇后藤原實子其弟右大臣橋氏公ト議シ、其家門子弟學習ノ爲メニ創設セラル、所ナリ、之ヲ號シテ學館院ト曰フ、實錄其後康保元年十一月三日、參議橋好古ノ奏狀ニ準シ、勅シテ大學別曹ト爲ス、勸學院ニ準スルナリ、蓋シ初メハ私學ヲ以テ之ヲ建ツルト雖トモ、其幹理維持等ノ事ヨリ、之ヲ官ノ大學ニ附屬スルコトトナリシナルヘシ、其後橋氏衰ヘ、藤原氏代リテ之ヲ掌レリ、蓋シ藤原道隆ノ母ハ、中納言橋澄清ノ女ナルヲ以テナリ、然レトモ、空名ノミニテ、學校ハ久シク荒廢セシカ、久安中藤原賴長之ヲ再興セシコト、台記ニ見エタリ、曰ク、久安三年五月十八日、時信密奏法皇、一可造學館院事、其旨見彼書、件書勅載、式格國史等文、七月七日遣侍某々於學館院、密々令見地形、還來曰、皆以耕田、但築垣纒殘、八月召兼仲基仲等、令見可造學館院之指圖トアリテ、其註ニ、件院顛倒之後、數歲、無知舍屋敷并間數向方等之人、摸勸學院、但省略於彼トアルヲ以テ、當時勸學院ハ猶存在シ、本院ハ早ク荒廢セルト、賴長ノ深ク學問ヲ好ミ、之ヲ再造セントスルモ、僅ニ其幾分ヲ摸セシヲ見

ルヘシ、此時成功セシヤ否ヤ、今詳ナラス、

淳和院

淳和院ハ、淳和帝ノ後院ナリ、故ニ天長上皇宮ト云フ、一ニ西院ト稱ス、四條ノ北、西大宮ノ東ニ在リ、續日本後紀ニ、天長十年二月廿八日乙酉、天皇淳和遷御淳和院、讓位於皇太子仁明、又天長十年八月戊申、先太上天皇嵯峨遊讌親王以下咸萃於彼、命文人令賦詩、幽居山水之題、兩太上天皇有御製、以大藏省綿一萬屯、賜群臣ト云フ、帝ノ崩後、太后橋氏猶ホ此宮ニ在リ、落髮尼トナリ、此院ヲ以テ道場トナス、三代實錄ニ、貞觀十六年四月、太后所居淳和院、宮殿經籍一時燒蕩云々、以淳和院爲道場、不改院號、安置平生侍左右之尼、厚充供料、永令居住、師資相承、修道不斷ノ文アリ、後撰集ニ、素性法師カ、西院の後おほんくしおろさせたまひて、おこなはせたまひけるとき、彼院の中島の松をけつりて、かきつけ侍けるト云フ歌ニ、音にきく松か浦しまげふそみる、むへも心ある、あまは住けり、此院園池ノ光景ハ、源順カ、晚秋淳和院同賦、波動、水中山詩序ニ於テ、其一斑ヲ知ルニ足ル、文ハ本朝文萃ニ載スルヲ以テ、茲ニ贅セス、後ニ源氏公卿ノ學室トナル、故ニ

源氏ノ長者タル人當院ノ別當ニ補ス後小松帝ノ承德三年ノ春將
 軍足利義政カ淳和獎學兩院ノ別當ヲ兼帶セシヲ始メトシ爾後此
 官號永ク源氏ノ大臣ニ至ル者ノ襲任スル例トナリ德川氏歷世ノ
 將軍モ亦タ此任ヲ兼帶セシナリ此院ハ後院離宮ノ部ニ入ルヘキ
 ナレト學院ノ稱永ク後世ニ傳ハルヲ以テ姑ク之ヲ勸學院ノ後ニ
 列セリ

綜藝種智院

天長五年僧空海ノ創設スル所ニシテ九條坊門ノ南油小路ノ西ニ
 在リ中古荒廢シテ今田圃トナレリ此院ハ我國宗教學校ノ嚆矢ニ
 シテ其規模頗ル宏遠ナリ性靈集ニ空海ノ記文アリ其要ニ曰ク藤
 大卿有左九條宅餘貳町屋則五間藤大卿ハ右大臣藤原三守ナリ東隣施藥慈院即
 施藥院西近眞言仁祠即千教王院生休歸眞之原迫南衣食出内之坊居北
 ト以テ其所在ヲ知ルヘシ涌泉水鏡而表裏流水汎溢而左右松竹風來
 琴箏梅柳雨催錦繡春鳥啼聲鴻雁于飛熱渴臨也即除清涼憩也即至
 ト以テ其勝致ヲ想フヘシ貧道有意濟物竊庶幾置三教院一言吐響
 千金即應永捨券契遠期胃地又昆訶方袍偏甞佛經槐序茂廉空就外

書至若三教之策五明之簡壅泥不通肆建綜藝種智院普藏三教招諸
 能者中界今是華城但有一大學無有閭塾是故貧賤子弟無所問津遠
 方好事往還多疲今建此一院普濟瞳矇不亦善哉ト以テ其建院ノ旨
 趣ト其成立及希望トヲ見ルヘシ即十佛經ノ學校ニシテ三教ヲ兼
 習シ又普通ノ子弟ノ教養ヲ受クル所タリ其用意周到ト謂フヘシ
 其學科ヲ分ケテ三トス一ニ曰ク道人傳受事以テ佛經ヲ教ヘ二ニ
 曰ク俗博士教授事以テ九經九流三立三史七略七代若文若筆等書
 中若音若訓或句讀或通議一部一帙堪發瞳矇者住トアリテ百科ノ
 學士ヲ置キ以テ其事ヲ教ヘシム三ニ曰ク師資糧食事曰ク夫人非
 懸瓠孔丘格言依依食住釋尊所談然則欲弘其道必須飯其人若道若
 俗或師或資有心學道者並皆須給雖然道人素事清貧未辨資費且入
 若干物若有意益國利人志求出迷證覺者同捨清塵相濟此願云々ト
 アリ躬カラ率先學資ヲ納レ以テ有志ヲ募緣セシヲ見ルヘシ弘法
 大師眞ニ其名ニ負カスト謂フヘシ其記ハ天長十年十二月十五日
 ノ作ニシテ空海六十歳ノ時ナリ其後ノ沿革今詳ナラス

六衛府

左衛門府

左京桃花坊近衛ノ北、鷹司ノ南、大宮ノ東、猪隈ノ西ニ在リ、方一町、南ニ向フ、諸門禁衛出入禮儀等ヲ掌リ、時ヲ以テ巡檢ス、隼人司ヲ管ス、正廳射場等アリ、

右衛門府

左京桃花坊土御門ノ南、西洞院ノ東、近衛ノ北、室町ノ西ニ在リ、方二町ヲ占ム、衛門ノ兵士ノ居ル所ナリ、

右衛門府

右京桃花坊近衛ノ南、大宮ノ西ニ在リ、方一町、其他左衛門府ニ同シ、右衛門府

右京中御門ノ南、堀川ノ東ニ在リ、

京職

左京職

左京教業第一坊、大學寮ノ南、朱雀ノ東、姊小路ノ北ニ在リ、方四十丈

ナリ、タリ、其曹司ノ制、今詳ナラス、其職員職制ハ、歷世京都制度ノ部ニ詳ナリ、

右京職

右京豐財第一坊、穀倉院ノ南、朱雀ノ西、姊小路ノ北ニ在リ、方四十丈、左京職ト相對ス、其他左京職ニ同シ、

東西市

東西市ハ、舊京ニ於テ已ニ之ヲ設ケラレ、一旦奈良ヨリ長岡京ニ遷リシカ、延暦十三年七月朔之ヲ長岡京ヨリ此京ニ遷シ、更ニ邸舍ヲ作り、市人ヲモ併セ遷サレタリ、日本紀其地ハ、東西京ニ在テ、東市ハ、櫛笥、油小路、佐女牛、鹽小路ノ間ニ於テ、十二町ヲ占シ、其内一町ヲ市司トシ、一町ヲ市屋トシ、二町ヲ内町トシ、八町ヲ外町トス、

東司市

北小路、七條、堀川、猪隈ノ間ニ在リ、即チ東市司ノ官衙ナリ、其職員職制ハ、京都歷世制度ノ部ニ詳ナリ、東市ハ、毎月十五日以前ヲ以テ之ヲ開ク、其鬻ク所ハ左ノ如シ、

東繩羅、絲、錦、幪頭、巾子、縫衣、帶、紵、布、苧、木綿、櫛、針、杓、扉、筆、墨、丹、珠、玉、藥、太刀、弓箭、兵具、香、鞍、橋、鞍、褥、繭、鏡、障、泥、鞞、鉄、并、金器、漆、油、染、草、米、木器、鹽、醬、索、餅、心、太、海、藻、菓、子、蒜、干、魚、馬、生、魚、海、菜、麥、

右五十一團東司

其市ニ關スル規制ハ、令式ヲ以テ之ヲ定ム、頗ル周密明細ナリ、今其大要ヲ左ニ掲ク、其詳ナルコトハ、其書ニ就テ之ヲ見ルヘシ、

凡市恒集於午、而散於日入、在市興販、男女別坐、每肆立標、題其行名、行名トハ、一町ニ八行アリ、一行ニ八月アリ、即チ某町某行ト題スルナリ、目今ノ月番號ト、其管轄ヲ攝クルカ知シ、

市吏准物之時價爲三等、十日造一簿、在市案記、每季各告于本司、

凡官與私交關、以物爲價、必准中估云々、無官私交付、其價不得懸違、其所交易、行濫之物、則沒官、短狹不如法、則還主、橫刀、鞍、漆器之屬、各令題鑿造者之名、關市

凡市皆每團立勝、題號名、依其團、隨色交關、不得彼此就便違越、

凡賣買不和、較固者、市司追捉勘當、

凡六衛舍人等、不得帶劍入市、

凡市人籍帳、每年增進、

凡市裏有凌奪之輩者、奏任已上、准狀散禁、請裁判任已下、粗禁、隨犯決罰、

凡決罰罪人者、官人與使相對、按前罰之、

凡居住市町之輩、除市籍人、令進地子、即以充市司、廻四面、泥塗道橋、及

當堀川等造料、其用帳、年終申送、延喜式〇市籍人トヘ、市ノ本籍人ニテ、居住市町人トナリ、之ニ因テ考フル時ヘ、本籍人ヘ、地子免除ノ制ニテ、寄留人ヘ、地子ヲ出セルヲ見ルヘシ、

其地子ヘ、市司ノ雜費ニ充ツルナリ、當堀川トヘ、其市ニ關スル堀川ニテ、堀川全部ヘ、國費ト全市ノ費用ニ係ルヲ以テ、市ニ關スル所ノミ、此地子費タルナリ、此決算ハ、其年末ニ勘定セシナリ、

其他之ヲ畧ス

其決罰罪人ノ事ハ、市ノ南門ニ行フ、其死囚ハ、彈正、刑部、衛門、獄司、囚人ヲ引テ、其地ニ至リ、罪狀ヲ宣告シ、命シテ刑ヲ行フ、刑ニハ、斬絞アリ、市司ヲシテ、市人ヲ喚集セシメ、司ノ南門ニ列立シテ、之ヲ見セシム、延喜式

著欽ノ政モ、亦此ニ行ハル、職司囚人ヲ引テ、市ニ至リ、其式ニ依テ之ヲ行フ、事ハ、延喜式及ヒ年中行事繪卷ニ詳ナリ、百鍊抄治承二年ノ

記ニ、四月十六日、著欽政、良家子弟多依、強盜犯、著欽、希代事也トアリ、

此時マテ、猶行ハレシヲ見ルヘシ、其良家子弟多依、強盜犯、著欽トアリ、

ルヲ見テ、以テ當時ノ狀ヲ知ルヘキナリ、
西市司

右京左女牛、七條西櫛笥野寺ノ間ニ在リ、其位置方向、東市ト同シ、
西市ハ、毎月十六日以下之ヲ開ク、其他東市ニ准ス、其市酈ニ器ク所
左ノ如シ、

絹、綿綾、絲、綿紗、椽帛、幘頭、縫衣、裙帶、幡、紵、調布、麻、纈、麻、柳針、扉、雜染、蓑笠、
染草、土器、油、米、鹽、米醬、索餅、糖、心太、海藻、菓子、干魚、生魚、牛、

右三十三酈西市

東鴻臚館

西鴻臚館

朱雀大路七條坊門ニアリ、南北二町、東西一町、朱雀大路ヲ挾ミ、東西相
對ス、河海抄、古本、拾芥抄、頭書ノ説ニヨルニ、延曆遷都ノ初メ、地ヲ九條
大宮ニ定メ、以テ東西ノ館ヲ築クヘキ所ト定メシニヤ、館舍未タ成ル
ニ及ハス、弘仁年間ニ至リ、東館ノ地ヲ空海ニ西館ノ地ヲ守敏ニ賜ヒ、
以テ東寺西寺ヲ創立セシメ、更ニ朱雀七條坊門ニ於テ館舍ヲ營シ、以
テ蕃客ノ館スル所ト爲シ、之ヲ鴻臚館ト號ケシナリ、延喜以前ハ、唐朝

三韓、渤海等ノ入朝絶エス、其使人ハ迎ヘテ此ニ館シ、儀式ヲ備ヘテ、朱
雀大路ヨリ朱雀門ニ入リ、應天會昌二門ヲ經テ、大極殿ノ南庭ニ奉謁
シ、以テ國書奉呈ノ禮ヲ行フ、時ノ文人ニ勅シテ之ニ接伴セシメラル、
故ニ此館ニテ贈酬セシ文詞、世々著ル、者多シ、大槐秘抄ニ、七條の朱
雀の東西に鴻臚館と申すところは、異國の人の参れる時に、ある所に
てありける、くにくににしたかひて、へつへつの屋に候、中今は人の
館とまかりなりて候あり、いつよりまかりなりたるにや候らむ、今ま
てもへうの山は、其所よりそひき候なるトアリ、標の山は、大嘗會の時、
國會の山は、此
に起れり云。

修理職

左京桃花坊近衛南、大宮東北ニ在リ、方四十丈、

檢非違使廳

左京桃花坊近衛ノ北、堀川ノ西ニ在リ、方一町タリ、使廳ハ、風憲ノ使廳
ニ歸セシヨリ、其關係尤多シ、事ハ第二編ニ在リ、

木工寮

木工寮ハ、古太久美乃都加佐ト稱ス、二條ノ南、押小路ノ北、神泉苑ノ東、

猪隈ノ西ニアリ、方一町ヲ占メ、其南ノ一町ト東ノ一町ヲ木工町トス、
抄芥蓋シ本寮ハ、土木造管ノ事ヲ掌ルヲ以テ、大内裏中ニ置キ難ク、特
ニ官城外ニ其寮ヲ設ケ、傍地ニ職工ノ町ヲ置キシナルヘシ、
穀倉院

朱雀大路ノ西二條ノ南ニ在リ、南北二町東西一町、平城帝大同年中之
ヲ置キ、以テ畿内諸國調錢、諸國無主位職田及沒官田、太宰府稻等ノ物
ヲ納ムル所ナリ、内ニ廳堂、倉庫、勅旨所、正倉、雜舍ナトアリ、延喜式、四宮
抄、日本紀等
左經又八幡宮ヲ其中ニ勸請ス、建仁年間マテ存在セシ如クナレト、山
長記、三其後荒廢シテ、貞治年間ニ至テハ、茶園トナレリ、外記、師
守記
義倉

亦此中ニ設ク、其義倉米ハ五位以上ト一般人民中等以上ニ命シ、其
等差ヲ立テ穀ヲ收メシメ、以テ賑救ニ充ツ、其制一位五斛、二位四斛、
三位三斛、四位二斛、内五位一斛、外五位五斗、上上戸二斛、上中戸一斛、
六斗、上下戸一斛、中上戸一斛、中中戸八斗、其出納各々規制アリ、
延喜
式又賑救ノ時ニハ、其穀ヲ錢ニ替ヘ、支辨スル事アリ、江家
次第
常平倉

亦此中ニ設ク、豐歉ノ穀價ヲ平均ニシ、以テ賑救スル所ナリ、西宮記
ニ曰ク、天曆十一、召近國不動運穀倉院云々、延喜九、正廿一、寬平錢升
別三活之、西近
江記二日一日、四箇常平所活穀、同十三日穀倉院常平所、男
童一人、女二人、嫗四人、被踏死也、行軍道通
狀、暫止活トアル是ナリ、其後皆廢ス、

囚獄司

左獄

左京桃花坊近衛ノ南、西洞院ノ西ニアリ、方一町之ヲ左獄ト爲ス、江
談抄ニヨルニ、大江音人檢非違使別當タル時、長岡ヨリ移シタル者
ナリ、遷都以後囚獄ハ久シク長岡ニ在テ、罪人遁走多キヲ以テ、奏請
シテ、此地ニ移セシヨリ、遁刑人ナキヲ得タリト、續日本後紀ニ、嘉祥
二年閏十二月巳未、乘輿巡省京城、以錢米賑給窮者、比至囚獄司前、天
皇問曰、是爲誰家、右大臣藤原良房奏言、囚獄司、於是降恩詔、皆免獄中
罪人、群臣欣悅、俱呼萬歲、ト見エタリ、保元平治ノ亂、源爲義、義朝、藤原
信賴、入道信西、壽永ノ役、平宗盛等、延元ノ役、新田義貞等ノ首ヲ獄門
ニ架ケシハ、此所ナリ、

右獄

右京銅駝坊、中御門北、堀川西ニ在リ、方四十丈、阿倍貞任、源義親等ノ首ヲ、櫻木ニ梟セシ所ナリ、

左衛門府町

左京桃花坊、土御門南、西洞院東、近衛北、室町西方二町、

左兵衛府町

左京桃花坊、近衛北、堀川東方二町、

内藏町

左京桃花坊、近衛南、堀川西ニ在リ、内藏寮ニ屬ス、

大舍人町

左京桃花坊、鷹司北、靱負東ニ在リ、大舍人寮ニ屬ス、

縫殿町

左京桃花坊、正親町北、西洞院西ニ在リ、縫殿寮ニ屬ス、

内教坊町

左京北邊坊、土御門北、堀川西ニ在リ、内教坊ニ屬ス、

神祇官町

左京桃花坊、大炊御門北、大宮東ニ在リ、東西二町、

隼人司

右京桃花坊、堀川東、土御門南ニ在リ、

内膳町

左京北邊坊、土御門北、室町東ニ在リ、

外記町

左京桃花坊、中御門北、大宮東、勘解由小路南ニアリ、

修理職町

左京桃花坊、近衛南、中御門北、西洞院東、室町西ニ在リ、方二町、

東宮町

左京桃花坊、中御門南、堀川西ニアリ、

織部町

左京北邊坊、土御門北、大宮東ニ在リ、

織部町

左京鷹司北、猪隈西ニ在リ、方四十丈、又織手町アリ、

左近衛府町

左京桃花坊、土御門南、近衛北、西洞院西、堀川東ニ在リ、方二町、

帶刀町

左京北邊坊、一條南堀川東ニ在リ、

左近衛馬場

左京北邊坊、一條大宮ニアリ、初メ東西行ナリシカ、寛和中南北行ニ改ム、
抄、百錄、五月五日、武德殿騎射ノ前荒手結ヲ行フ所ナリ、

兵庫寮町

右京桃花坊、土御門南大宮西ニ在リ、方一町、

兵庫倉町

兵庫寮ノ兵器ヲ藏スル所ナリ、廿一間倉又廿間倉等アリ、蓋シ兵庫倉町カ、

右衛門府町

右京桃花坊、中御門南堀川東方二町、

右兵衛府町

右京銅駝坊、中御門ノ南大宮ノ西方一町、

右馬寮町

右京桃花坊、大宮西木蘭北方一町、

右馬寮町

右京銅駝坊、大炊御門南大宮東東西一町、南北二町、

右近衛府町

右京桃花坊、堀川西土御門南ニアリ、方二町、

舍人町

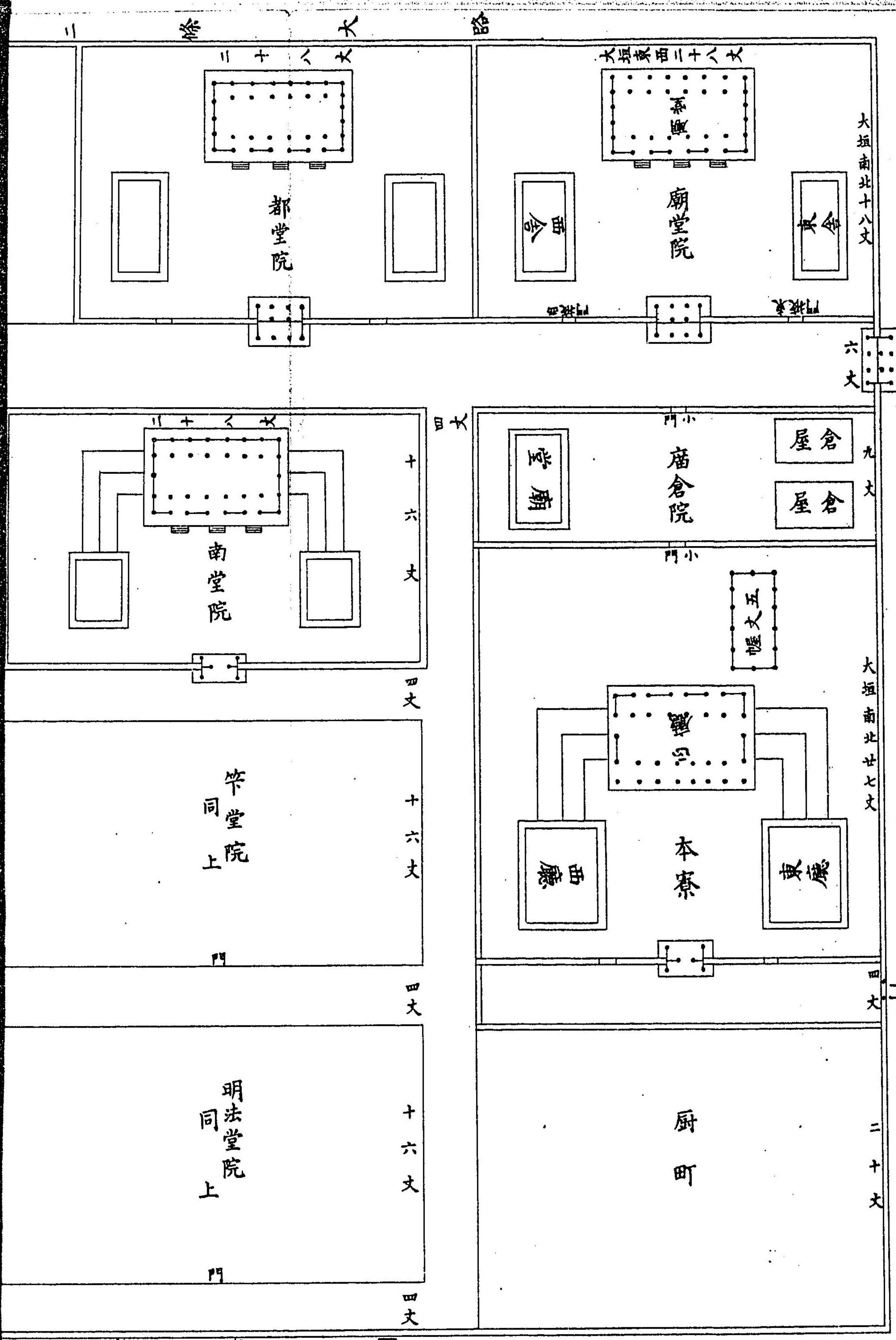
右京大炊御門北堀川東ニ在リ、

右近衛府馬場

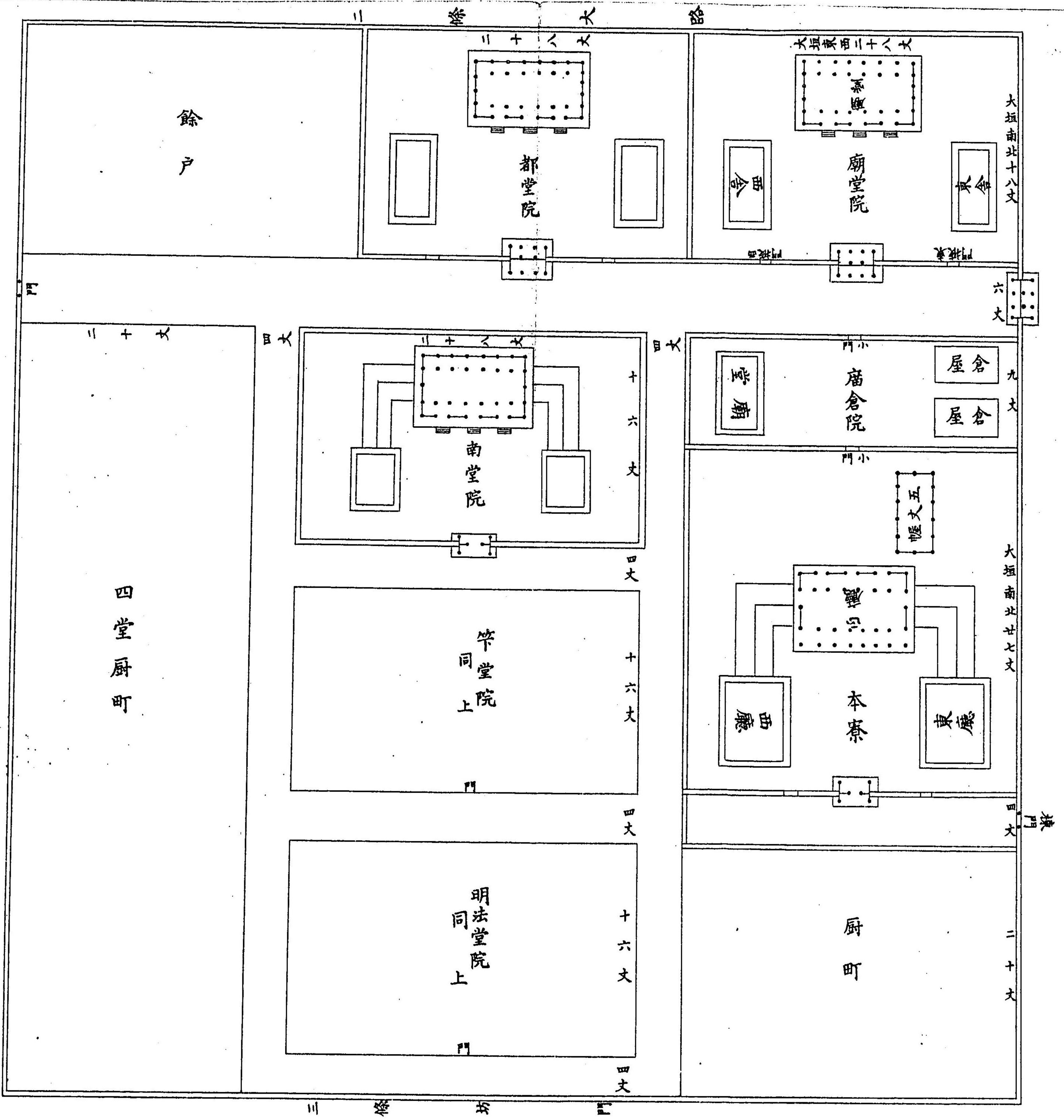
右京一條大宮ニ在リ、類聚國史ニ、大同二年五月辛卯、先是帝城北野開新馬場口、備騎射トアリ、五月五日、武德殿騎射ノ前荒手結ヲ行フ所ナリ、

平安通志卷之二

大學寮圖 方八十四丈

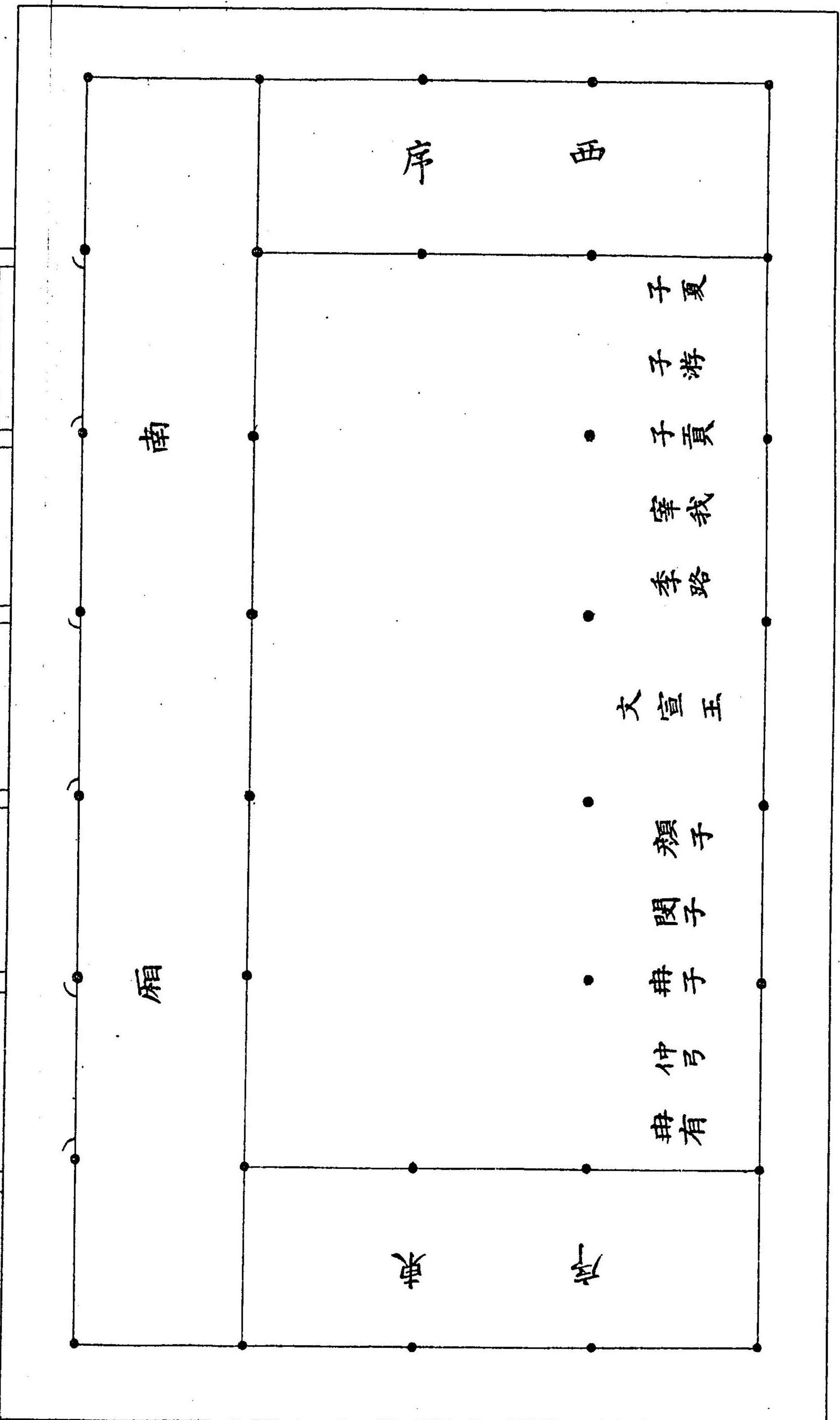


大學寮圖 方八十四丈

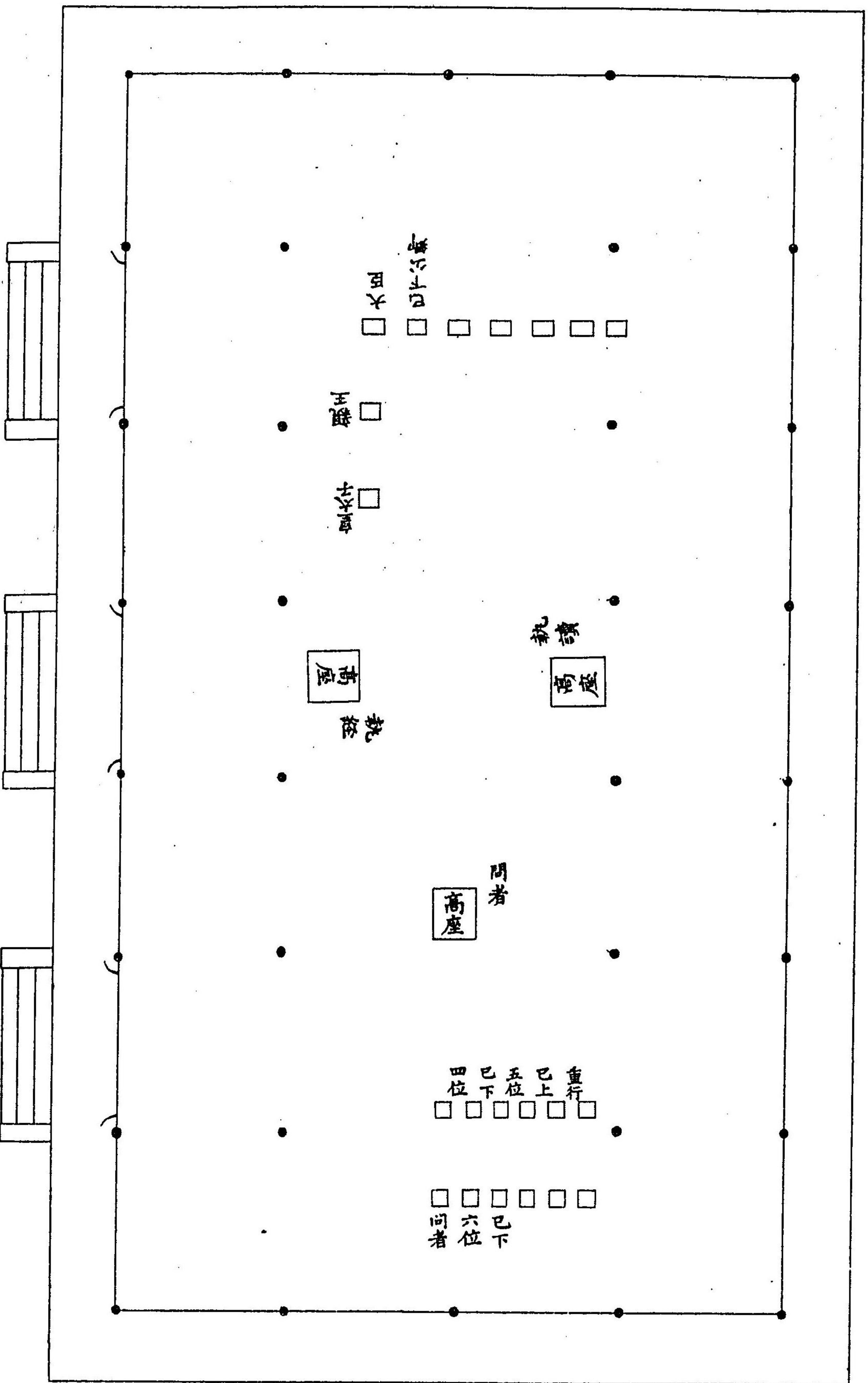


朱雀大路

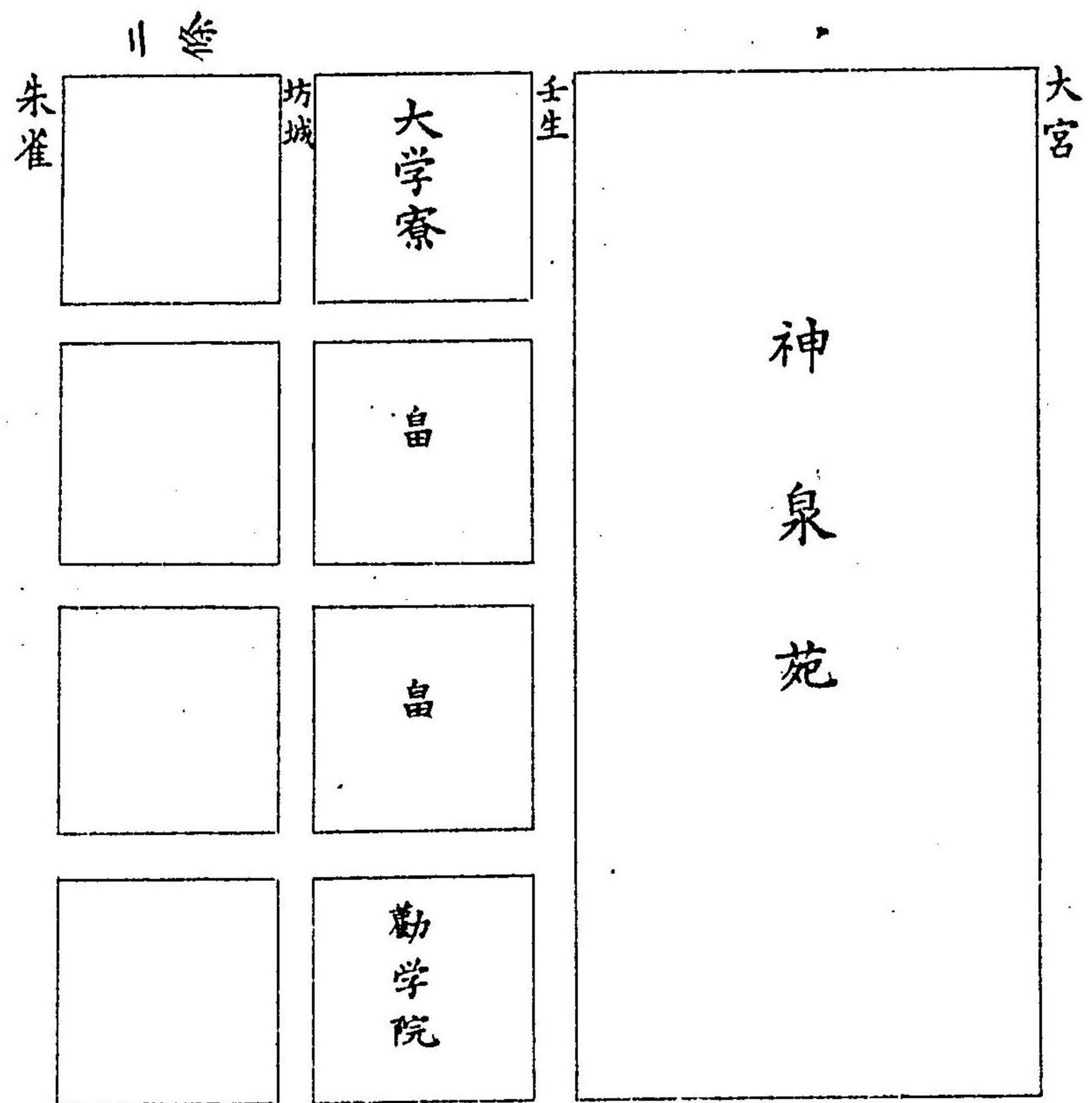
廟堂院孔子十哲座位圖



廊堂院講座圖

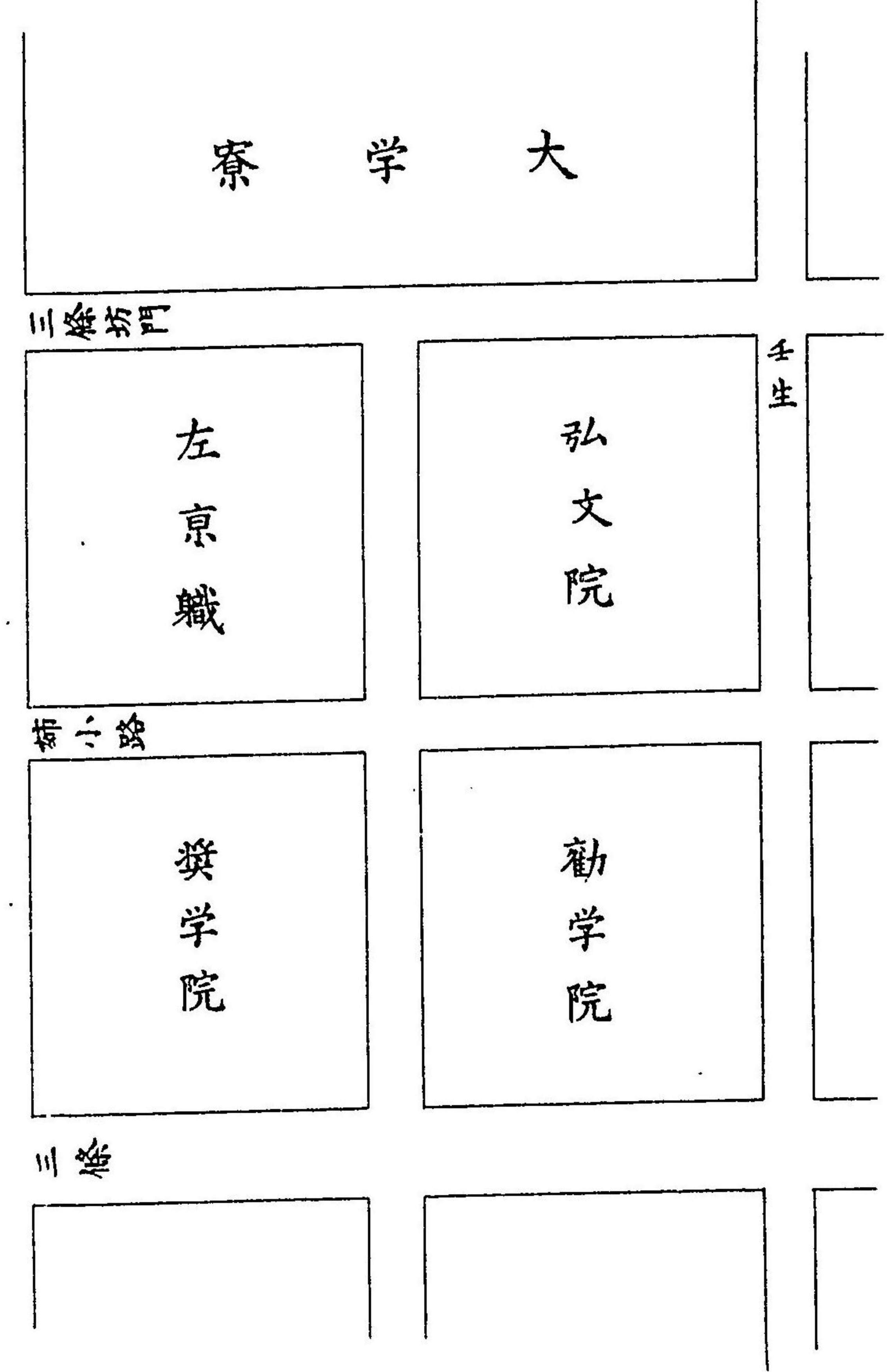


清辨眼抄所載圖之内大學寮之圖神泉苑圖

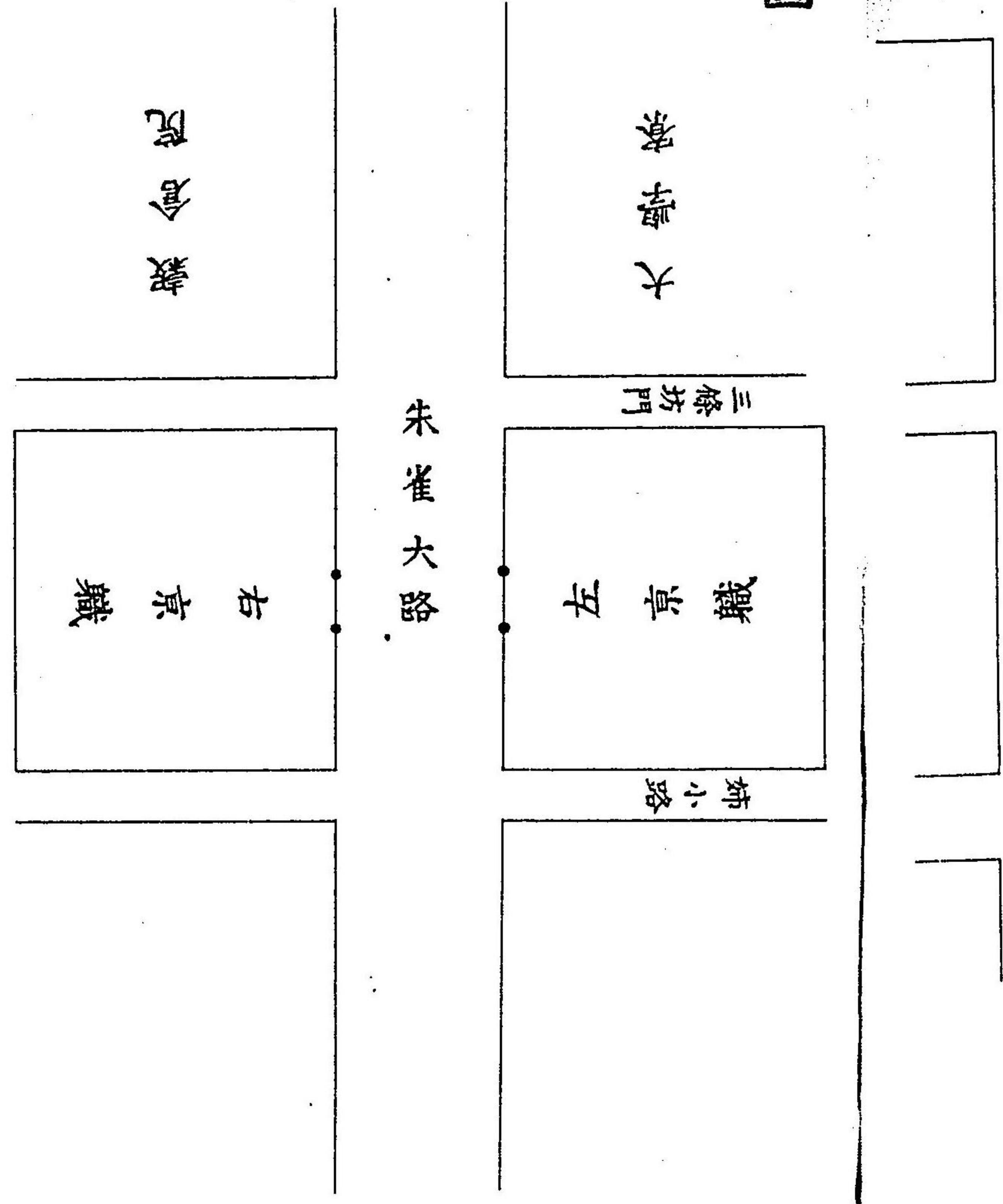


是レ安元中大学寮
及私学ノ圖ナリ大
学寮方二町ナリシガ
今ハ僅ニ一町ヲ存シ
其他ハ空地畠地トナ
リ私学ハ勸学院ノ
ミアリテ其他皆廢セ
リ

私學所在圖

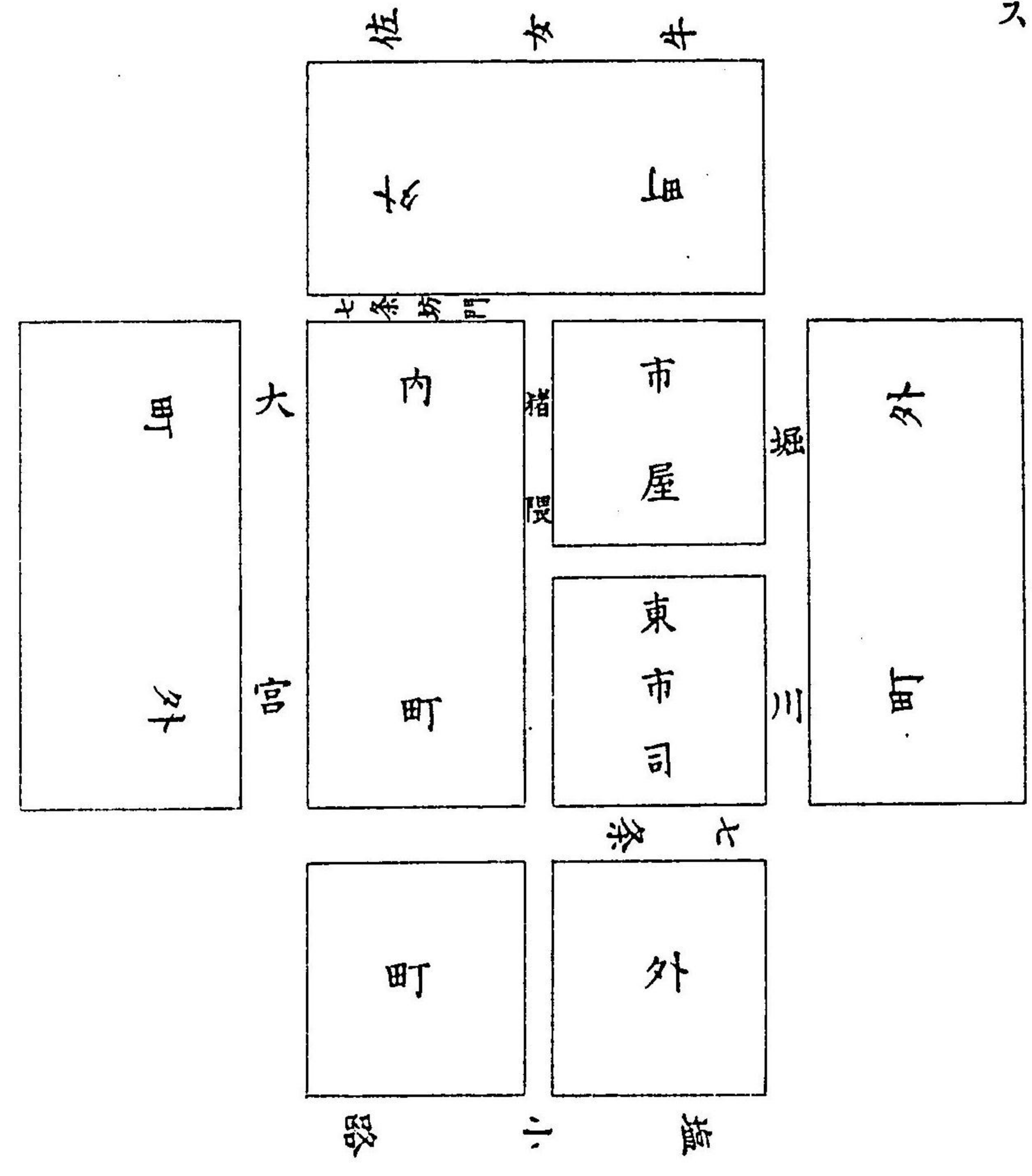


京職圖



東市町圖

西市之ニ準ス



鎌倉、河原邊

大 塚 寮

子土	大塚寮	大塚寮
	藤原氏	藤原氏

二 十 六	一 五 一	卷 表 誤
六、七、八、 十一、十二行	一尺弱 還サレシ	セラレシ
郷 削除	九寸八分七厘	セラレシ
七 十五	十二 十四	枚 表 誤
藤原 二月	十三年 五月十八日	なりと 日本後記
藤原氏 二月	十二年 正月十八日	なりと 日本後記下之
十一 十六	十二 廿二	枚 表 誤
依依 右馬	五月廿一日 五月廿三日 中御門小	謀ルハ
依依 左馬	二月廿一日 六月廿三日 中御門大	謀ニアリ

平安通志

二

110
20
60

館書圖京東				
二	六	〇	〇	〇
冊	號	架	函	類

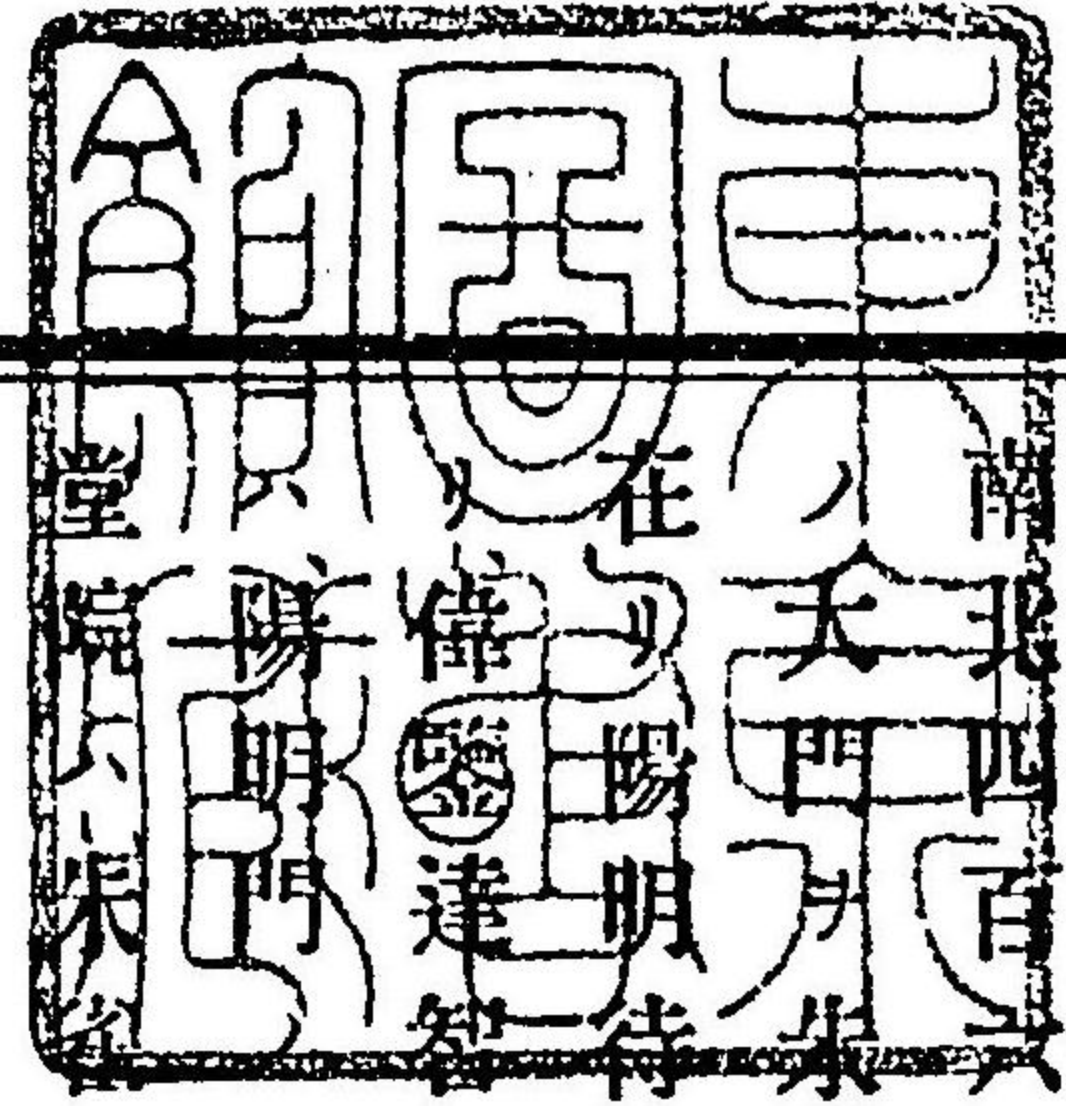
平安通志卷之三

湯本文彦等編

第一編

大内裏

大内裏北ハ一條ヨリ起リ南ハ二條ニ至リ東ハ東大宮ヨリ西ハ西大宮ニ至ル
南長四百六十丈東西三百八十四丈繞スニ瓦垣ヲ以テシ御溝其外ニ流ル南面
大内門ヲ朱雀門ト號シ是ヲ皇城ノ正門トス美福門其東ニ在リ皇嘉門其西ニ
在リ陽明門待賢郁芳ノ三門ハ其東面ニ在リ殷富藻壁談天ノ三門ハ其西面ニ在
リ偉鑿達智安嘉ノ三門ハ其北面ニ在リ之ヲ皇城ノ十二門ト號ス外ニ上東門
陽明門北ニ在リ上西門ハ殷富門ノ北ニ在リ之ヲ大内裏ノ外郭トナス朝
堂門ノ内五十丈ニ起リ北ニ延クコト一百三十六丈朱雀大路ヲ中央
ニシテ東西五十六丈大極殿ノ在ル所ニシテ大内裏ノ正朝國儀大禮ノ行ハル
所ナリ皇宮ハ其良位ニ在リ南ニ建禮門アリ之ヲ正門トス東ニ建春門西ニ
宜秋門北ニ朔平門アリ之ヲ皇居ノ宮門トシ其内中隔門アリ承明門ハ其南ニ
在リ紫宸殿ノ前ニ當ル宣明門ハ其東陽明門ハ其西玄暉門ハ其北ニ在リ其内
ヲ皇宮トス紫宸仁壽承香常寧貞觀春興宜陽綾綺温明麗景宣耀安福校書清涼



後涼、弘徽、登華ノ十七殿、昭陽、濟景、凝華、飛香、襲芳ノ諸舍、皆其内ニ在リ、中和院ハ、皇宮ノ西南ニ在リ、別ニ一區ヲ爲シ、神嘉殿其内ニ在リ、其北ニ采女町、内膳司、絲所アリ、朔平門内ノ左右ニ蘭林、桂芳、華芳ノ三坊アリ、豐樂院ハ、朝堂院ノ西ニ在リ、廣サ殆ト朝堂院ニ同シ、其南ニ兵部省、彈正臺アリ、彈正臺ノ西ニ刑部省アリ、判事曹其内ニ在リ、治部省ハ、刑部省ノ北ニ在リ、其内ニ諸陵寮、立蕃寮アリ、治部省ノ西ニ右馬寮アリ、左馬寮ト談天門内ニ相對セリ、左馬寮ノ北ニ内匠寮アリ、其東ニ造酒司アリ、其南ニ典藥寮アリ、右兵衛府ハ、内匠寮ノ北ニ在リ、右近衛府ト殷富門内ニ相對セリ、武德殿ハ、殷富門内ニ在リ、東面シ、宴松原ヲ隔テ、皇居宜秋門ト相向ヘリ、太政官ハ、朝堂院ノ宣政門ノ前ニ在リ、其門南ニ開ク、其内辨官曹司、造曹司、勘解由使、文殿アリ、官ノ南ニ民部省アリ、主稅主計二寮其内ニ在リ、式部省ハ、主稅寮ノ南、朱雀門ノ内ノ東ニ在リ、兵部省ト相對ス、宮内省ハ、官ノ東ニ在リ、廩院其南ニ在リ、大舍人寮ハ、民部省ノ東ニ在リ、神祇官ハ、廩院ノ東ニ在リ、大炊寮ト郁芳門ヲ挾ミテ相向フ、神祇官ノ内ニ八神殿アリ、大炊寮ノ内ニ御供院アリ、雅樂寮ハ、神祇官ノ南ニ在リ、大内裏ノ東南隅ニ當ル、中務省ハ、建禮門ノ前ニ在リ、内舍人局侍從局其内ニ在リ、陰陽寮其東ニ在リ、中務省ノ監物主鈴主鑑ノ曹其北ニ在リ、中院主水司警院ハ、其東ニ在リ、大膳職ハ、待賢門ノ内ニ

在リ、東雅院ト相向フ、西雅院ハ、其西ニ在リ、之ヲ東宮坊ト爲ス、内暨所一本御書所、外記廳、釜殿、酒殿ハ、西雅院ノ北ニ在リ、左近衛府ハ、陽明門ノ内ニ在リ、左兵衛府ト相對ス、職曹司ハ、外記廳ノ北ニ在リ、梨本院ハ、之ト相對ス、朔平門ノ北ニ縫殿寮アリ、南院其内ニ在リ、其西ニ内藏寮アリ、又其西ニ掃部寮アリ、大歌所之ト鄰ス、圖書寮ハ、大歌所ノ西ニ在リ、武德殿ヲ隔テ、造酒司ト相對ス、大藏省ハ、圖書寮ノ北ニ在リ、其ヨリ東、縫殿寮ノ北ニ至リ、一條ノ外垣ニ接シ、皆大藏ノ在ル所ニシテ、率分藏長殿皆其内ニ在リ、兵庫寮ハ、大藏省ノ北ニ在リ、采女司、正親司ハ、其西ニ在リ、正親司ノ北ハ、漆室ニシテ、大内裏ノ西北隅ニ當レリ、梨本院ノ北ニ大宿直所アリ、主殿寮其北ニ在リ、内教坊其東ニ在リ、茶園ハ、内教坊ノ北ニ在リ、大内裏ノ東北隅ニ當レリ、眞言院ハ、中和院ノ西ニ在リ、宴松原ニ近シ、是レ大内裏ノ全形ナリ、夫レ大内裏ノ地タル、凡ソ今ノ四十九萬六百二十餘坪、南北七百六十六間、三尺六寸餘、東西六百四十四間餘、ノ廣キニ及フ、其中央ニ皇宮アリ、金殿、瓊樓、盤鬱、飛輦、官省相併ヒ、廣衢交通、規模ノ雄壯ナル、造管ノ巨麗ナル、實ニ未曾有ノ宮城ニシテ、千歲不遷ノ帝京タル、亦宜ナラスヤ、

朱雀門

大内裏ノ南面ニ在リ、朱雀大路ニ當リ、外造ニ羅城門ト相對シ、内ハ直ナニ應天門ニ通ス、其廣サ南北四丈六尺、東西十五丈六尺、條石板石ヲ以テ築成ス、以下基地築成者同シ、南北石階、廣サ十丈五級、門廣サ東西七間、十四丈、戸五間、二重閣制、瓦屋、鴟尾、丹腹粉壁、閣上ノ中央ニ額ヲ掲ケ、朱雀門ト曰フ、美福門

朱雀門ノ東ニ在リ、基廣南北三丈、東西七丈、門南北二間、二丈、東西五間、六丈、戸三間、製作、朱雀門ニ同シ、閣上額ヲ掲ケ、美福門ト曰フ、其壬生大路ニ當ルヲ以テ、壬生御門ト稱ス、皇嘉門

朱雀門ノ西ニ在リ、其製美福門ト同シ、額ヲ掲ケ、皇嘉門ト曰フ、以上ヲ南面ノ三門トス、陽明門

東西ノ第一門タリ、屋制五間、戸三間、瓦屋、鴟尾、丹腹粉壁、楣上額ヲ掲ケ、陽明門ト曰フ、以下額ヲ掲ケ、其門之ヲ近衛御門ト稱ス、此門ハ、東西ノ正門ニシテ、其門外車輿ノ列次ニ至ルマテ、皆其法アリ、蓋シ當時桃花銅駝二坊ハ、最モ繁榮ノ地ニシテ、皇族藤原氏ヲ始メ、貴族權門ノ此ニ住スル

者多キヲ以テナリ、

待賢門

陽明門ノ南ニ在リ、其制陽明門ニ同シ、以下其制皆同シキ、之ヲ中御門ト稱ス、

郁芳門

待賢門ノ南ニ在リ、大炊御門ト稱ス、以上東面ノ三門トス、

殷富門

西面ノ正門ナリ、西近衛御門ト稱ス、

藻壁門

殷富門ノ南ニ在リ、西中御門ト稱ス、

談天門

藻壁門ノ南ニ在リ、右馬寮御門ト稱ス、

達智門

以上西面ノ三門トス、北面ノ東ノ門ナリ、

偉鑿門

達智門ノ西ニ在リ、不開ノ御門ト稱ス、

安嘉門

偉鑿門ノ西ニ在リ、

上東門

以上北面ノ三門トス、之ヲ合シテ皇城ノ十二門ト稱ス、

上西門

陽明門ノ北ニ在リ、屋ナシ、土御門ト稱ス、

殷富門

殷富門ノ北ニ在リ、屋ナシ、西土御門ト稱ス、

拾芥抄ニ曰ク、朱雀門ハ、伴氏之ヲ營ス、美福門ハ、若狹越中之ヲ營シ、壬生氏之ヲ監ス、郁芳門ハ、伊豫的氏、待賢門ハ、播磨建部氏、陽明門ハ、備前山氏、談天門ハ、阿波玉手氏、藻壁門ハ、但馬佐伯氏、殷富門ハ、尾張伊福部氏、安嘉門ハ、若狹越中海犬甘氏、偉鑿門ハ、丹波猪飼氏、達智門ハ、備中備後丹治比氏之ヲ監スト、朱雀門ハ、正門ナルヲ以テ、蓋シ造宮職ニテ之ヲ作り、宮門ヲ衛ル世職ナルヲ以テ、伴氏之ヲ監シタルナルヘシ、門ノ

事ハ、記セサルヲ以テ詳ナラス、其後諸門ノ號ニ推字ヲ用ヰルニ及ヒ、其監造者ノ氏ヲ推字ニ充テ、門號トシテ其功ヲ存セシナルヘシ、諸門皆額アリ、其門號ヲ標ス、其字ハ嵯峨帝宸翰、僧空海、橋逸勢、小野道風等一時ノ名筆ニ係ル、其後修理アル毎ニ、皆時ノ名筆ニ勅シテ之ヲ修理セシム、其額本今猶存スル者アリ、

門衛ハ、令式ニ其制規アリ、朱雀門ハ、左右衛門府共ニ之ヲ衛ル、東ノ諸門ハ、左衛門府、西ノ諸門ハ、右衛門府、偉鑿門ハ、左右衛門交替之ヲ衛ル、此諸門ハ、其後或ハ大風ノ爲メニ顛倒シ、或ハ火災ニ罹リ、烏有トナリシコト數回ナリシカ、或ハ修理職ニ勅シテ、又諸國ニ課シテ、時々再造アリ、王室式微ニ及ヒ、大内裏ト共ニ荒廢セリ、

垣

大内裏ノ周垣ニシテ、土屏瓦屋、基廣七尺、高詳ナラス、垣ハ大内裏荒廢後モ土壘トナリテ、處々遺存セシコトハ、明德記ニ記セリ、

堀地

外垣ノ基ノ中心ヨリ、湟涯ニ至ル、二丈六尺五寸ナリ、

湟

廣サ八尺、水源ハ愛宕郡ノ北山ヨリ出テ、皇宮ニ至リ、御溝トナル、官

ノ東西ニテハ、大宮川ト稱シ、二條ニテハ耳敏川ト稱ス、耳敏川ハ、大破式ヲ修スル所ナリ、

橋

石ヲ以テ造ル、諸門及ヒ掖門外ノ御溝ニ架ス、廣サ各其門ノ大小ニ依ル、

仗舍

朱雀門外ノ左右ニ在リ、其形ニ依リ、曲仗舍ト稱ス、大禮ノ日、儀仗ヲ立ル所ナリ、

平安京及大内裏舊趾實測記事

平安京ハ、千年ノ久シキ、依然現在シ、益隆昌ナリト雖モ、延曆造營ノ規制ハ、大ニ變遷轉換シテ、平安京ハ、其左京ノミヲ存シ、右京ハ、一帯ニ村落トナリ、大内裏ハ、全ク變更シ、其舊趾ハ、數百年來、已ニ市街トナリ、今日ニ至テハ、其官趾タルヲ知ル者ナキニ至レリ、今回建都紀念祭ヲ修行スルニ付テハ、桓武帝ノ英畧宏謨ヲ仰キ、其建都造宮ノ規制ヲ明ニシ、以テ延曆ノ壯圖ヲ今日ニ示スハ、必要缺クヘカラサル事タリ、然ルニ古來平安京ノ事ヲ記スル書籍少カラスト雖モ、大抵其舊時ノ物ヲ記シ、又ハ其名勝舊跡ヲ錄スルニ過キスシテ、延曆ノ舊趾ヲ明治ノ昭代ニ照ラシ、千年ノ規模ヲ今日ノ眼前ニ示ス者ナキヲ以テ、更ニ平安京及ヒ大内裏ノ舊趾ヲ測定考査センコトヲ企圖セリ、然レトモ數百年湮滅變遷セシ後ニ在リテ、其實蹟ヲ索ムルハ、最モ難事タルヲ以テ、其方法ヲ立ツルニ苦メリ、因テ思フニ、平安京及ヒ大内裏ハ、規模帙然一定シ、其大小廣狹、長短遠近、各繩尺アリ、井々トシテ紊レス、一隅ヲ舉テ之ヲ覆スレハ、則テ全局ノ規模整然トシテ、視ルヘシ、猶萬里航海中、風濤險惡、大洋晦暝ノ時ト雖モ、苟モ一點ノ宿星ヲ認メ得レハ、經緯ノ度數、海洋ノ遠近、諸ヲ掌中ニ指スカ如キト一般ニシテ、延曆造營ノ舊趾ニ於テ、其現存ノ者ヲ得テ、之ヲ起點トシ、現時ノ實測圖ヲ經トシ、延喜式ノ